平成 29 年度 文部科学省 専修学校による地域産業中核的人材養成事業

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する 学び直しプログラムの開発

事業成果報告書

平成30年2月

学校法人福田学園 大阪保健医療大学

本報告書は、文部科学省の生涯学習振興事業委託費による委託事業として、学校法人福田学園大阪保健医療大学が実施した平成29年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

目次

事業概要報告	告編	4
1. はじめん	Z	5
1.1. 事業	業の概要と目的	5
1.1.1.	全体計画	5
1.1.2.	今年度事業の取り組み	6
1.2. 事業	巻の実施意義	7
1.2.1.	背景~障害者スポーツの現状・動向	7
1.2.2.	背景~障害者スポーツ支援の専門人材	9
1.3. 事業	巻の推進体制	10
1.3.1.	概要	10
1.3.2.	実施委員会	11
1.3.3.	下部組織	12
1.3.4.	実施委員会・分科会の開催	13
2. 事業活動	助の概要	16
2.1. 障力	ぶい者スポーツ支援学び直しプログラムの改訂	16
2.1.1.	モデルカリキュラムの改訂	16
2.1.2.	e ラーニング教材のバージョンアップ	17
2.2. = =	ラボレーション支援環境の再整備と運用	18
2.3. 実記	正講座の実施・検証	19
2.3.1.	スクーリング実習の充実化	19
2.3.2.	実証講座の概要と目的	20
2.3.3.	対象者	20
2.3.4.	実施の流れ・時期等	21
2.3.5.	実施結果	21
2.3.6.	検証	27
e ラーニング	グ教材制作報告編	32
1. 概要		33
1.1. 内容	·····································	33
1.2. 改善	善ポイントと方法	34
	勺	
2. モデルフ	カリキュラム	39
2.1. 科目	目「障がい者スポーツの概要」	39

2.2.	科目	「障がい者スポーツの指導と運営」	41
2.3.	科目	「障がい者スポーツ指導と運営の実際」	46
2.4.	科目	「障がい者スポーツ研究の実際」	49
2.5.	科目	「障がい者スポーツに関連する法制度」	52
3. e	ラーニ	-ング教材の基本仕様	54
3.1.	学習	7環境	54
3.2.	e ラ	ーニング教材の画面仕様	54
3.3.	e ラ	ーニング教材の制作環境	55
3.4.	e ラ	ーニング教材の制作手順	57
4. =	ラボレ	⁄ーション支援環境	59
4.1.	概要	Ţ	59
4.1	.1.	目的	59
4.1	.2.	コラボレーション支援環境構築の基本指針	59
4.2.	活用	月の方策	60
4.3.	利用	の実際	61
4.3	3.1.	新規利用登録	61
4.3	3.2.	マイホーム	63
4.3	3.3.	コミュニティ	63
4.4.	設置	こしたコミュニティと活動	67
実証講	座実施	西報告編	70
1. 実	証講座	医の概要	71
1.1.	教育	「内容	71
1.1	.1.	e ラーニング	71
1.1	.2.	スクーリング実習	72
1.2.	実証	E講座の目的	72
1.3.	対象	₹者等	72
1.3	3.1.	対象者	72
1.3	3.2.	実証講座の参加者	73
1.3	3.3.	実施の流れ・時期等	73
1.4.	検証	E方法	74
2. 実	施内容	F	75
2.1.	e ラ	ーニング教材の内容	75
2.1	.1.	科目「障がい者スポーツの概要」	75
2.1	.2.	科目「障がい者スポーツの指導と運営」	76
2.1	.3.	科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」	77
2.1	.4.	科目「障がい者スポーツ研究の実際」	78

	2.1.5.	科目「障がい者スポーツに関連する法制度」	78
	2.2. e =	ーニング教材の仕様	79
	2.2.1.	画面仕様	79
	2.2.2.	利用の流れ・画面の遷移	79
	2.3. スク	'ーリング実習	83
	2.3.1.	スクーリング実習の目的	83
	2.3.2.	今年度の特徴	83
	2.3.3.	教育内容	83
3.	実施結果	1	85
	3.1. 概要	-	85
	3.2. 受諱	靖者アンケートの結果	86
	3.3. 「É	己評価表」による受講者自己評価結果の分析	92
	3.3.1.	「自己評価表」の実施方法と内容	92
	3.3.2.	「スポーツを直接指導すること」への自己評価	95
	3.3.3.	「プロジェクトやイベントを運営すること」への自己評価	96
	3.3.4.	「プロジェクトやイベントを企画すること」への自己評価	97
	3.3.5.	「プロジェクトやイベントの成果を示すこと」への自己評価	98
	3.4. スク	'ーリング実習「実施報告」の検証	99
	3.4.1.	実施結果	99
	3.4.2.	「実施報告」	101
	3.5. e =	ーニング学習ログ分析	135
	3.5.1.	アクセス状況	135
	3.5.2.	講義動画の視聴状況	139
	3.6. 35	・ボレーション支援環境の利用状況	148
	3.6.1.	運用方法	148
	3.6.2.	利用状況	148
4.	まとめ		149
	4.1. 成果	1	149
	4.2. 課題	うとこれからの展開	150
	4.3. 資料	ł	151

事業概要報告編

1. はじめに

1.1. 事業の概要と目的

1.1.1. 全体計画

(1) 事業の背景と概要

近年、障がい者スポーツは高度な「技」を競い合う競技スポーツから余暇を楽しむスポーツや健康増進のためのスポーツまで、そのすそ野が急速に広がりつつある。しかし、現状ではスポーツ実施の目的や障害種別、ライフステージに応じた適切な支援ができる専門人材は充足しておらず、その育成が障がい者スポーツの今後の発展の課題となっている。

このような現状を踏まえ、平成27年度から29年度の3カ年に亘って、理学療法士・作業療法士が、その専門性を土台として活かしながら新たに障がい者スポーツ支援に係る専門知識とスキルの習得を目的とする「障がい者スポーツ支援学び直しプログラム」の開発と実証的実施の取り組みを行うこととした。

リハビリテーションを専門とする理学療法士・作業療法士の専門性と障がい者スポーツ 支援の間には多くの接点があり、適切なカリキュラムを組むことで障がい者スポーツ支援 の実践力の獲得が可能となる。また、このような専門性を新たに得ることは、理学療法士・ 作業療法士にとっても職域の拡大やキャリアアップにつながっていくなど、そのメリット も大きい。

この「障がい者スポーツ支援学び直しプログラム」は、現役の理学療法士・作業療法士という多忙な実務者を対象とすることから、時間や場所の制約が少なく学習者自身のペースで学ぶことのできる e ラーニングとスクーリングによる集合研修で構成されている。 e ラーニングでは主に専門知識、スクーリングでは支援に係る実践スキルの習得を狙いとしている。

以下、過去2年間の取り組み内容・成果と今年度事業の主な活動について概略的に報告する。

(2) 平成 27 年度事業

平成27年度事業では、教育プログラム全体の企画・設計を行い、モデルカリキュラムを 策定すると共に、障がい者スポーツ支援の専門的な知識を自己学習のスタイルで身につけ るeラーニング教材を制作した。

モデルカリキュラムは、障がい者スポーツの指導と運営を中心に、障がい者スポーツ支援 に係る専門知識を基礎から研究レベルまで系統的に学ぶ内容で構成されている。 e ラーニ ング教材は、このモデルカリキュラムに基づく科目・学習単元ごとの講義動画で組み立てら れている。

(3) 平成 28 年度事業

平成 28 年度事業では、平成 27 年度事業の成果を基盤として教育プログラムの充実化に向けた取り組みを行った。具体的には、スクーリングにおける実習カリキュラムの策定、eラーニング教材の拡充、これらを活用した実証講座の実施・検証である。

スクーリングにおける実習カリキュラムは、実際の障がい者スポーツ大会での試行的な実習の実施を通して、効果的なカリキュラムの策定を行った。障がい者スポーツ支援の実践力を得るためには、e ラーニングによる知識学習のみでは限界が否めない。e ラーニングで獲得した知識を障がい者スポーツ支援の実際の場面で適用・統合化する学習プロセスが不可欠であり、それがスクーリングの狙いである。

e ラーニング教材については、平成 27 年度事業では扱われなかった障がい者アスリート支援の専門知識・技術をテーマとする学習単元を大幅に追加した。これにより、障がい者スポーツ支援の幅広い領域に対応できる内容へと拡充化した。

さらに、e ラーニング教材と策定した実習カリキュラムに即したスクーリングによる実証講座を現役の理学療法士・作業療法士に対して実施し、その結果に対する検証を行った。これにより、「障がい者スポーツ支援学び直しプログラム」の有用性・有効性と共に改善すべき課題点を確認することができた。

1.1.2. 今年度事業の取り組み

平成27・28年度事業を通して、障がい者スポーツ支援の学び直しプログラムは具体化され、実証講座の実施・検証から教育プログラムの有用性・有効性を確認することができたが、その一方で再度検討すべき事項や改善すべき点も明らかとなった。また、講座の運営方法に関して見直しが必要となる事項も見出された。

取り組みの最終年となる今年度は、これらの改善事項を中心に e ラーニング教材のバージョンアップを行うと共に、より実効性の高い教育プログラムの運営方法を整備し実施することとした。その具体的な取り組みは以下の通りである。

1) 障がい者スポーツ支援学び直しプログラムの改善

学び直しプログラムの改善・質向上を目的に、モデルカリキュラムの改訂とeラーニング教材のバージョンアップを行った。具体的には、スキマ時間を活用するなど学習者にとって学びやすいeラーニング教材とするため、モデルカリキュラムを改訂し各学習単元のコマ時間の短縮化・統一化を行い、講義シナリオの再構成と講義の再収録を実施した。再収録では、パワーポイント資料の鮮明化など講義映像の質向上も図った。また、パワーポイント資料(PDF)のダウンロード環境の整備を実施した。

2) コラボレーション支援環境の再整備と運用

平成28年度事業において、eラーニング教材の視聴率やスクーリング実習の参加を促すことを狙いとする専用のSNSサイト「コラボレーション支援環境」について検討し、その

試行版を設定したが、期間的な理由から実運用には至らなかった。今年度はこれを再整備・ 運用し、e ラーニングによる自己学習やスクーリング実習で学ぶ受講者をネットワーク上 でもサポートしていく環境を整えた。

3) スクーリング実習の充実化と実証講座の実施・検証

e ラーニングとスクーリング実習による「障がい者スポーツ支援学び直しプログラム」の 実証講座を実施し、その結果に対する検証を行った。

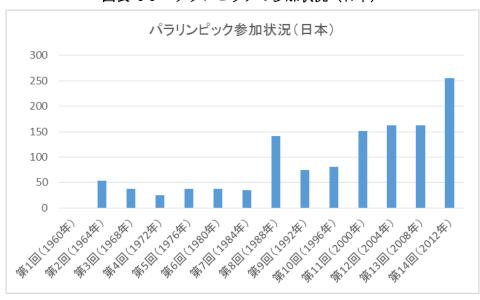
平成28年度事業でスクーリング実習は受講者から高評価を得られたが、複数回参加したいなどの要望も多かった。そこで今年度は開催回数を増やし、複数回参加できるよう学習機会の拡充を図ることとした。

1.2. 事業の実施意義

1.2.1. 背景~障害者スポーツの現状・動向

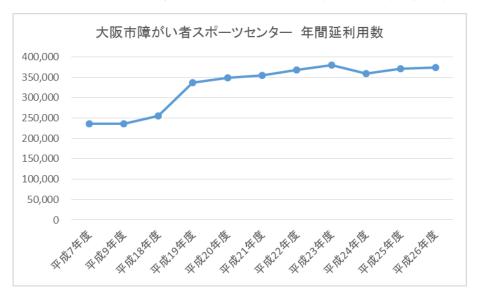
■障害者スポーツの広がり 競技スポーツから生涯スポーツまで

2020 年、オリンピック・パラリンピックが東京で開催されるが、近年障害を持ったアスリートが競い合うパラリンピックに対する注目が増している。前回のパラリンピックの参加選手数は 4,000 人を大きく上回っており、日本の場合も過去最高の 250 人を突破している。一般に障害者によるスポーツは、このような競技スポーツの他、機能回復を目的とするリハビリテーションスポーツや運動を楽しむ生涯スポーツ (市民スポーツ) に分けられるが、最近では徐々にではあるが、日常生活を楽しみ、健康増進を図ろうとする生涯スポーツが着実に広がりつつある。



図表 1-1 パラリンピックの参加状況(日本)

次の図表は大阪市の障害者スポーツセンターにおける年間利用者数(延人数)の推移だが、過去 10 年間で約 1.5 倍の人数増となっている。また、日本障がい者スポーツ協会主催の全国障害者スポーツ大会の参加者数は毎年 3,000 人以上という水準で推移しており、この数値からもスポーツが障害者の生活に浸透している状況が窺える。



図表 1-2 大阪市の障害者スポーツセンターの年間利用者数(延べ)

■障害者スポーツの促進をめぐる国の動き

このような障害者スポーツの気運の高まりを国の政策も後押ししている。

昭和 36 年制定のスポーツ振興法を 50 年ぶりに全面改正し制定されたスポーツ基本法では、障害者スポーツについて「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」という基本理念を明確に掲げている。これに則して策定された「スポーツ基本計画」では、障害者のスポーツ参画を促進する施策が講じられるなど、障害者スポーツの振興に向けた取組や環境整備が着実に進んでいる。また、平成 26 年度からは全国障害者スポーツ大会などのスポーツ振興の観点が強い障害者スポーツ事業が厚生労働省から文部科学省に移管され、スポーツ政策としての取組が一体的に進められている。

■障害者のスポーツ実施に対するニーズ

障害者スポーツの広がり、浸透の背景には、スポーツの実施に対する障害者やその家族の高いニーズがある。北陸地方で障害者を対象に実施された調査によれば、社会参加や余暇を過ごすための活動として「運動」を希望するという回答は、知的障害者が 39%、精神障害者も 29%と高い割合となっている。障害者にとって、スポーツの実施には身体を動かし健康維持・増進を図る、あるいは日常生活を楽しむ活動だけでなく、地域社会への参加という

側面もあり、その意義は多面的で複合的である。そのためか、保護者の側にも「余暇をスポーツで過ごしてほしい」と願う意見が多く、知的障害者では35%、精神障害者も29%となっている。

この他、大阪保健医療大学が障害者福祉施設を対象に実施した調査においても同様に、スポーツ実施に対する強いニーズが確かめられている。具体的には、施設利用者の半数以上の家族からスポーツの実施を望む回答があり、80%の施設から今後、スポーツ活動に取り組んでいきたい」という意向を確認している。

1.2.2. 背景~障害者スポーツ支援の専門人材

■障害者スポーツ支援の専門人材の不足

上述のように、障害者のスポーツ実施に対する高まるニーズに対して、これを支援できる 専門性を有した人材は不足している。大阪保健医療大学が平成24年度に実施した調査では、 障害者福祉施設の80%が「今後、スポーツに取り組んでいきたい」という意向を持つもの の、70%が「スポーツの実施に困難を感じている」と回答している。その理由として多いの は「適切なスポーツ指導者・支援者がいない」とする声である。このような結果から、施設 の現場では、スポーツと障害の両面について専門的な知識・スキルを持ち、的確に障害者を サポートできる人材に対する強い需要があることがわかる。

■リハビリ専門職の学び直しによる障害者スポーツ支援の専門人材の養成へ

これからの障害者スポーツの普及・発展を見据えると、競技スポーツ、リハビリテーションスポーツ、生涯スポーツといった各局面において、その目的や特性、あるいは障害の種別、ライフステージなどに応じた的確なサポートが実施できる専門人材の養成・確保が不可欠となる。

リハビリテーションの専門職である理学療法士・作業療法士にとって、その専門性と障害者スポーツの間には多くの接点や共通領域がある。そのため、適切なカリキュラムを設定することで、短期のうちに障害者スポーツ支援に係る実践力を習得することが見込まれる。また、このような専門性の獲得は、理学療法士・作業療法士にとっても活動領域の拡大、新たな職域への展開でありキャリアアップへとつながる。

1.3. 事業の推進体制

1.3.1. 概要

本事業の推進主体として、学校法人福田学園大阪保健医療大学を代表機関とする実施委員会を組織した。実施委員会は、理学療法士・作業療法士の養成施設、障がい者スポーツ関連組織・団体、障害者福祉施設、支援学校等を構成機関とする産学連携体制としている。ここでは、事業計画に基づき、事業活動の具体化・実施等に関しての重要事項の検討、決定を行うと共に、開発・実施・検証という事業活動全体のマネジメントを担当した。

以下、実施委員の所属する機関を一覧で示す。

図表 1-3 実施委員会の構成機関

	構成機関(学校・団体・機関等)の名称	都道府県名
1	大阪保健医療大学(代表機関)	大阪府
2	大阪リハビリテーション専門学校	大阪府
3	大阪府立すながわ高等支援学校	大阪府
4	社会福祉法人北摂杉の子会	大阪府
5	介護老人保健施設 恵泉	兵庫県
6	障がい者支援センター「てらだ」	兵庫県
7	石川県立高松病院	石川県
8	東京都理学療法士協会	東京都
9	株式会社エルアイ武田	大阪府
10	専門学校金沢リハビリテーションアカデミー	石川県
11	はくほう会医療専門学校赤穂校	兵庫県
12	高知リハビリテーション学院	高知県
13	ハーベスト医療福祉専門学校	兵庫県
14	東京医療学院大学	東京都
15	聖隷クリストファー大学	静岡県

実施委員会の下部組織として、「障がい者スポーツ支援学び直しプログラム」の開発に係る実務を担当する開発分科会、スクーリング実習の企画・準備・運営等に係る実務を担当する実施分科会、事業活動・成果を検証する検証分科会を設けた。

1.3.2. 実施委員会

実施委員会の構成員を以下に一覧で示す。委員会を統括する委員長は、大阪保健医療大学の足立一が担当した。

図表 1-4 実施委員会の構成員

	氏名	所属・職名
1	足立 一 (委員長)	大阪保健医療大学
2	中野 尚美	学校法人福田学園
3	辻 郁	大阪保健医療大学
4	島 雅人	大阪保健医療大学
5	井口 知也	大阪保健医療大学
6	大友 健治	大阪リハビリテーション専門学校
7	吉本 早織	大阪府立すながわ高等支援学校
8	小林 哲理	社会福祉法人北摂杉の子会
9	北田 泰敏	介護老人保健施設 恵泉
10	大谷 将之	障がい者支援センター「てらだ」
11	濱西 夕子	専門学校金沢リハビリテーションアカデミー
12	大森 千恵	株式会社エルアイ武田
13	亀山 一義	はくほう会医療専門学校赤穂校
14	内田 学	東京医療学院大学
15	竹中 有	ハーベスト医療福祉専門学校
16	鈴木 達也	聖隷クリストファー大学
17	木村 奈緒子	東京医療学院大学
18	林 弘康	東京都理学療法士協会副会長スポーツ局長
19	西野 愛	高知リハビリテーション学院
20	西川 拡志	石川県立高松病院
21	大野 実沙紀	多機能型事業所むく

1.3.3. 下部組織

実施委員会の下部組織とその構成員を以下に一覧で示す。

図表 1-5 開発分科会

	氏名	所属・職名
1	辻 郁 (責任者)	大阪保健医療大学
2	吉本 早織	大阪府立すながわ高等支援学校
3	小林 哲理	社会福祉法人北摂杉の子会
4	北田 泰敏	介護老人保健施設 恵泉
5	大谷 将之	障がい者支援センター「てらだ」
6	大野 実沙紀	多機能型事業所むく
7	大森 千恵	株式会社エルアイ武田
8	西川 拡志	石川県立高松病院

図表 1-6 実施分科会

	氏名	所属・職名
1	島 雅人(責任者)	大阪保健医療大学
2	大友 健治	大阪リハビリテーション専門学校
3	吉本 早織	大阪府立すながわ高等支援学校
4	小林 哲理	社会福祉法人北摂杉の子会
5	北田 泰敏	介護老人保健施設 恵泉
6	大谷 将之	障がい者支援センター「てらだ」
7	濱西 夕子	専門学校金沢リハビリテーションアカデミー
8	大野 実沙紀	多機能型事業所むく
9	大森 千恵	株式会社エルアイ武田
10	亀山 一義	はくほう会医療専門学校赤穂校
11	内田 学	東京医療学院大学
12	竹中 有	ハーベスト医療福祉専門学校
13	鈴木 達也	聖隷クリストファー大学
14	木村奈緒子	東京医療学院大学
15	林 弘康	東京都理学療法士協会副会長スポーツ局長

16	西野 愛	高知リハビリテーション学院
17	西川 拡志	石川県立高松病院

図表 1-7 検証分科会

	氏名	所属・職名
1	井口 知也(責任者)	大阪保健医療大学
2	濱西 夕子	専門学校金沢リハビリテーションアカデミー
3	亀山 一義	はくほう会医療専門学校赤穂校
4	内田 学	東京医療学院大学
5	竹中 有	ハーベスト医療福祉専門学校
6	鈴木 達也	聖隷クリストファー大学
7	木村奈緒子	東京医療学院大学
8	林 弘康	東京都理学療法士協会副会長スポーツ局長
9	西野 愛	高知リハビリテーション学院

1.3.4. 実施委員会・分科会の開催

本事業の活動期間中における実施委員会及び分科会の開催状況を以下にまとめて報告する。

図表 1-8 実施委員会の開催

第1回 実施委員会

- 〇日程 平成 29 年 6 月 29 日
- ○場所 学校法人福田学園 大阪保健医療大学

○主な審議事項

- 委員長挨拶
- · 委員自己紹介
- ・ これまでの流れと今年度の計画
- ・ eラーニングとSNS
- · 意見交換

○主な決定事項

- 事業計画の承認
- · 実証講座計画の承認

・ e ラーニング・SNS利用方法等の確認・承認

第2回 実施委員会

- ○日程 平成 29 年 9 月 19 日
- ○場所 インターネット会議 (※委員のスケジュール調整が難航したため委員間でのメールのやりとりで意見交換を実施)

○主な審議事項

- ・ スクーリング実習の経過報告
- · e ラーニングの利用状況報告
- ・ 動画コンテンツ収録時における委員長の立ち合い・指導の報告

○主な決定事項

- · e ラーニングの視聴促進の実施
- ・ SNSへの参加促進の実施
- ・ スクーリング実習への参加者募集促進の実施

第3回 実施委員会 ※分科会との合同開催・成果報告会も兼ねて実施

- 〇日程 平成 30 年 1 月 31 日
- ○場所 学校法人福田学園 大阪保健医療大学

○主な審議事項

- ・ 過去2年間の事業の経緯と今年度の取り組み
- ・ 実証における e ラーニングの利用状況
- · 2017年度版 e ラーニング
- · 意見交換

○主な決定事項

- ・ 今年度事業の成果の確認
- ・ 今後の取り組みの活性化策の検討

図表 1-9 分科会の開催

第1回 実施分科会

- ○日程 平成 29 年 6 月 29 日
- ○場所 学校法人福田学園 大阪保健医療大学

○主な審議事項

- ・ 実施する実習カリキュラム
- スクーリング実習の実施スケジュール

○主な決定事項

- ・ 実習カリキュラムの承認
- ・ スクーリング実習の実施スケジュールの承認
- ・ スクーリング実習の実施日程等の調整・準備・活動の確認

第1回 開発分科会

- 〇日程 平成 29 年 6 月 29 日
- ○場所 学校法人福田学園 大阪保健医療大学
- ○主な審議事項
 - · e ラーニング教材の改訂内容
 - ・ e ラーニング教材の改訂 (PP資料とシナリオ、収録) の役割分担
 - ・ 収録業者への指導

○主な決定事項

- · e ラーニング教材改訂内容の承認
- · e ラーニング教材改訂の役割分担の承認
- ・ 委員長による収録業者への指導の承認

第1回 検証分科会

- ○日程 平成 29 年 6 月 29 日
- ○場所 学校法人福田学園 大阪保健医療大学
- ○主な審議事項
 - ・ 実証講座における受講者スキルチェックについて
 - ・ スキルチェックの実施方法について
- ○主な決定事項
 - スキルチェックの内容の承認
- ・ スキルチェックの実施方法の承認
- 第2回 実施分科会・開発分科会・検証分科会(合同)
- ※実施委員会との合同開催・成果報告会も兼ねて実施
- ○日程 平成30年1月31日
- ○場所 学校法人福田学園 大阪保健医療大学
- ○主な審議事項
 - ・ 過去2年間の事業の経緯と今年度の取り組み
 - ・ 実証における e ラーニングの利用状況
 - · 2017年度版 e ラーニング
 - · 意見交換
- ○主な決定事項
 - 今年度事業の成果の確認
 - ・ 今後の取り組みの活性化策の検討

2. 事業活動の概要

今年度の事業では以下の活動を実施した。

- ① 障がい者スポーツ支援学び直しプログラムの改善
 - 1) モデルカリキュラムの改訂
 - 2) e ラーニング教材のバージョンアップ
- ② コラボレーション支援環境の再整備と運用
- ③ 実証講座の実施・検証

2.1. 障がい者スポーツ支援学び直しプログラムの改訂

2.1.1. モデルカリキュラムの改訂

平成 28 年度事業に実施した実証講座の結果検証を通して、学び直しプログラムの内容に対する受講者の高い評価を得ることができた。これにより、カリキュラムが取り上げている障がい者スポーツ支援に係る専門知識・技術の領域・範囲やレベルが目標とする水準となっており、学び直しプログラムとしての有用性・有効性を確認することができた。

学び直しプログラムの全体に対しては高評価であったが、細部においては改善すべき点が明らかとなった。最も多かった改善要望は、e ラーニング教材の視聴単位である各コマの時間数にばらつきがあり、時間数の長いコマでは学習の中断を余儀なくされるという点であった。

e ラーニング教材の制作にあたっては、当初各コマ10分程度という方針の下で進めたが、 結果的にこれが徹底されず、長いものでは40分を超えるコマもあった。

そこで、自己学習の継続や集中力の維持を図る狙いから、各コマの視聴時間が 10 分前後 となるよう全体を再編した。また、この再編に伴い、一部のコマについて統廃合を実施し、 より学びやすい構成へと改めた。

No	科目	平成 28 年度		平成 29 年度			
NO		単元数	コマ数	単元数	コマ数		
1	障がい者スポーツの概要	4	10	4	7		
2	障がい者スポーツの指導と運営	3	25	3	29		
3	障がい者スポーツ指導と運営の実際	3	18	3	17		
4	障がい者スポーツ研究の実際	3	11	3	14		
(5)	障がい者スポーツに関連する法制度	5	5	5	5		
	計	18	69	18	72		

図表 2-1 改訂内容(単元数とコマ数)

上の表は、モデルカリキュラムの各科目を構成する学習単元とコマの数を平成 28 年度事業で制作した e ラーニング教材と比較したものである。科目及び学習単元について変更は行わなかったが、コマについては科目「障がい者スポーツに関連する法制度」以外の 4 科目で見直しを行い、コマの再編成を実施した。その結果、平成 28 年度はコマ数 69 であったが、今年度の事業では 72 コマに増えている。この詳細については、本報告書「e ラーニング教材制作報告編」を参照されたい。

2.1.2. e ラーニング教材のバージョンアップ

モデルカリキュラムの改訂に合わせてeラーニング教材のバージョンアップを実施した。 改訂によるコマの統廃合及び 1 コマの視聴時間の統一化に対応するために、e ラーニング 教材全編の講義シナリオの見直し・書き直しを行い、講義映像を再収録した。これと並行し て、板書に相当するパワーポイント資料や背景の鮮明化など、より快適に視聴できるように 映像の質向上も試みた。

また、平成 28 年度事業の実証講座実施後に受講者から要望が多かったパワーポイント資料のダウンロードについても、後述のコラボレーション支援環境を利用することで可能となるようにした。



図表 2-2 e ラーニング教材の画面例

図表 2-3 e ラーニング教材の画面例

2.2. コラボレーション支援環境の再整備と運用

平成 28 年度事業で検討・試行版の設定を行った専用SNS「コラボレーション支援環境」を再整備し運用した。これは、遠隔の受講者同士、講師やコーチ、スポーツイベントの運営責任者などを相互にインターネット上で結ぶ情報共有・交流のSNSサイトで、eラーニングによる自己学習やスクーリング実習で学ぶ受講者を継続的にサポートしていくことが目的である。ここでは、学習内容(e ラーニング教材の内容)についてやりとりをするコミュニティの他、障がい者スポーツイベントに関する情報提供・共有を行うコミュニティ、e ラーニング教材の資料を閲覧・ダウンロードできるコミュニティを設置した。具体的な活用の方策は以下の通りである。

■情報交換・共有

- (1) 科目やカリキュラム等に関する受講者の質問に対して、担当講師等が回答する。
- (2) 障がい者スポーツ支援の経験を有する理学療法士・作業療法士が受講者の相談を受ける。
- (3) 受講者同士が感想や意見等について情報交換する。

■情報提供

(1) スクーリング実習の案内や開催されたスクーリング実習の実施の様子等を報告す

る。

- (2) e ラーニング教材で使用している資料 (パワーポイントのスライド) をダウンロードする。
- (3) その他、学習支援に有用な情報を閲覧できるようにする。

以下にコラボレーション支援環境の画面例を掲載する。これは、ユーザー各人に提供される「マイホーム」と呼ばれる拠点となる画面で、ここから各コミュニティを辿っていく。その詳細については、本報告書「eラーニング教材制作報告編」を参照されたい。

⊠#@ マイホーム メンバー検索 コミュニティ検索 設定変更 友人を招待する ログアウト ホーム マイフレンド プロフィール確認 プロフィール編集 ▶ INFORMATION コミュニティ最新書き込み 08月28日… カンボジア スポーツ特化スタディツア(0) (スポーツイ ベント) » 07月03日… <u>科目「障がい者スポーツに関連する法制(1)</u> (アーカイ 管理者 (0) 07月03日… <u>科目「障がい者スポーツ研究の実際」(1)</u> (アーカイブ) 写真を編集する > 07月03日… 科目「障がい者スポーツの指導と運営の(4)(アーカイ プロフィール確認 07月03日… <u>科目「障がい者スポーツの指導と運営」(14)</u> (アーカイブ) ⇒ もっと見る コミュニティ最新イベント 07月23日… ユニファイドサッカー練習会 [in東京都(0)] (スポーツ イベント) ント(13) (3) 07月04日… <u>障がい児サッカースクールin金沢(0)</u> (スポーツイベン ⇒ 全てを見る(3) 07月04日… 2017年第2回スペシャルオリンピ(0) (スポーツイ ベント) 07月04日… 第36回スポーツフェスタ2017大阪(0) (スポーツイベン **b**) 07月04日… SO大阪 サッカープログラム(0) (スポーツイベント)

図表 2-4 コラボレーション支援環境の画面例

2.3. 実証講座の実施・検証

2.3.1. スクーリング実習の充実化

スクーリング実習は、e ラーニング教材による自己学習で獲得した専門知識を障がい者 スポーツ支援の場面で実際に適用し統合化するプロセスであり、実践的なスキルの習得に 不可欠な学びである。このスクーリング実習は平成 28 年度事業でも実施したが、そこでは 受講者の高い評価・満足度を確かめることができた。その一方で、実践スキルの習得に向けて複数回の参加を希望する意見も多数寄せられたことから、今年度事業では実施期間を長く設定して回数を増やし、複数回参加できるように学習機会の拡充を図ることとした。具体的には、平成28年度事業では10月から12月の3カ月間に8回実施であったのに対して、今年度事業では5月から12月の8カ月間とし計14回開催する計画とした。

2.3.2. 実証講座の概要と目的

障がい者スポーツ支援に係る専門知識・技術の習得や障がい者スポーツ支援に関心を有する現役の理学療法士・作業療法士を対象に、本事業で開発した学び直しプログラムを実証講座として実施した。具体的には、受講者各人にeラーニング教材による自己学習で専門知識と技術を学び直してもらうと共に、スクーリング実習の受講と通して、障がい者スポーツ支援の実践について体験的に学習してもらうこととした。

実証講座の実施プロセスの中で、受講者自身による障がい者スポーツ支援の専門知識・技術に係る自己評価や受講後アンケート、e ラーニングの学習ログ分析などを行うと共に、スクーリング実習担当者による実施結果のとりまとめを行った。これらの実証講座の実施によって得られたデータや知見などに基づき、受講者が受講を通じて獲得できた専門知識・技術や態度などを総合的に考察し、本学び直しプログラムの有用性・有効性について検証することが実証講座の目的である。併せて、ここで集約された検証結果を学び直しプログラムの今後の改訂や効果的な運営方法・体制などに活かしていくことも狙いとしている。

2.3.3. 対象者

実証講座で対象としたのは、障がい者スポーツ支援に今後関わっていきたい、当該分野の専門性を身につけていきたいなど、興味や関心を有している現役の理学療法士・作業療法士である。具体的には、本事業の実施委員が所属する大学・専門学校の理学療法士・作業療法士養成課程修了者(卒業生)に対して呼びかけを行った。平成27年度事業における実証講座に参加したことのある理学療法士・作業療法士の他、今年度初めて受講する者も対象とした。呼びかけを行った大学・専門学校は以下の通りである。

□大学

大阪保健医療大学、東京医療学院大学、聖隷クリストファー大学

□専門学校

大阪リハビリテーション専門学校、専門学校金沢リハビリテーションアカデミー、はくほ う会医療専門学校赤穂校、ハーベスト医療福祉専門学校、高知リハビリテーション学院

2.3.4. 実施の流れ・時期等

実証講座は、平成29年5月から同年12月までの8カ月間に亘って実施した。

(1) e ラーニング教材による自己学習

6月に実施委員の各大学・専門学校に対して、e ラーニングの告知・募集を開始した。その後、受講希望者に対しては随時、e ラーニングのアカウントを発行し参加を受け入れることとした。

(2) スクーリング実習

スクーリング実習は 5 月から 12 月にかけて、大阪府、石川県、静岡県、東京都の各地、計 13 回(日)開催した。

2.3.5. 実施結果

実証講座の実施期間、スクーリング実習を計 13 回実施した。当初、計 14 回の実施を計画したが、雨天のため 11 月 18 日の実習(会場:ジュビロ磐田志都呂)の実施が中止となった。

カリキュラム受講者の総数は51名で、スポーツを実施した障がい者・児(スポーツ大会協力者)は321名、ボランティア支援者172名であった(いずれも延べ人数)。

この他スクーリング実習では、スポーツ指導コーチ、ボランティア支援者、実施委員がそれぞれの立場・役割の下でスポーツ大会に参加した。

以下にその実施日時、場所、参加者を一覧で示す。

図表 2-5 スクーリング実習の実施

■関西

月日・時間	会場	参加者		所在地
5月14日(日)	セレッソ大阪	○カリキュラム受講者	5名	大阪府
11:00~15:00	フットサルパーク	○実施委員 3名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	32名	
		○ボランティア支援者	30名	
5月27日(土)	大阪府立砂川高等支援	○カリキュラム受講者	5名	大阪府
9:00~13:00	学校	○実施委員 5名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	30名	

		○ボランティア支援者	10名	
7月2日(日)	南津守さくら公園	○カリキュラム受講者		大阪府
11:00~15:00	グラウンド	○実施委員 4名	У 7Н	7(1/2/11
11.00 - 15.00		, , ,,		
		○スポーツ指導コーチ	3 名	
		○スポーツ大会協力者	33名	
		○ボランティア支援者	15名	
8月23日(水)	大阪府立砂川高等支援	○カリキュラム受講者	3名	大阪府
9:00~13:00	学校	○実施委員 3名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	30名	
		○ボランティア支援者	3名	
12月2日 (土)	ノアステージ茨木	○カリキュラム受講者	2名	大阪府
12:00~16:00		○実施委員 2名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	48名	
		○ボランティア支援者	30名	
12月16日(土)	大阪府立砂川高等支援	○カリキュラム受講者	6名	大阪府
9:00~13:00	学校	○実施委員 4名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	30名	
		○ボランティア支援者	10名	

■関東

月日	会場	参加者	所在地
12月2日 (土)	ゼルビア	○カリキュラム受講者 4名	東京都
13:00~17:00	フットサルパーク	○実施委員 5名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 15 名	
		○ボランティア支援者 20名	

■東海

月日	会場	参加者	所在地
10月7日(土)	ジュビロ磐田	○カリキュラム受講者 3名	静岡県
12:00~16:00	志都呂	○実施委員 2名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 24名	

		○ボランティア支援者	16名	
11月18日(土)	ジュビロ磐田	※雨天により中止		静岡県
12:00~16:00	志都呂			
12月2日(土)	ジュビロ磐田	○カリキュラム受講者	3 名	静岡県
12:00~16:00	志都呂	○実施委員 2名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	23 名	
		○ボランティア支援者	21 名	

■北陸

月日	会場	参加者	所在地
6月24日(土)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 5名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 4名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 15名	
		○ボランティア支援者 3名	
8月20日(日)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 1名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 2名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 13名	
		○ボランティア支援者 4名	
10月8日(日)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 4名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 3名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 20名	
		○ボランティア支援者 3名	
12月16日(土)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 5名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 2名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 8名	
		○ボランティア支援者 7名	

図表 2-6 実施の様子



※於:南津守さくら公園グラウンド



※於:內灘町総合運動公園



※於:ジュビロ磐田志都呂



※砂川高等支援学校





※ゼルビアフットサル

2.3.6. 検証

2.3.6.1. 検証方法

実証講座の実施内容・結果に対する検証は、次に示す定量的な評価と定性的な評価を総合する方法で実施することとした。

(1) 受講者アンケート

受講者の職種や臨床経験、eラーニング教材の視聴状況やスクーリング実習への参加回数など受講者の基本属性などに関するアンケートを実施する。これら自己申告でeラーニング学習ログや実施報告の検証に有用な補完データを収集する。

(2) 自己評価表

スクーリング実習の受講後に受講者に「自己評価表」を配付し、障がい者スポーツ支援に係る各能力項目に対する自己評価(定量的評価と定性的評価)をしてもらう。具体的には、スポーツの直接指導、スポーツイベント・プロジェクトの運営及び企画などについて自身への振り返りをもとに評価付けを行う。受講前と受講後の結果を比較し、その差異と変化の要因を検証する。

(3) スクーリング実習実施報告

スクーリング実習の全体統括・運営担当者による各回の終了後に所定書式にて、実習の実施内容、実施状況、実施後のフィードバック(スクーリング実習で学んだこと、今後カリキュラムやeラーニング教材で取り上げてほしい事柄など)を実施報告としてとりまとめる。この報告の内容に基づき、スクーリング実習の有用性や改善事項などについて検証する。

(4) e ラーニング学習ログ

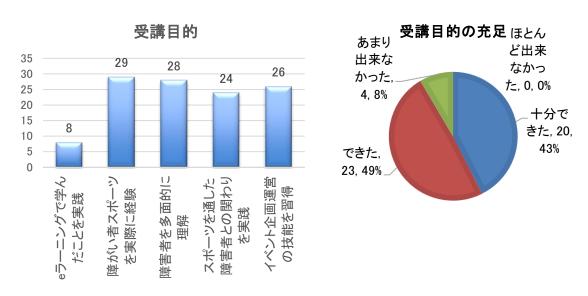
e ラーニング教材を配信するサーバに蓄積管理される受講者の学習ログ (履歴) データに対して分析を行い、e ラーニング教材による自己学習の状況を評価・検証する。 具体的には、サーバへのアクセス回数、各学習単元のコマの視聴回数、確認テストの正解率などを指標として考察する。

2.3.6.2. 検証結果の概要

ここでは検証結果の概要を報告する。詳細については「実証講座実施報告編」を参照されたい。

■受講者の高い受講後の満足度

「受講者アンケート」の設問「本日の実習で、あなたの受講目的は充足できましたか」の結果をみると、「十分できた」が43%、「できた」が49%となっているのに対して、「あまり出来なかった」は8%に留まり、「ほとんど出来なかった」は皆無であった。この受講者の受講後の高い満足度は、実証講座の有効性の一端を示すものとみることができる。

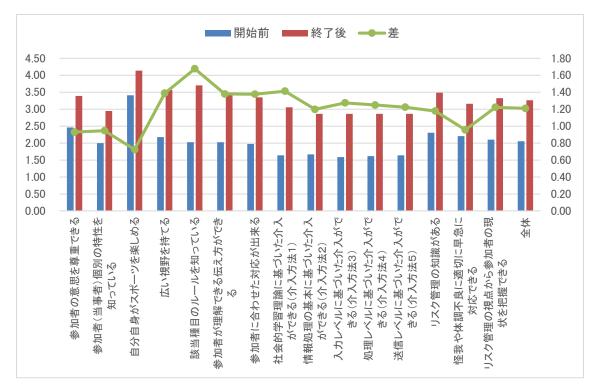


図表 2-7 実証講座受講の目的と目的の充足度

■障がい者スポーツ支援のスキル向上

「自己評価表」では、「スポーツを直接指導すること」「プロジェクトやイベントを運営すること」「プロジェクトやイベントを企画すること」「プロジェクトやイベントの成果を示すこと」という4つのスキルについて自己評価をしてもらった。その結果、4つのスキルを構成する各小項目のいずれも、受講開始前と受講終了後ではプラスの方向に「できる」レベルが向上している。

次に掲載するグラフは、4つのスキルのうちのひとつ「スポーツを直接指導すること」について受講前と受講後の自己評価を比較したものである。項目によって伸び幅に相違は認められるものの、全体としては、講座の受講を通して、障がい者スポーツ支援に係るスキルが向上したという一定の教育効果を確認することができた。



図表 2-8 「スポーツを直接指導すること」への自己評価の変化

■多数の参加・協力によるスクーリング実習の実施

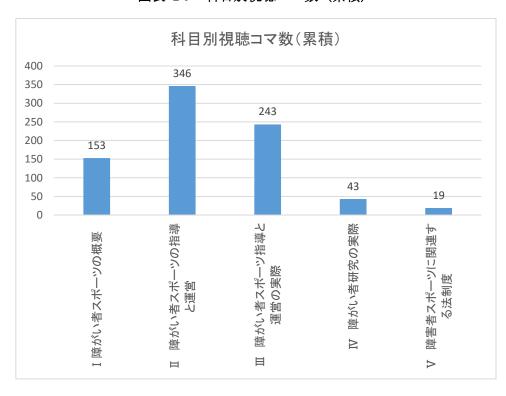
スクーリング実習についてみると、カリキュラム受講者は51名、スポーツ大会協力者(スポーツを実施した障がい者・児)は321名、昨年度の実施実績及び当初の計画を上回る人数規模での実施となった。また、関西(大阪府)、関東(東京都)、東海(静岡県)、北陸(石川県)という広範囲に及ぶ4つのエリアで計13回に亘り開催できた。eラーニングとコラボレーション支援環境を通して、これからも受講者を遠隔サポートしていく中で、スクーリング実習での学びの成果が各地で定着していくことを促進したい。

また、「実施報告」の「実施後フィードバック」からは、スクーリング実習での体験的な 学びから多くの受講者が障がい者スポーツ支援の楽しさや、支援者としての役割の大切さ を実感したとする声が読み取れる。定量的な評価はできないが、4 エリア各地の受講者に対 して障がい者スポーツ支援に係ることへの意欲を喚起できたことも事業の成果である。

■スクーリング実習での学びを支える e ラーニングによる自己学習

7月から提供が開始されたeラーニングは、当初は利用が少なかったものの、10月に入ってから徐々に利用者数、講義動画視聴回数が増加した。10月末時点のユニークな利用者数は42名、12月末には72名にまで増加した。また、視聴された講義動画のコマ数も累計で800を超える結果となった。その内訳を科目別でみてみると、「障がい者スポーツの指導と運営」と「障がい者スポーツの指導と運営」と「障がい者スポーツの指導と運営の実際」が抜きん出て多い。これらの科目は、ス

クーリング実習と直接的にリンクした内容を扱っており、多くの受講者が明確な目的意識を持って、この2科目を学んだものと推察される。その意味において、e ラーニングでの自己学習はスクーリング実習での体験的な学習を支援する一定の働きをなしていたといえるだろう。



図表 2-9 科目別視聴コマ数 (累積)

e ラーニング教材制作報告編

1. 概要

1.1. 内容

障がい者スポーツ支援を学ぶ e ラーニング教材は全 5 科目で構成されている。以下にその概要を一覧で示す。

No	科目	学習単元数	コマ数
1	障がい者スポーツの概要	4	7
2	障がい者スポーツの指導と運営	3	29
3	障がい者スポーツ指導と運営の実際	3	17
4	障がい者スポーツ研究の実際	3	14
(5)	障がい者スポーツに関連する法制度	5	5
	計	18	72

図表 1-1 科目構成

科目「障がい者スポーツの概要」は導入の学習に位置する科目で、障がい者スポーツの歴 史や現状、課題などに関する知識を学習する。

これに続く「障がい者スポーツの指導と運営」「障がい者スポーツの指導と運営の実際」では、障がい者スポーツの支援者として備えるべき指導及び運営に係る専門知識と実践方法について学習する。「障がい者スポーツの指導と運営」では、リスク管理・応急処置や介入方法といった指導の他、パフォーマンスの向上を狙いとする指導方法も取り上げている。また、「障がい者スポーツの指導と運営の実際」では、子どもや高齢者といった対象者別の事例やスポーツ種別ごとの事例を通して指導と運営の実際を学ぶ内容構成となっている。

科目「障がい者スポーツ研究の実際」は、障がい者スポーツ支援に係る専門性の向上を狙いに研究の進め方や先行する研究事例を学び、障がい者スポーツ研究の実践についての理解を深める。

科目「障がい者スポーツに関連する法制度」は、障害者基本法や障害者総合支援法など、 支援者として把握しておくべき法制度を学ぶ。

各科目を構成する学習単元の数と対応するコマ数は上の表の通りである。学習単元数の総数は 18、総コマ数は 72 である。なお、ここでいうコマとは、1 度で視聴することを想定したひとまとまりの教材コンテンツで、10 分前後の講義映像である。

各科目の学習単元、コマの詳細については、次章で報告する。

1.2. 改善ポイントと方法

本 e ラーニング教材は、平成 28 年度の文部科学省委託事業「障がい者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発」事業(以下、平成 28 年度事業とする)で制作した e ラーニング教材を改訂したものである。

平成 28 年度事業では、e ラーニング教材の制作とそれを活用した実証講座を実施し、その結果に対する検証までを行った。その結果、e ラーニングの受講者から多数の肯定的な意見や感想が寄せられ、一定の成果を確認することができた。しかしその一方で、独習の継続や学習成果の向上を図る上で、各コマの時間数の不統一という改善すべき事項も明確となった。

e ラーニング教材の制作にあたっては、当初各コマ 10 分程度という方針の下に進めたが、 結果的にこれが徹底されず、長いものでは 40 分を超えるコマもあった。受講者からは 1 コ マの視聴時間が長いと続けるのが難しく、そこで学習が中断したままとなってしまうなど の意見が寄せられた。

そこで、自己学習の継続や集中力の維持を図る狙いから、各コマの視聴時間が 10 分前後 となるよう全体を再編した。また、この再編に伴い、一部のコマについて統廃合を実施し、 より学びやすい構成へと改めた。

なお、視聴時間の基本を 10 分前後と設定したのは、近年のマイクロラーニングに対する 高い評価や、スマートフォンを学習端末と想定した場合、長時間の学習は適当ではないなど の理由による。

No	科目	平成 28 年度		平成 29 年度	
		単元数	コマ数	単元数	コマ数
1	障がい者スポーツの概要	4	10	4	7
2	障がい者スポーツの指導と運営	3	25	3	29
3	障がい者スポーツ指導と運営の実際	3	18	3	17
4	障がい者スポーツ研究の実際	3	11	3	14
(5)	障がい者スポーツに関連する法制度	5	5	5	5
	計	18	69	18	72

図表 1-2 改訂内容(単元数とコマ数)

上の表は、平成 28 年度事業で制作した e ラーニング教材と学習単元数及びコマ数を比較したものである。学習単元に対する改訂を行わなかったが、コマについては科目「障がい者スポーツに関連する法制度」以外の 4 科目で見直しを行い、コマの再編を実施した。その結果、平成 28 年度はコマ数 69 であったが、今年度事業では 72 コマとなっている。

図表 1-3 科目の内容(学習単元)

科目名	・単元	コマ数
① 障	がい者スポーツの概要	7
1	障がい者スポーツの捉え方	
	1) 障がい者の社会参加 <1コマ>	
	2) 障がい者のヘルスプロモーション <1コマ>	
2	障がい者スポーツの歴史的変遷	
	1) 障がい者スポーツの歴史 <1コマ>	
	2) 障がい者スポーツの広がり <1 コマ>	
3	障がい者スポーツの現状と課題	
	1) 障がい者スポーツの現状 <1コマ>	
	2) 障がい者スポーツの課題 <1コマ>	
4	障がい者スポーツに関連する資格	
	1) 障がい者スポーツへのかかわり方 <1コマ>	
② 障	がい者スポーツの指導と運営	29
1	障がい者スポーツの指導	
	1) リスク管理と応急処置 <3 コマ>	
İ	2) 介入の方法 <4コマ>	
2	障がい者スポーツの運営	
	1) 普及理論 <2 コマ>	
	2) 人的ネットワークの構築 <1コマ>	
	3) 資金(財源) のマネジメント <1コマ>	
	4) 既存資源の活用方法 <1コマ>	
3	障がい者スポーツのパフォーマンス向上指導	
	1) ウォーミングアップ <3 コマ>	
	2) 疼痛緩和ケア <5 コマ>	
	3) キネシオテーピングとその効果 <1 コマ>	
	4) キネシオテーピング法 <1 コマ>	
	5) スポーツ別テーピング <1 コマ>	
	6) キネシオテーピングの資格体系 <1 コマ>	
	7) パフォーマンスアップ 3つの方向性 <1コマ>	

- 8) 怪我を防止する方法論 <1コマ> 9) パフォーマンスアップの方法論 <1コマ> 10) 具体的方法の紹介 <2 コマ> ③ 障がい者スポーツ指導と運営の実際 17 1 障がい者スポーツの指導の実際 1) 子どもの健康的な成長を促すスポーツ <1 コマ> 2) 社会人の就労を継続するスポーツ <1コマ> 2 障がい者スポーツの運営の実際 1) 高齢者役割獲得 <1コマ> 2) 販売業務の拡大 <1 コマ> 3) 就労支援活動 <1コマ> 4) グローバル視点でスポーツを活用するプロセス <1 コマ> 5) グローバル視点でスポーツを活用することの効果と課題 <1コマ> 3 障がい者アスリート支援の実際 1) 障害者アスリート研究 <1 コマ> 2) ソーシャルフットボール <1 コマ> 3) 車椅子バスケットボール <1コマ> 4) アンプティサッカー <1 コマ> 5) 電動車椅子サッカー <1コマ> 6) スペシャルオリンピックスユニファイドスポーツ <1 コマ>
 - 7) スペシャルオリンピックス MATP <1 コマ>
 - 8) デフバレーボール <1 コマ>
 - 9) ボッチャ <1 コマ>
 - 10) チェアスキー <1 コマ>

④ 障がい者スポーツ研究の実際

14

- 1 障がい者スポーツ研究総論
 - 1) 障がい者スポーツ研究の捉え方 <1コマ>
 - 2) 障がい者スポーツ研究の現状と課題 <1コマ>
 - 3) 障がい者スポーツ研究の対象者の特性 <1コマ>
 - 4) 障がい者スポーツ研究の進め方 <2 コマ>
- 2 障がい者スポーツの研究対象と方法
 - 1) 概論 <1コマ>

- 2)調査研究 <1コマ>
- 3) 実験研究 <1コマ>
- 4) 研究デザイン <1 コマ>
- 3 障がい者スポーツの研究例
 - 1) 運動技能 <1コマ>
 - 2) 健康増進 <1コマ>
 - 3) 生活の質向上 <1 コマ>
 - 4) 社会参加 <1コマ>
 - 5) 支援者への波及効果 <1コマ>

⑤ 障がい者スポーツに関連する法制度

5

- 1 障害者基本法 <1コマ>
- 2 総合支援法 <1コマ>
- 3 介護保険制度 <1コマ>
- 4 障害者雇用促進法 <1 コマ>
- 5 スポーツ基本法 <1コマ>

1.3. 目的

本 e ラーニング教材の目的は、リハビリテーション専門職である理学療法士・作業療法士が「障がい者スポーツ支援」という新たな専門領域に係る専門知識と実践技術を身につけ、自身の活躍の場を広げてもらい、その結果として障がい者スポーツの活性化、障がい者の健康増進やQOL(生活の質)向上へとつなげていくことである。この目的の達成に向けて、e ラーニング教材の実現に際しては次の観点を重要視することとした。

●多忙な実務者に対して学びやすい環境・学習機会の提供

e ラーニング教材が対象とする理学療法士・作業療法士は、日々実務に従事しており、その多忙さゆえに学び直しのための時間を確保することは容易ではない。とりわけまとまった学びの時間を継続して日常生活の中から作り出すのはハードルが高い。このような事情を踏まえれば、学び直しの機会を提供する側は、学びやすさ・学びの利便性を十分に考慮しなければならない。具体的には、時間や距離というハードルを下げるためには、通学時間の最小化を図ると同時に、通学以外の在宅学習を自宅や勤務先、通勤時など受講者の都合のいいタイミングで、学びたい箇所を選んで学ぶことのできる学習機会を提供する必要がある。

e ラーニングはこの要件を充足するものであり、特に近年普及の著しいモバイルラーニングは恰好の方略である。モバイルラーニングとは、スマートフォンやタブレットなどのモバイル端末を介して学習する e ラーニングで、従来的なパソコンを利用した e ラーニングに比べて格段に学びやすさが向上している。

本事業では、このようなeラーニングのメリットを活かすことによって、多忙な現役の理学療法士・作業療法士でも学びやすい学習機会を提供する。eラーニングによる自己学習の環境が整えば、通学での学びにもプラスに作用し、全体としての学習効果の向上につながるものと期待できる。

●日常生活での健康増進・余暇の楽しみとしてのスポーツから競技としてのスポーツまで 障がい者スポーツには大きく3つの側面がある。一般的には、パラリンピックに代表され るように「アスリート志向」が注目されがちだが、それはひとつの側面に過ぎない。これ以外に、スポーツを楽しみ健康の増進を図る「健康・余暇志向」、当事者のスポーツへの参加 を支援する「支援者志向」がある。

本eラーニング教材は、これらの各側面を学習範囲とし、障がい者スポーツ支援の様々な局面において求められる専門性を学ぶことができる構成となっている。例えば、科目「障がい者スポーツの指導と運営」の学習単元「障がい者スポーツのパフォーマンス向上指導」では、アスリートのパフォーマンス向上を支援する上で不可欠となるウォーミングアップや疼痛ケア、コンディショニングといった内容が取り上げられている。また、学習単元「障がい者スポーツの指導」「障がい者スポーツの運営」では子どもや高齢者を対象とするスポーツ支援の実践事例を学ぶ内容が盛り込まれている。受講者は、これら全編を学ぶことで、障がい者スポーツ支援の専門性を幅広く身につけることができる。もちろん、各人の興味や志向に応じて、アスリート志向や健康・余暇志向など特定領域のみを選択的に学ぶことも可能である。いずれの学び方をするにしても、障がい者スポーツ支援の多様な場面に対応した内容がラインナップされている。

2. モデルカリキュラム

本章では、e ラーニング教材のベースとなるモデルカリキュラムについて報告する。先に報告しているように、内容は5つの科目で構成されている。以下、科目ごとにその内容をまとめて示す。

2.1. 科目「障がい者スポーツの概要」

図表 2-1 障がい者スポーツの概要

科目名	障がい者スポーツの概要
時間数	標準 1.5~2.0 時間
コマ数	7 コマ
概要	本科目では、最初にスポーツの目的の変化や我が国におけるヘルスプロ
	モーションの取り組みについて解説する。
	歴史では、国際的な障がい者スポーツ、我が国での障がい者スポーツの
	取り組みを、障がい者スポーツを取り巻く環境についても解説し、障が
	い者スポーツを支援状況と現状の課題について学ぶ。また、障がい者ス
	ポーツへの4つのかかわり方も解説する。
	最後に、理学療法士及び作業療法士が取得可能な障がい者スポーツに関
	連する資格を紹介する。
学習目標	● 障がい者スポーツの捉え方について説明できる。
	● 障がい者スポーツの歴史的変遷について説明できる。
	● 障がい者スポーツの現状と課題について説明できる。
	● 様々な障がい者スポーツ関連資格について説明できる。
内容	1 障がい者スポーツの捉え方 <2 コマ>
	1) 障がい者の社会参加 <1コマ>
	- スポーツの概念、スポーツの多義性
	- スポーツ文化の構成要素(スポーツ観・スポーツ規範等)
	- スポーツの社会的存在様式
	- 障がい者スポーツの役割(スポーツの意義)
	- 障がい者スポーツの捉え方(する、みる、支える、創る) 他
	2) 障がい者のヘルスプロモーション <1 コマ>
	- ヘルスポロモーションとは
	- 健康づくり対策の流れ
	- 健康日本 21(第二次)の検討背景
	- 10年後にめざす姿

- 健康の増進に関する基本的な方向 他
- 2 障がい者スポーツの歴史的変遷 <2コマ>
 - 1) 障がい者スポーツの歴史 <1 コマ>
 - リハビリテーションの手段としてのスポーツ
 - 障がい者スポーツの広がり
 - 現在のパラリンピックの原型
 - 脊髄損傷大会から多様な障がい者大会へ
 - 日本で開催される障がい者のスポーツ大会 他
 - 2) 障がい者スポーツの広がり <1 コマ>
 - 日本身体障害者スポーツ協会
 - 障害者スポーツセンター
 - 身体障害者スポーツセンター協議会
 - 障がい者スポーツ競技団体
 - 障がい者スポーツ指導者協議会
 - 日本の障がい者スポーツの将来像 他
- 3 障がい者スポーツの現状と課題 <2コマ>
 - 1) 障がい者スポーツの現状 <1 コマ>
 - 各国における障がい者スポーツの認知度
 - パラリンピック以外の障がい者スポーツの直接観戦経験
 - 障がい児が過去1年間にスポーツ・レクリエーションを行った 日数
 - 障がい児・者のスポーツ・レクリエーションの実施状況
 - 障がい者がスポーツ・レクリエーションを実施する主な目的・ 相手
 - 障がい者によるスポーツ・レクリエーションの障壁 他
 - 2) 障がい者スポーツの課題 <1コマ>
 - 知的障がい児・者数
 - 知的障がいを持つ方の学校生活
 - 特別支援学校の卒業後の進路
 - 大阪府知的障がい者施設質問紙調査
 - 発達障がい者支援センター質問紙調査 他
- 4 障がい者スポーツに関連する資格 <1コマ>
 - 1) 障がい者スポーツへのかかわり方 <1コマ>

-	- 障がい者スポーツへ関わる立場
-	- 障がい者スポーツの運営者として
-	- 障がい者スポーツの指導者として
-	- 障がい者スポーツのサポーターとして
-	- スポーツ指導の資格 他

2.2. 科目「障がい者スポーツの指導と運営」

図表 2-2 障がい者スポーツの指導と運営

科目名	障がい者スポーツの指導と運営
時間数	標準 6~8 時間
コマ数	29 = =
概要	本科目では、障がい者スポーツにおける「するスポーツ」を中心とした
	指導する上で必要なリスク管理と応急処置について最初に解説し、続い
	て「するスポーツ」「見るスポーツ」も含めた幅広い障がい児・者へ介入
	する方法について解説する。
	次に障がい者スポーツにおける「支えるスポーツ」「創るスポーツ」を中
	心とした運営する上で役立つイノベーション普及理論について解説し、
	運営マネジメントに必要な人的ネットワークの構築や資金(財源)のマ
	ネジメント、既存資源の活用方法について解説する。
	最後に、アスリートを支援する上で必要となる専門知識・技術として、
	パフォーマンス向上のための指導方法について詳しい講義を行う。
学習目標	● 障がい者スポーツ指導におけるリスク管理と応急処置について説明
	できる。
	● 障がい者スポーツ指導における介入方法について説明できる。
	● イノベーション普及理論について説明できる。
	● 障がい者スポーツの運営マネジメントについて説明できる。
	● 障がい者スポーツのパフォーマンス向上のための指導方法について
	説明できる。
内容	1 障がい者スポーツの指導 <7コマ>
	1) リスク管理と応急処置① <1 コマ>
	- リスク管理
	- リスクを予測する
	- 事前の対応を計画する

- 予想される4大リスク
- 脱水症
- 打撲·捻挫 他
- 2) リスク管理と応急処置② <1 コマ>
 - RICE 処置
 - 安静
 - アイシング
 - 圧迫
 - 拳上
 - 必要な備品 他
- 3) リスク管理と応急処置③ <1 コマ>
 - 骨折・脱臼
 - 創傷
 - 脳震盪
 - けいれん・てんかん発作
 - 救命の連鎖
 - 自動体外式除細動器(AED) 他
- 4) 介入の方法①社会的学習理論 <1コマ>
 - 社会的学習理論
 - 行動形成
 - 強化
 - オペランド条件付け
 - 弱化の副作用 他
- 5) 介入の方法②社会的学習理論 <1コマ>
 - モデリング
 - ミラーニューロンに関する研究
- ほめ方のポイント 他
- 6) 介入の方法③情報処理過程 <1コマ>
 - 情報処理の3つの過程
 - 入力(視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚)
 - カクテルパーティー効果
 - 注意機能 他
- 7) 介入の方法④情報処理過程 <1コマ>
- 記憶の分類
- 作業記憶
- 短期記憶と作業記憶

- 出力の階層性 他
- 2 障がい者スポーツの運営 <5 コマ>
 - 1) 普及理論① <1コマ>
 - イノベーション普及理論
 - イノベーション普及速度に関する5つの属性とその関係 他
 - 2) 普及理論② <1コマ>
 - 普及における3つの時間軸
 - イノベーション決定過程(個人・組織)
 - 革新性・普及速度
 - 社会システム 他
 - 3) 人的ネットワークの構築 <1コマ>
 - マネジメントとは
 - 運営マネジメントの仕組み
 - 運営に必要な人的資源と役割
 - 人的ネットワークの構築 他
 - 4) 資金(財源) のマネジメント <1 コマ>
 - 資金(財源)のマネジメント
 - 経営戦略·戦術
 - 予算管理・財務
 - 資金(財源)確保の方法 他
 - 5) 既存資源の活用方法 <1コマ>
 - 既存の「資源」とは
 - フォーマルな資源
 - インフォーマルな資源
 - 既存の社会資源の活用と開発 他
- 3 障がい者スポーツのパフォーマンス向上指導<17コマ>
 - 1) ウォーミングアップ① <1コマ>
 - ウォーミングアップとは
 - ウォーミングアップの注意点
 - ウォーミングアップの目的
 - ウォーミングアップの生理学的反応
 - 2種類のウォーミングアップ 他
 - 2) ウォーミングアップ② <1コマ>
 - 脳を活性化する運動(ブレインジム)

- 学びの5つの原則
- 知性は生まれつき備わっている
- 意図にしたがって意識は注がれる 他
- 3) ウォーミングアップ③ <1コマ>
 - クロス・クロール
 - レイジー・エイト
 - シンキング・キャップ 他
- 4) 疼痛緩和ケア① <1 コマ>
 - 痛みとは
 - 痛みの意味と役割
 - 痛みのネットワーク
 - 痛みを起こす物質
 - 痛みとストレス 他
- 5) 疼痛緩和ケア② <1 コマ>
 - 慢性疼痛
 - 慢性痛発生メカニズム
 - 痛みの悪循環
 - 痛みの慢性化と破局的思考
 - 痛みの捉え方 他
- 6) 疼痛緩和ケア③ <1 コマ>
 - 痛みの評価の捉え方
 - 痛みの主観評価
 - 痛みの生理学的評価
 - 疼痛特異的 ADL
 - 行動評価 他
- 7) 疼痛緩和ケア④ <1 コマ>
 - 身体に内在する鎮痛メカニズム
 - ゲートコントロール説
 - 下行性疼痛抑制系
 - 痛みの治療
 - 慢性腰痛に対するリハビリテーション 他
- 8) 疼痛緩和ケア⑤ <1 コマ>
 - 運動療法
 - 慢性痛に対する運動療法の3つの方法
 - 認知行動療法
 - 慢性疼痛に対する認知行動療法

- 運動器疼痛管理のための認知行動療法
- 従来の疼痛緩和のリハビリテーション 他
- 9) キネシオテーピングとその効果 <1 コマ>
 - スポーツ外傷とスポーツ障害
 - キネシオテーピング療法の効果
 - 筋肉の機能を正しく戻す
 - 体液の循環をよくする
 - 痛みを抑える
 - 関節のずれを正す 他
- 10) キネシオテーピング法 <1 コマ>
 - キネシオテーピング法の流れ
 - スクリーニングテスト
 - 筋肉テスト
 - キネシオテーピング
 - 再評価 他
- 11) スポーツ別テーピング <1 コマ>
 - スポーツ別キネシオテーピング法
 - 野球のスポーツ障害とテーピング
 - サッカーのスポーツ障害とテーピング
 - バスケットボールのスポーツ障害とテーピング
 - テニスのスポーツ障害とテーピング 他
- 12) キネシオテーピングの資格体系 <1 コマ>
 - キネシオテーピングの資格体系
 - KTAM 一般会員
 - CKTT 認定トレーナー
 - CKTP 認定療法家
 - CKTI 認定指導員
 - キネシオテーピングの講座体系
 - 基礎講座
 - 部位別講座 他
- 13) パフォーマンスアップ 3 つの方向性 <1 コマ>
 - 各種競技の共通項を捉える
 - パフォーマンスの構造
 - 第1の方向性(収縮・弛緩の幅の拡大)
 - 第2の方向性(並立能力(アブレスト能力))
 - 第3の方向性(骨の力を最大限活かした身体操作) 他

14) 怪我を防止する方法論 <1 コマ>
- 怪我を防ぐ考え方
- 怪我の発生原因
- 根本から改善が必要
- 多様性の確保
- インナーマッスル 他
15) パフォーマンスアップの方法論 <1 コマ>
- トレーニング内容を決めるときの約束事
- 筋力トレーニングの可否について
- どんな競技でも鍛えるべき共通ポイント
- 具体例:スピードアップの方法論
- 具体例:上肢のパワーアップの方法論 他
16) 具体的方法の紹介① <1 コマ>
- T-レフストレッチ
- インナースクワット 他
17) 具体的方法の紹介② <1 コマ>
- 立甲・八の字・前モモ抜きテスト
- 立甲を理解・習得する方法 他
 T-レフストレッチ インナースクワット 他 17) 具体的方法の紹介② <1 コマ> 立甲・八の字・前モモ抜きテスト

2.3. 科目「障がい者スポーツ指導と運営の実際」

図表 2-3 障がい者スポーツ指導と運営の実際

科目名	障がい者スポーツ指導と運営の実際
時間数	標準 3~5 時間
コマ数	17 コマ
概要	本科目では、理学療法士及び作業療法士が障がい者スポーツへ介入して
	いる実践例 (NPO 法人障がい者スポーツ Friendly action) をいくつか紹介
	する。
	最初は、障がい者スポーツにおける「するスポーツ」を中心とした社会
	参加向上例である。続いて「見るスポーツ」「支えるスポーツ」を中心と
	した参加支援実践例である。いずれも「創るスポーツ」の紹介ともなっ
	ている。
	最後に、障害の有無、種別、程度に関係なく、本来のスポーツの魅力で
	ある競技性を重視したアスリート支援の現場で活躍する理学療法士・作

	業療法士を紹介する。
学習目標	● 障がい者スポーツ指導における様々な活用例について説明できる。
	● 障がい者スポーツ運営における様々な活用例について説明できる。
	● 競技性を重視したアスリート支援の現場で活躍する理学療法士・作
	業療法士の事例について説明できる。
内容	1 障がい者スポーツの指導の実際 <2 コマ>
	1)子供の健康的な成長を促すスポーツ <1コマ>
	- 児童における運動の重要性
	- 子どもの体力低下の要因
	- 発達障害児の運動障害
	- 発達障害児・家族のニーズ
	- 児童デイサービスでの取り組み 他
	2) 社会人の就労を継続するスポーツ <1 コマ>
	- 成人知的障害者の健康状態
	- 成人知的障害者の心身機能
	- 知的障害者雇用の実態
	- NPO 障害者スポーツフレンドリーアクションの取り組み 他
	2 障がい者スポーツの運営の実際 <5 コマ>
	1) 高齢者役割獲得 <1 コマ>
	- 介護予防の理念
	- これまでの介護の問題点
	- これからの介護の考え方
	- 新オレンジプラン
	- つながりプロジェクトの紹介 他
	2) 販売業務の拡大 <1 コマ>
	- 働くことの大切さ
	- 福祉的就労の大きな課題
	- 福祉的就労における支援者の苦悩
	- あしすとプロジェクトの紹介 他
	3) 就労支援活動 <1 コマ>
	- 障がい者就労における課題
	- 就労移行支援事業所での就労への流れ
	- 就労へ向けた実習で障がい者スポーツ
	- 障がい者スポーツイベントの運営までの流れ
	- NPO 障害者スポーツフレンドリーアクションの取り組み 他

- 4) グローバル視点でスポーツを活用するプロセス <1 コマ>
 - スポーツを活用した国際交流とは
 - 国際交流におけるスポーツの意義・位置づけ・プロセス
 - 情報収集
 - 合同企画
 - 準備
 - 交流の実際
 - 振り返り 他
- 5) グローバル視点でスポーツを活用することの効果と課題 <1 コマ>
 - グローバル視点でスポーツを活用することの効果
 - 国際交流の意義
 - スポーツを活用した国際交流とその効果 他
- 3 障がい者アスリート支援の実際 <10 コマ>
 - 1) 障がい者スポーツ研究 <1 コマ>
 - 笹川スポーツ財団で活躍する作業療法士
 - 2) ソーシャルフットボール <1 コマ>
 - NPO 法人日本ソーシャルフットボール協会理事として活躍する作業療法士
 - 3) 車椅子バスケットボール <1 コマ>
 - 国際車椅子バスケットボール連盟国際クラシファイヤーとして 活躍する作業療法士
 - 4) アンプティサッカー <1 コマ>
 - 関西セッチエストレーラススタッフとして活躍する作業療法士
 - 5) 電動車椅子サッカー <1コマ>
 - 電動車椅子サッカー日本代表監督として活躍する作業療法士
 - 6) スペシャルオリンピックスユニファイドスポーツ<1 コマ>
 - ユニファイドサッカーコーチとして活躍する作業療法士
 - 7) スペシャルオリンピックス MATP<1 コマ>
 - スペシャルオリンピックスにおける MATP のコーチとして活躍 する理学療法士
 - 8) デフバレーボール <1 コマ>
 - デフビーチバレーボール日本代表トレーナーとして活躍する理 学療法士
 - 9) ボッチャ <1 コマ>

- ボッチャ協会 医科学・コンディショニング部でボッチャ普及
および日本代表をサポートしている理学療法士
10) チェアスキー <1 コマ>
- 日本チェアスキー協会公認クラブ 兵庫県チェアスキー協会で
チェアスキーの普及活動を行っている理学療法士

2.4. 科目「障がい者スポーツ研究の実際」

図表 2-4 障がい者スポーツ研究の実際

	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □
科目名	障がい者スポーツ研究の実際
時間数	標準 3~5 時間
コマ数	14 コマ
概要	本科目では、障がい者スポーツ研究の対象者の障害特性を理解しながら、
	研究命題を検証できる調査方法の選択や研究デザインの構築の必要性を
	解説する。研究の進め方おいては、まず素朴な疑問を研究命題という形
	につくり直すことから始まり、研究の生命線である研究計画書の作成の
	仕方について解説する。続いて、障がい者スポーツ研究の対象はアスリ
	ート関連にとどまるのではなく、健康や余暇支援など幅広い層が対象に
	なり、効果的な研究をするためには、良質なデザインを構築する必要が
	あることを解説する。最後に障がい者スポーツ研究の実践例をいくつか
	紹介する。
学習目標	● 障がい者スポーツ研究の捉え方について説明できる。
	● 障がい者スポーツ研究の進め方について説明できる。
	● 障がい者スポーツ研究の対象と方法について説明できる。
	● 障がい者スポーツ研究の様々な実践例について説明できる。
内容	1 障がい者スポーツ研究総論 <5 コマ>
	1) 障がい者スポーツ研究の捉え方 <1 コマ>
	- 障がい者スポーツ研究の捉え方
	- 障がい者スポーツの3つの側面
	- アスリート志向
	- 健康・余暇志向、支援者志向 他
	2) 障がい者スポーツ研究の現状と課題 <1 コマ>
	- 障がい者スポーツ研究の現状
	- 年度別研究数、研究対象の内訳、研究方法の内訳

- 研究対象の現状と課題、研究方法の現状と課題 他
- 3) 障がい者スポーツ研究の対象者の特性 <1コマ>
 - 障がい者スポーツの対象者特性 他
- 4) 障がい者スポーツ研究の進め方①概論について <1 コマ>
 - 障がい者スポーツ研究の進め方
 - 研究疑問の設定
- 障がい者スポーツ研究例 他
- 5) 障がい者スポーツ研究の進め方②文献レビューと研究計画書 <1 コマ>
 - 文献レビュー
 - 研究計画書の作成
 - 研究の実施 (データ収集と分析)
 - 研究の報告 他
- 2 障がい者スポーツの研究対象と方法 <4 コマ>
 - 1) 概論
 - 障がい者スポーツ研究の対象と方法
 - アスリート支援
 - 余暇・健康支援
 - 障がい者スポーツ研究の枠組み
 - 良質な研究デザインの構築
 - 研究方法の種類 他
 - 2)調査研究
 - 調査研究の目的
 - 調査研究の特徴
 - 調査研究の種類(記録調査法・質問紙調査法・面接調査法)
 - 質問文の作成(自由回答法・選択(肢)法) 他
 - 3) 実験研究
 - 実験的研究とは
 - ランダム化 (ランダムサンプリング)
 - マスク化
 - 独立変数と従属変数
 - 実験研究の類型とエビデンス 他
 - 4) 研究デザイン
 - 実験研究の研究デザイン
 - 群間比較研究 (ランダム割り当て)

- 準実験的デザイン (クロスオーバーデザイン)
- 群内前後比較研究
- 要因計画研究法
- 良質な研究デザインの構築 他
- 3 障がい者スポーツの研究例 <5コマ>
 - 1) 運動技能 <1コマ>
 - 障がい者スポーツの3つの側面
 - 障がい者スポーツ研究例(知的障がい者先行研究)
 - スポーツ活動を通じた知的障がい者の運動技能の変化
 - 対象と方法
 - スポーツイベントの実施内容
 - 運動技能の調査項目
 - 結果、考察 他
 - 2) 健康増進 <1コマ>
 - 障がい者スポーツ研究例(知的障がい者の健康増進)
 - 対象、方法(MOHOST・VQ・統計学的検討法)
 - 結果、考察 他
 - 3) 生活の質向上例<1コマ>
 - リハビリテーションのアウトカム
 - アウトカムとしての OOL
 - QOL 評価法(SF-36·WHO QOL26)
 - 障がい者スポーツ研究例
 - 研究の仮説と対象、調査項目と方法
 - 結果、考察 他
 - 4) 社会参加 <1コマ>
 - 社会参加の定義
 - 社会参加の階層性
 - 障がい者スポーツ研究における社会参加
 - 精神障害者の社会参加の促進に関する調査研究
 - 対象と方法
 - 結果と考察 他
 - 5) 支援者への波及効果 <1コマ>
 - 障がい者スポーツ研究例(支援者への波及効果)
 - 対象、方法
 - カリキュラム講義(リスク管理・障害の特性・体験実習)

- 効果判定項目
- 結果、考察 他

2.5. 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」

図表 2-5 障がい者スポーツに関連する法制度

科目名	障がい者スポーツに関連する法制度
時間数	標準 1~2 時間
コマ数	5コマ
概要	本科目では、障害者スポーツに関連する法制度で理学療法士及び作業療
	法士が把握してほしい必要最低限の内容を解説する。障害者基本法、障
	害者総合支援法、介護保険制度、障害者雇用促進法、スポーツ基本法で
	ある。
学習目標	●障害者基本法について説明できる。
	●障害者総合支援法について説明できる。
	●介護保険制度について説明できる。
	●障害者雇用促進法について説明できる
	●スポーツ基本法について説明できる。
内容	1 障害者基本法 <1 コマ>
	- 障害者基本法の位置づけ
	- 基本理念、変遷、目的
	- 言葉の定義 (障害者・社会的障壁)
	- 障害のとらえ方
	- 地域社会における共生等
	- 障害者基本法の10領域 他
	2 障害者総合支援法 <1 コマ>
	- 障害者総合支援法とは
	- 目的の改正
	- 基本理念の創設
	- 障害者を対象としたサービス
	- 自立支援給付
	- 地域生活支援事業
	- 児童福祉法に基づくサービス
	- 障害者自立支援法の誕生

- 障害者福祉変遷のポイント
- 障害者スポーツも共生がテーマ 他
- 3 介護保険制度 <1コマ>
 - 高齢者保健福祉施策の流れ
 - 高齢者介護に関する従前の制度の問題点
 - 介護保険導入の経緯・意義
 - 利用者から見た従前の制度と介護保険制度の違い
 - 介護保険サービスの体系
 - 介護サービスの種類
 - 介護保険制度の被保険者(加入者)
 - 介護サービスの利用の手続き、要介護認定の流れ 他
- 4 障害者雇用促進法 <1コマ>
 - 障害者雇用促進法の枠組み、基本理念
 - 障害者の定義
 - 障害者雇用促進法の変遷
 - 法定雇用率、雇用納付金制度
 - 職業リハビリテーション
 - 差別の禁止に関する指針
 - 機会均等の確保・合理的配慮
 - 全国障害者技能競技大会 他
- 5 スポーツ基本法 <1コマ>
 - スポーツ振興法の制定
 - スポーツ基本法制定への流れ
 - スポーツ立国戦略
 - スポーツ基本法の前文
 - 基本理念
 - スポーツ基本計画の策定
 - 今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策 他

3. e ラーニング教材の基本仕様

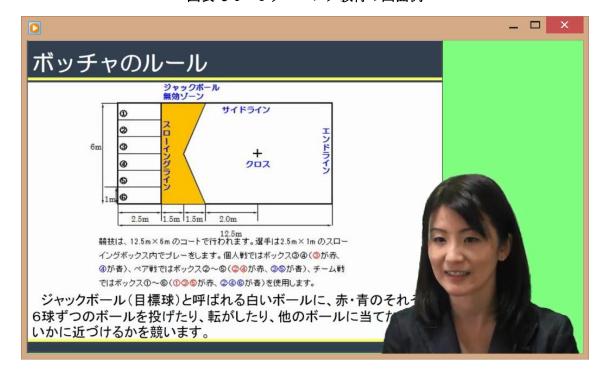
3.1. 学習環境

本 e ラーニング教材を利用する受講者は、インターネット接続されたパソコン、またはタブレット、スマートフォンを学習端末とする。 e ラーニング教材はインターネット上の専用サーバに蓄積・管理されており、受講者はインターネット経由でアクセスし、学習を進める。受講者の学習端末に特別なプラグイン(機能を追加するためのソフトウェア)は不要で、Webブラウザを介して利用する。

受講者に対しては、個別にユーザーIDとパスワードを発行し、受講者はこれを所定のURLからサーバにアクセスしてログイン手続きを実行する。個別のユーザーIDによるアクセスで、受講者個々の学習履歴を管理する。

3.2. e ラーニング教材の画面仕様

以下に、制作したeラーニング教材の画面構成の例を示す。



図表 3-1 e ラーニング教材の画面例

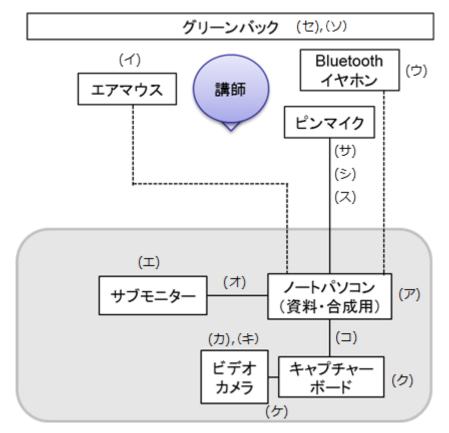
上記に掲載したのは、科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」の中の学習単元である「障がい者アスリート支援の実際」を構成するコマ「ボッチャ」のワンシーンである。

画面の手前右下に講義を担当する講師、その背景には板書に相当する説明資料 (パワーポイントのスライド) が示される。講義の進みと説明資料は連動しており、講義の内容に合わせて説明資料が切り替わっていく。

マウスカーソル (マウスポインタ) を画面上に移動させると、画面の下部に「再生」「停止」「一時停止」「巻き戻し」「早送り」「音量調整」などのメニューが表示され、これらを操作することで、受講者は繰り返し同じ部分を視聴したり、すでに学び終えた・知っている箇所を省いて先に進んだりすることもできる。

3.3. eラーニング教材の制作環境

e ラーニング教材の制作にあたり整備したハードウェア・ソフトウェア環境を以下に示す。



図表 3-2 e ラーニング教材の制作環境

ハードウェア環境の基本的な構成要素は、講義映像を撮影するビデオカメラ(下図のカ・キ)、説明資料(パワーポイントのスライド)と映像を合成するノートパソコン(下図のア)、講師の映像を抜き出すためのグリーンバック(下図のセ・ソ)である。

講義映像と説明資料の合成では、フリー(無償)の画像収録ソフトである OBS (Open Broadcast Software) を用いている。

【ハードウェア構成】

- 1 操作・収録・編集
 - (ア) ノートパソコン
 - (イ) エアマウス (レシーバー付)
 - (ウ) Bluetooth イヤホン (USB ケーブル付)
 - (エ) サブモニター
 - (オ) D-sub ケーブル
- 2 映像入力
 - (カ) ビデオカメラ
 - (キ) 三脚
 - (ク) キャプチャーボード
 - (ケ) HDMI ケーブル
 - (コ) USB3.0 ケーブル
- 3 音声入力
 - (サ) ピンマイク
 - (シ) マイク延長コード
 - (ス) オーディオボックス
- 4 背景
 - (セ) グリーンバック
 - (ソ) 背景布用スタンド

【ソフトウェア】

OBS (Open Broadcaster Software)

※フリーの動画収録ソフト OBS については、以下の Web サイトを参照されたい。

URL https://obsproject.com/

3.4. eラーニング教材の制作手順

前節で示したeラーニング教材の制作環境により、教材を制作していく手順・流れは以下の通りである。

図表 3-3 e ラーニング教材の制作手順

手順①

講義内容の準備

- 1) 講義の内容、流れ等の決定
- 2) 説明資料(板書にあたるパワーポイントのスライド)の作成
- 3) 講義のシナリオ・台本等の作成(必要に応じて)

手順②

制作環境の整備

- 4) 制作環境の構築(ハード・ソフト・ネットワーク)
- 5) 説明資料(パワーポイントのスライド)の環境へのセットアップ
- 6) OBSによる講義収録のテスト

手順③

講義収録と結果の確認

- 7) 講義の収録
- 8) 収録した講義映像の再生・確認
- 9) 修正・訂正が必要な場合にはこの手順③の流れで再録

手順①として、講義内容の検討(授業設計)を行い、使用する説明資料(パワーポイントのスライド)を作成する。また、必要に応じて講義のシナリオ・台本を作成する。

次の手順②では、制作環境の構築、説明資料(パワーポイントのスライド)を収録用のパソコンにコピーした後、OBSによる講義収録の動作チェックを行う。

最後の手順③で、講師がビデオカメラに向かって講義を行う。その際、講義の流れに沿って説明資料のスライドも操作する。このとき、講義映像と説明資料の合成が同時に処理され

ている。

講義が一通り終了したら収録を止めると、説明資料と講義映像が合成された動画ファイルが収録用のパソコンに生成される。これを再生・確認し、修正したい箇所や撮り直したい部分がある場合には、手順③をやり直す。なければ、これで収録が完了となる。

なお、講義の部分的な撮り直しはできないので、修正したい・撮り直したい箇所等がある場合には、講義の最初から最後までを撮り直なければならない。

4. コラボレーション支援環境

4.1. 概要

4.1.1. 目的

本編の第 3 章で報告した e ラーニング教材は、理学療法士・作業療法士である受講者が個々に学び直すことを支援する自己学習ツールである。従って、その学習のプロセスにおいて科目を担当する講師や実習カリキュラムのコーチ・指導者らに質問したり、他の受講者とのやりとりをしたりすることはできない。基本的には、受講者各人がそれぞれに e ラーニング教材にアクセスし、その講義を視聴するという一方向の流れで学習が進んでいくことになる。

その一方、本eラーニング教材では、障がい者スポーツ支援に係る専門性の高い内容を扱っているため、eラーニング教材による講義の視聴という一方向の自己学習では限界もある。教育プログラムとしては、eラーニングに加えて実習カリキュラムも用意されているが、一連の学習プロセスにおける受講者と講師・指導者、受講者同士などの密な情報共有・交換の機会としては十分とは言い難い。また、本事業の講師・コーチら、受講者の居住地は、大阪府や兵庫県などの関西圏にとどまらず、北陸(石川県)や東海(静岡県)など広範囲であり、物理的な距離も相互の交流を妨げる要因となっている。

このような状況を踏まえ、平成 28 年度事業では、遠隔の受講者同士、講師やコーチ、スポーツイベントの運営責任者等を相互に結ぶインターネット上のコラボレーション支援環境として、専用のSNSサイトの構築を行った。

自己学習のツールであるeラーニング教材とこのSNSによるコラボレーション支援環境を整備することで、自己学習での学びの成果、実習カリキュラムのスクーリング実習での学習の成果をさらに発展的かつ継続的に伸ばしていくことが、この取り組みの目的である。

4.1.2. コラボレーション支援環境構築の基本指針

Facebook や Twitter などに代表されるように、今日ではSNSは不特定多数のユーザーの交流の場として認知され、多様で効果的な活用が進んでいるのは周知の通りである。

一般に、SNS環境の整備にはふたつの選択肢がある。ひとつは、Facebook や Mixi のような既存のSNSの中で専用のコミュニティを立ち上げ、それを特定ユーザーの交流や情報共有の場とするアプローチである。このやり方の場合、既存の実績あるSNSをプラットフォームとすることで、安定したシステムの稼働や整備・運用の低コスト化などのメリットがある。もうひとつは、独自に専用のSNSを立ち上げるという方法である。この場合には、既存SNSの機能という制約を受けない柔軟性という利点がある。

平成 28 年度事業では、これらふたつのアプローチについて検討した結果、既存SNSの利用には次のような懸案が想定されることとなった。すなわち、

- Facebook は実名登録が原則であるが、受講者らの中には、知り合いではない他の受講者と実名で交流することに抵抗感が生まれる可能性があり、それがSNSでの活発なやりとりの支障ともなりかねない。
- Facebook はもとより、実名登録ではない Mixi であっても受講者がそれらをすでに利用している場合、今回の学びとは関係のない、参加しているコミュニティやこれまでのコミュニティへの書き込みといった私的な情報が、知り合いではない他の受講者に伝わることとなり、これもプライバシー保護の観点から好ましくない。
- オープンなSNSの場合、セキュリティ上のリスクがクローズドなSNSに比べて 高い。

一般的に、匿名(ハンドル名)での利用の方が、コミュニティ等へ発言や質問をする際にハードルが低く、やりとりも頻繁になるケースが多い。まず、受講者や講師、コーチなどに抵抗感なく使ってもらうことを優先事項とし、平成28年度事業では、専用のクローズドなSNS環境を整えることとした。但し、安定したSNSの稼働、及び運用コストを抑制する狙いから、フリーのSNSである「Open PNE」を採用することとした。「Open PNE」は、多くの企業や団体などで利用実績のある他、SNSとしての標準的な機能を備えており、画面・機能仕様が極めてシンプルに設計されているため、初心者でも操作がしやすい、という利点がある。

今年度の事業では、上記に記した平成 28 年度事業で整備した SNS を再整備し、運用することとした。

4.2. 活用の方策

コラボレーション支援環境は、e ラーニング教材による自己学習の期間、並行して運用することとした。その具体的な活用方法の想定は以下の通りである。

情報交換・共有

- (1) 科目やカリキュラム等に関する受講者の質問に対して、担当講師等が回答する。
- (2) 障がい者スポーツ支援の経験を有する理学療法士・作業療法士が受講者の相談を受ける。
- (3) 受講者同士が感想や意見等について情報交換する。

情報提供

- (1) スクーリング実習の案内や開催されたスクーリング実習の実施の様子等を報告する。
- (2) e ラーニング教材で使用している資料 (パワーポイントのスライド) をダウンロードする。
- (3) その他、学習支援に有用な情報を閲覧できるようにする。

4.3. 利用の実際

本節では、コラボレーション支援環境の利用方法について説明する。具体的には、「新規利用登録」(ユーザー登録)の方法、各ユーザーの活動拠点となる「マイページ」、交流の場である「コミュニティ」を取り上げる。

4.3.1. 新規利用登録

利用方法は、本事業用の「Open PNE」が設定されている所定の URL にアクセスし、利用者が自身でSNSへのユーザー登録を行う。具体的には、Open PNE のトップ画面(図表 4-1 参照)の左下に配置されている「新規登録」を選択すると、新規登録の画面(図表 4-2 参照)に遷移する。ここで自分のメールアドレス等の情報を記入し、「送信」を選択する。

メールアドレス
バスワード
次回から自動的にログイン □
ログインできない方はこちら

新規登録

プライバシーボリシー 利用規約 Powered by OpenPNE

図表 4-1 Open PNE のトップ画面

「送信」が完了すると、入力したメールアドレスに対して、SNS招待状(メール)を送付した旨のメッセージ画面(図表 4-3)が表示されるので、受け取った招待状(メール)に記載されているURLから参加の登録を行う(図表 4-4)。

ユーザーIDはニックネームで、実名での登録はする必要がない。また、公開される情報も個人で設定することが可能となっている。

図表 4-2 新規登録の画面



図表 4-3 メッセージ画面



図表 4-4 メンバー登録画面



4.3.2. マイホーム

新規登録が完了しログインすると、「マイホーム」と呼ばれる画面が表示される。文字通り、利用者一人ひとりに対して用意される Open PNE 上での活動拠点となるページが「マイホーム」である。

ここでは、次に掲載する画面例のように、利用者が設定する写真、参加が可能なコミュニティの一覧、最新の書き込み情報の提示などの機能を有している。その他の機能としては、コミュニティの検索、メンバーの検索、プロフィールの確認、プロフィールの編集など、SNSの一般的な機能を利用することが可能である。

 $\mathbf{M} \mathbf{4} \mathbf{0}$ マイホーム メンバー検索 コミュニティ検索 設定変更 友人を招待する ログアウト ホーム マイフレンド プロフィール確認 プロフィール編集 ▶ INFORMATION コミュニティ最新書き込み 08月28日… カンボジア スポーツ特化スタディツア(0) (スポーツイ ベント) 07月03日*** <u>料目「障がい者スポーツに関連する法制(1)</u> (アーカイブ) 管理者 (0) 07月03日… <u>科目「障がい者スポーツ研究の実際」(1)</u> (アーカイブ) 写真を編集する プロフィール確認 科目「障がい者スポーツの指導と運営の(4) (アーカイ 07月03日^{・・・} <u>料目「障がい者スポーツの指導と運営」(14)</u> (アーカイブ) コミュニティリスト **⇒** <u>もっと見る</u> コミュニティ最新イベント 07月23日… ユニファイドサッカー練習会 [in東京都(0) (スポーツ イベント) ント (13) > 07月04日… <u>障がい児サッカースクールin金沢(0)</u> (スポーツイベン ⇒ 全てを見る(3) 07月04日… 2017年第2回スペシャルオリンピ(0) (スポーツイ ベント) » 07月04日··· <u>第36回スポーツフェスタ2017大阪(0)</u> (スポーツイベン > 07月04日[™] SO大阪 サッカープログラム(0) (スポーツイベント)

図表 4-5 マイホームの画面例

4.3.3. コミュニティ

4.3.3.1. コミュニティとは

他のSNSと同じく、Open PNE 上での情報交換・共有の場となるのがコミュニティである。コミュニティとは、ある特定のテーマや話題について、意見を述べたり、質問を投げ

かけたりするネット上の談話室・掲示板である。コミュニティへの参加は利用者の自由意思に基づき、興味や関心があるテーマ・話題のコミュニティに参加する。通常のSNSでは、参加に制限をかけた運用をしているケースもあるが、このSNSでは、本事業に係っている利用者だけのクローズドなSNSであることから、特に参加制限などのしばりは設けないことが基本原則である。

4.3.3.2. コミュニティの作成

コミュニティは利用者であれば新規に作成することができる。

作成の方法は、マイホームの画面から「コミュニティ検索」を選択する(図表 4-6)。する とコミュニティ検索の画面(図表 4-7)が表示されるので、ここで「コミュニティ作成」を 選択する。

 $\mathbf{M} \mathbf{4} \mathbf{0}$ マイホーム メンバー検索 コミュニティ検索 設定変更 友人を招待する ログアウト ▶ INFORMATION コミュニティ最新書き込み 08月28日… カンボジア スポーツ特化スタディツア(0) (スポーツイ ベント) » 07月03日… <u>科目「障がい者スポーツに関連する法制(1)</u> (アーカイ » 07月03日… <u>科目「障がい者スポーツ研究の実際」(1)</u> (アーカイブ) 写真を編集する 07月03日… 科目「障がい者スポーツの指導と運営の(4) (アーカイ プロフィール確認 コミュニティリスト 07月03日… 科目「障がい者スポーツの指導と運営」(14) (アーカイ ⇒ もっと見る コミュニティ最新イベント > 07月23日[™] ユニファイドサッカー練習会【in東京都(0) (スポーツ イベント) <u>-カイブ</u> 意見交換 (1 ント (13) 07月04日… <u>障がい児サッカースクールin金沢(0)</u> (スポーツイベン ⇒ 全てを見る(3) 07月04日… 2017年第2回スペシャルオリンピ(0) (スポーツイ ベント)

図表 4-6 マイホーム

「コミュニティ作成」を選択すると次に掲載する画面が表示される。ここで、作成したい コミュニティの名称、トピック公開の範囲、トピック作成の権限、コミュニティへの参加条 件、コミュニティに関する説明などを記入し登録する。

7月04日 第36回スポーツフェスタ2017大阪(0) (スポーツイベント)
 707月04日 SO大阪 サッカープログラム(0) (スポーツイベント)

図表 4-7 コミュニティ検索の画面例



図表 4-8 コミュニティ作成の画面例



コミュニティが作成されると以下の図表 4-9 のように表示される。

コミュニティでの情報交換・共有は、コミュニティイベントとコミュニティトピックの機能を活用する。

コミュニティイベントとは、例えば、スポーツ大会の開催などイベント・催しなどの告知

や案内などを目的とする書き込みである。一方、トピックとは、コミュニティのテーマや分野などに応じた個々の話題や情報について意見交換や質疑応答などを行う書き込みである。以下に掲載するのは、作成されたコミュニティの画面(図表 4-10)から「トピックを作成する」を選択すると表示される画面である。ここで、作成したいトピックのタイトルや説明などを記入するとトピックを立てることができる。



図表 4-9 作成されたコミュニティ

図表 4-10 トピック作成の画面例



図表 4-11 トピックとコメントの画面例

4.4. 設置したコミュニティと活動

写直1

今年度の事業では、上記の活用の方策に記した想定に基づき、以下のコミュニティを開設し、情報交換・共有や情報提供を実施した。

ファイルを選択 選択されていません

○コミュニティ「Eラーニング意見交換」

e ラーニング教材「障がい者スポーツ支援 e ラーニング」の学習内容等に関する質問や意見・感想などを自由に書き込むなど情報交換や共有を行うことを目的としたコミュニティ。コミュニティの中に、各科目の「トピック」を立て、トピック上で科目単位の情報のやり取りを行う。

○コミュニティ「スポーツイベント」

平成 29 年度に開催する「スポーツ大会」の告知や実施の様子・結果等の情報共有とスポーツイベントに関する感想や質問などの意見交換を行うコミュニティ。

○コミュニティ「アーカイブ」

e ラーニング教材「障がい者スポーツ支援 e ラーニング」で使用している講義資料(パワーポイントのスライド)のPDF版を閲覧・ダウンロードできるコミュニティ。

次に掲載するのは、コミュニティ「スポーツイベント」の画面である。画面の右下(□で囲まれた部分)の「コミュニティイベント」に、SNSに投稿されたスポーツイベントの開催に関する情報(見出し)が提示される。ユーザーは興味・関心のある見出しを選択すると、その詳細が表示される。

M # @ マイホーム メンバー検索 コミュニティ検索 設定変更 友人を招待する ログアウト コミュニティ スポーツイベント 開設日 2017年6月27日 管理者 管理者 メンバー数 トピック公開 全員に公開 スポーツイベント (13) トピック作成 コミュニティ参加者が作成可能 コミュニティメンバー 参加条件 誰でも参加可能 このコミュニティは平成29年度に開催する「スポーツ イベント」の告知や実施結果などの情報共有と、スポーツイベントに関する感想や質問などの意見交換を行う場 コミュニティ 説明文 No Image No Image No Image です。お気軽にご参加ください。 > 07月23日 ユニ ファイドサッカー練習会【in東京都 okame (0) なおかば(0) haji (0) 07月04日 障がい児サッカースクールin金沢(0) 07月04日 2017年第2回スペシャルオリンピ(0) 07月04日第36回スポーツフェスタ2017大阪(0) コミュニティ No Image No Image イベント 07月04日 SO大阪 サッカープログラム(0) ⇒ もっと見る takahito.yam CPKOBE (0) 初心者Y (0 オベントを作成す

図表 4-12 コミュニティ「スポーツイベント」

次に掲載するのは、コミュニティ「アーカイブ」の画面例(図表 4-13)である。画面の構成は基本的にコミュニティ「スポーツイベント」と同じで、右下のエリアにアーカイブ情報が示されている。具体的には、トピックという単位で科目ごとに講義資料(パワーポイントのスライド)が束ねられている。ユーザーが閲覧・入手したい講義資料の科目(トピック)を選ぶと、その科目で使用されている講義資料の一覧が提示される(図表 4-14)。いずれもPDFファイルとなっているので、パソコン、タブレット、スマートフォンでも閲覧・ダウンロードすることが可能である。

図表 4-13 コミュニティ「アーカイブ」



以下に示すように単元ごとに講義資料へのリンクが張られている。

図表 4-14 講義資料閲覧・ダウンロード



実証講座実施報告編

1. 実証講座の概要

1.1. 教育内容

実証講座として実施した「障がい者スポーツ支援学び直しプログラム」は、e ラーニングによる自己学習とスクーリング実習(実習カリキュラム)で構成されている。

1.1.1. e ラーニング

e ラーニングでは、スポーツを行う障がい者に対して、理学療法士・作業療法士が専門的な立場から支援する上で必要となる専門知識と技術を系統的に学習する。具体的には、下表に示す5つの科目が用意され、受講者は各人のペースでそれらに取り組んでいく。

この e ラーニング教材は、平成 28 年度事業で制作したもので、その具体的な内容は次章で詳しく報告する。

なお、今年度事業の取り組みとして、この e ラーニング教材の改訂を実施したが、改訂作業と実証講座の実施時期がほぼ重なっていたことから、実証講座では平成 28 年度制作の教材を利用した。そのため、e ラーニング教材の今年度の改訂箇所に対する検証は実証講座ではなく、実施委員会・分科会の各構成員に試用してもらい、その結果に基づき評価を行うこととした。改訂された内容については「e ラーニング教材制作報告編」を参照されたい。また、今年度の改訂教材に対する検証結果に関しては本編において後述とする。

科目名 学習単元数 コマ数 障がい者スポーツの概要 (1)10 (2)障がい者スポーツの指導と運営 25 3 (3) 障がい者スポーツの指導と運営の実際 3 18 (4) 障がい者スポーツ研究の実際 3 11 (5)障がい者スポーツに関連する法制度 5 5 計 18 69

図表 1-1 e ラーニング教材の内容

この e ラーニングでは、多忙な実務者(現役の理学療法士・作業療法士)の学びやすさを 考慮し、モバイルラーニングの形態を採用している。すなわち、スマートフォン・タブレットといったモバイル機器を端末として e ラーニング教材にアクセスし学習する。モバイルラーニングでは時間や場所の制約が少ないため、移動中や休憩時間などのスキマ時間を活用した学びも可能である。また、パソコンから利用することもできるので、自宅・職場などでじっくりと時間をかけて学習するスタイルにも対応している。

1.1.2. スクーリング実習

スクーリング実習(実習カリキュラム)は、障がい者によるスポーツイベントに運営支援者として実際に関わり、その体験を通じて、障がい者スポーツの支援や企画・運営・マネジメント等の実践的なスキルの習得を図る集合研修である。e ラーニングで学んだ専門知識・技術を実際の現場で統合し活かすことを体験する場と位置づけられている。

1回あたりの時間数は4時間で、当日のスポーツイベント(プログラム)運営の前後において、事前打ち合わせ・準備、実施後フィードバックなどが組み込まれたカリキュラム構成となっている。カリキュラムの詳細については次章で報告する。

1.2. 実証講座の目的

障がい者スポーツ支援に係る専門知識・技術の習得や障がい者スポーツ支援に関心を有する現役の理学療法士・作業療法士を対象に、本事業で開発した学び直しプログラムを実証講座として実施した。具体的には、受講者各人にeラーニング教材による自己学習で専門知識と技術を学び直してもらうと共に、スクーリング実習の受講と通して、障がい者スポーツ支援の実践について体験的に学習してもらうこととした。

実証講座の実施プロセスの中で、受講者自身による障がい者スポーツ支援の専門知識・技術に係る自己評価や受講後アンケート、e ラーニングの学習ログ分析などを行うと共に、スクーリング実習担当者による実施結果のとりまとめを行った。これらの実証講座の実施によって得られたデータや知見などに基づき、受講者が受講を通じて獲得できた専門知識・技術や態度などを総合的に考察し、本学び直しプログラムの有用性・有効性について検証することが実証講座の目的である。併せて、ここで集約された検証結果を学び直しプログラムの今後の改訂や効果的な運営方法・体制などに活かしていくことも狙いとしている。

1.3. 対象者等

1.3.1. 対象者

実証講座で対象としたのは、障がい者スポーツ支援に今後関わっていきたい、当該分野の 専門性を身につけていきたいなど、興味や関心を有している現役の理学療法士・作業療法士 である。具体的には、本事業の実施委員が所属する大学・専門学校の理学療法士・作業療法 士養成課程修了者(卒業生)に対して呼びかけを行った。平成27年度事業における実証講 座に参加したことのある理学療法士・作業療法士の他、今年度初めて受講する者も対象とし た。呼びかけを行った大学・専門学校は以下の通りである。

□大学

大阪保健医療大学、東京医療学院大学、聖隷クリストファー大学

□専門学校

大阪リハビリテーション専門学校、専門学校金沢リハビリテーションアカデミー、はくほ う会医療専門学校赤穂校、ハーベスト医療福祉専門学校、高知リハビリテーション学院

1.3.2. 実証講座の参加者

e ラーニング教材による自己学習は、基本的に受講対象者である理学療法士・作業療法士がそれぞれのペースで取り組みを進めていく。

一方、スクーリング実習では受講者以外に役割の異なる複数の参加者が係ることになる。 具体的には、実際にスポーツを実施する協力者(障がい者)、スポーツ実施を専門的に指導 するコーチ、受講者を指導する実習指導者、スポーツ実施やイベント運営をサポートするボ ランティア支援者、スポーツイベント全体を統括・管理するスタッフである。この全体統括・ 管理スタッフ及び実習指導者の役割は、実施委員が各回複数名で担当することとした。

- 受講者 プログラムを受講する理学療法士・作業療法士
- 協力者 スポーツを実施する障がい者
- コーチ スポーツ実施を専門的に指導するコーチ
- 実習指導者 受講者に対する実習指導者
- ボランティア支援者 スポーツ実施・運営をサポートするボランティアスタッフ
- 統括・管理 スポーツイベント全体(スクーリング実習)の統括・管理スタッフ

1.3.3. 実施の流れ・時期等

実証講座は、平成29年5月から同年12月までの8カ月間に亘って実施した。

(1) e ラーニング教材による自己学習

6月に実施委員の各大学・専門学校に対して、e ラーニングの告知・募集を開始した。その後、受講希望者に対しては随時、e ラーニングのアカウントを発行し参加を受け入れることとした。

(2) スクーリング実習

スクーリング実習は 5 月から 12 月にかけて、大阪府、石川県、静岡県、東京都の各地、計 13 回(日)開催した。実施の日程・場所(施設名)などの詳細は、本編の第 3 章「実施

結果」にまとめて示している。

1.4. 検証方法

実証講座の実施内容・結果に対する検証は、次に示す定量的な評価と定性的な評価を総合する方法で実施することとした。

(1) 受講者アンケート

受講者の職種や臨床経験、eラーニング教材の視聴状況やスクーリング実習への参加回数など受講者の基本属性などに関するアンケートを実施する。これら自己申告でeラーニング学習ログや実施報告の検証に有用な補完データを収集する。

「受講者アンケート」は本編末尾に参考資料として添付している。

(2) 自己評価表

スクーリング実習の受講後に受講者に「自己評価表」を配付し、障がい者スポーツ支援に係る各能力項目に対する自己評価(定量的評価と定性的評価)をしてもらう。具体的には、スポーツの直接指導、スポーツイベント・プロジェクトの運営及び企画などについて自身への振り返りをもとに評価付けを行う。受講前と受講後の結果を比較し、その差異と変化の要因を検証する。

「自己評価表」は本編末尾に参考資料として添付している。

(3) スクーリング実習実施報告

スクーリング実習の全体統括・運営担当者による各回の終了後に所定書式にて、実習の実施内容、実施状況、実施後のフィードバック(スクーリング実習で学んだこと、今後カリキュラムやeラーニング教材で取り上げてほしい事柄など)を実施報告としてとりまとめる。この報告の内容に基づき、スクーリング実習の有用性や改善事項などについて検証する。各回の「スクーリング実習実施報告」は本編の第3章に掲載している。

(4) e ラーニング学習ログ

e ラーニング教材を配信するサーバに蓄積管理される受講者の学習ログ (履歴) データに対して分析を行い、e ラーニング教材による自己学習の状況を評価・検証する。 具体的には、サーバへのアクセス回数、各学習単元のコマの視聴回数、確認テストの正解率などを指標として考察する。

2. 実施内容

2.1. e ラーニング教材の内容

実証講座で使用した e ラーニング教材は、「e ラーニング教材制作報告編」で詳述した通り、内容は以下に示す 5 つの科目で構成されている。

- ○科目「障がい者スポーツの概要」
- ○科目「障がい者スポーツの指導と運営」
- ○科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」
- ○科目「障がい者スポーツ研究の実際」
- ○科目「障がい者スポーツに関連する法制度」

本節では、これらの各科目の概要と科目を組み立てている学習単元を一覧で示す。その詳細については、平成 28 年度『障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士育成のための学び直しプログラムの開発・実証事業成果報告書』の「e ラーニング教材制作報告編」な、実証講座で使用した e ラーニング教材の改訂版の報告であり、一部内容が変更となっている)

2.1.1. 科目「障がい者スポーツの概要」

図表 2-1 科目「障がい者スポーツの概要」

学習単元	コマ (タイトル)
障がい者スポーツの捉え	障がい者の社会参加
方	障がい者の社会参加ヘルスプロモーション
障がい者スポーツの歴史	障がい者スポーツの歴史
的変遷	障がい者スポーツの広がり
障がい者スポーツの現状	障がい者スポーツの現状
と課題	障がい者スポーツの課題
障がい者スポーツに関連	障がい者スポーツへのかかわり方
する資格	障がい者スポーツの運営資格
	障がい者スポーツの指導者資格
	障がい者スポーツのサポート資格

科目「障がい者スポーツの概要」は学び直しプログラムの導入に位置する科目である。障がい者スポーツ支援について、これから専門的に学ぼうとする受講者(理学療法士・作業療法士)に対して、その基本となる部分を解説する。

2.1.2. 科目「障がい者スポーツの指導と運営」

図表 2-2 科目「障がい者スポーツの指導と運営」

	2
学習単元	コマ (タイトル)
障がい者スポーツの指導	リスク管理と応急処置
	介入の方法 ①社会的学習理論
	介入の方法 ②情報処理過程の基本
	介入の方法 ③入力レベルの介入
	介入の方法 ④処理レベルの介入
	介入の方法 ⑤出力レベルの介入
障がい者スポーツの運営	普及理論
	運営マネジメント ①人的ネットワークの構築
	運営マネジメント ②資金(財源)のマネジメント
	運営マネジメント ③既存資源の活用方法
障がい者スポーツのパフ	ウォーミングアップ①
ォーマンス向上指導	ウォーミングアップ②
	ウォーミングアップ③
	疼痛緩和ケア①
	疼痛緩和ケア②
	疼痛緩和ケア③
	疼痛緩和ケア④
	テーピング①:スポーツテーピング
	テーピング②:キネシオテーピングとその効果
	テーピング③:キネシオテーピング法
	テーピング④:キネシオテーピング法スポーツ別テーピング
	テーピング⑤:キネシオテーピングの資格体系
	コンディショニング①:パフォーマンスアップの方向性
	コンディショニング②:怪我防止の方法論
	コンディショニング③:パフォーマンスアップの方法論

科目「障がい者スポーツの指導と運営」は、スポーツを実施する障がい者に対する指導やスポーツ大会等のイベントを企画・運営する上で必要となる知識や技術をテーマとしている。学習単元「障がい者スポーツの指導」と「障がい者スポーツの運営」は平成27年度事業で制作された内容で、「障がい者アスリート支援の実際」は平成28年度事業で新規に追加された学習単元である。

2.1.3. 科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」

図表 2-3 科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」

学習単元	コマ (タイトル)
障がい者スポーツの指導の	社会生活向上例 ①子供の健康な成長を促すスポーツ
実際	社会生活向上例 ②健康づくり・仲間づくりのスポーツ
	社会生活向上例 ③社会人の就労を継続するスポーツ
障がい者スポーツの運営の	参加支援活動例 ①高齢者役割獲得
実際	参加支援活動例 ②販売業務の拡大
	参加支援活動例 ③就労支援活動
	グローバル活動例 ①グローバル視点でスポーツを活用
	するプロセス
	グローバル活動例 ②グローバル視点でスポーツを活用
	することの効果と課題
障がい者アスリート支援の	障がい者スポーツ研究
実際	ソーシャルフットボール
	車椅子バスケットボール
	アンプティサッカー
	電動車椅子サッカー
	スペシャルオリンピックユニファイドスポーツ
	スペシャルオリンピックス MATP
	デフバレーボール
	ボッチャ
	チェアスキー

科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」は、そのタイトルが示す通り、指導と運営に係る知識と技術の実践について、具体的な事例に基づいて学習する内容で構成されている。学習単元「障がい者スポーツの指導の実際」及び「障がい者スポーツの運営の実際」は平成27年度事業で制作されたもので、「障がい者アスリート支援の実際」は平成28年度事業で新規追加された学習単元である。ここでは、代表的な競技が取り上げられている。

2.1.4. 科目「障がい者スポーツ研究の実際」

図表 2-4 科目「障がい者スポーツ研究の実際」

学習単元	コマ (タイトル)
障がい者スポーツ研究総論	障がい者スポーツ研究の捉え方
	障がい者スポーツ研究の現状と課題
	障がい者スポーツ研究の進め方
障がい者スポーツの研究対	障がい者スポーツの研究対象と方法
象と方法	
障がい者スポーツの研究例	運動技能例①
	運動技能例②
	健康増進例①
	健康増進例②
	生活の質向上例
	社会参加例
	支援者への波及効果

科目「障がい者スポーツ研究の実際」では、障がい者スポーツ研究の捉え方や研究方法、 先行の研究例などについて学ぶ。この学習を通して、受講者一人ひとりによる修了後の発展 的な学習・探求や研究へと促すことが狙いである。

2.1.5. 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」

図表 2-5 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」

学習単元	コマ (タイトル)
障害者基本法	障害者基本法
障害者総合支援法	障害者総合支援法
介護保険法	介護保険法
雇用促進法	雇用促進法
スポーツ基本法	スポーツ基本法

この科目も「障がい者スポーツの概要」と同じく、障がい者スポーツ支援に従事する専門職として把握しておくべき基本的な知識の学習を目的としている。ここでは、障害者基本法からスポーツ基本法まで、主だった5つの法律について、その重要なポイントを理解する。

2.2. e ラーニング教材の仕様

2.2.1. 画面仕様

制作した e ラーニング教材は、講義動画型のコンテンツと確認テストからなる。講義動画型コンテンツは、講師が板書に相当するパワーポイント資料を背景に講義を進めていき、パワーポイント資料は講義の進行と同期をとって切り替わる。

e ラーニングは 5 科目で構成されているが、各科目の中は 1 回の視聴単位である「コマ」に分かれている。1 コマの標準的な時間数は約 10 分となっており、この時間の中でひとつの完結した講義を視聴することができる。講義動画の再生時には、「一時停止」や「停止」、「先送り」「早戻し」の操作もできるので、学習者の都合に応じた視聴も可能となっている。また、各回のコマには学んだことの理解をチェックする二択式の小テストが用意されており、これにより学習者は学習内容の重要ポイントを確認することができる。



図表 2-6 コンテンツの画面例

2.2.2. 利用の流れ・画面の遷移

e ラーニング教材の画面仕様を以下に示す。ここでの例はスマートフォンの画面だが、パソコン、タブレットからもアクセス可能で、その場合の画面構成もこの例と同様である。

図表 2-7 画面仕様

①トップ画面

②ログイン画面





③学習トップメニュー画面



④学習単元メニュー画面



⑤学習単元画面(再生前)



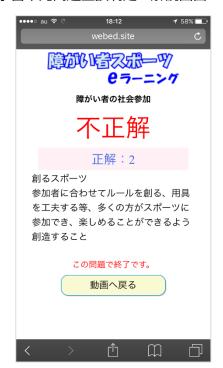
⑥学習単元画面(再生中)



⑦学習単元問題画面



⑧学習単元問題正誤判定・解説画面



画面例①はeラーニングの入り口にあたるトップ画面で、右上に配置された「ログイン」を選択(タップ・クリック)すると、ログインを促すログイン画面(画面例②)へ遷移する。ここで、予め学習者一人ひとりに配付されているユーザーIDとパスワードを投入し、ログイン手続きが完了(ユーザーIDとパスワードの認証に成功)すると、画面例③の学習トップメニュー画面が提示される。

ログイン後は、メニューや選択肢の選択はタップ・クリックで行う仕様となっている。

画面③「学習トップメニュー画面」では、全5科目を構成するすべての学習単元が一覧で表示される。学習者はこれらの中から、自分が学びたい科目・学習単元を選択する。各学習単元には、他の学習単元の修了といった前提条件は設定されていないので、選択の順序は学習者の希望・意思に任されている。

学習単元を選択すると、画面例④「学習単元メニュー画面」に遷移し、その単元を構成するコマの一覧が表示される。この例でいえば、学習単元「障がい者スポーツの捉え方」を構成するコマが「障がい者の社会参加」と「障がい者の社会参加へルスプロモーション」であり、いずれかを学習者は選択する。

コマを選択すると画面例⑤のような講義映像再生前の画面(「学習単元画面」)となり、ここで「再生」▷マークを選択すると講義が開始される(画面例⑥)。

画面例⑤の「学習単元画面」では、確認テストを選ぶこともできる。ここで「問題へ」を 選択すると、このコマの講義内容に関する問題が提示され(画面例⑦)、回答に対する採点 結果と解説が即時にフィードバックされる(画面例⑧)。

2.3. スクーリング実習

2.3.1. スクーリング実習の目的

e ラーニング教材による学習は専門知識の獲得が主であり、学習スタイルの特性からスポーツ支援の実践に係るスキルの習得まではカバーすることが困難である。このスクーリング実習では、e ラーニング教材で学んだ専門知識を活かしながら、障がい者スポーツ支援の実際を体験的に学習し、その実践スキルの向上を図ることが狙いである。

2.3.2. 今年度の特徴

このカリキュラムは平成27年度事業で策定され実施されたものだが、その結果から、事業の実施期間が短く準備に時間を要したため、各地域で複数回の開催ができなかったこと、また開催に関する情報が十分に受講希望者に周知することができず参加したくても参加できなかった受講者が多数いたことなどが反省点として挙げられた。さらに参加した受講者からは1回の実習では十分な技術の習得が難しく2回受講したいという要望や、実習への参加がeラーニング教材の視聴に対する動機づけとなるなどの意見も寄せられた。

このような実施結果を踏まえて、今年度事業では、開催期間を長く設定し開催回数も増やすこととした。さらに、受講者が複数回受講できるように、コラボレーション支援環境を活用したスクーリング実習に関する情報提供を行うこととした。

2.3.3. 教育内容

スクーリング実習の標準時間数は 4.0 時間で、カリキュラムは 5 つのパートで構成されている。最初のパートは「事前打ち合わせ」で当日のプログラムの目的や各スタッフの役割の確認などを行う。さらに、視聴した e ラーニング教材や実習で学びたいこと・習得したいこと(受講目的)の確認と参加者による情報共有も行う。第 2 のパートは「事前準備」で、会場設営や環境調整、道具類の確認といった準備、参加者の出迎えを行う。続く第 3 のパートが「プログラムの実施」(スポーツ大会の実施)で、全体の進行状況把握、役割の遂行、リスク管理といった運営に係るタスクを実行する。プログラムの実施後は第 4・5 のパートとして「実施後フィードバック」と「演習ワークショップ」が配置されている。「実施後フィードバック」では、受講目的が達成できたか、自己の役割が果たせたかなどの観点から振り返りを行い、自身の達成度から今後の課題と改善策を見出していく。最後の「演習ワークショップ」では、当日の実施運営経験を基に他の状況(天候が悪かった、コーチが一人参加できなかったなど)を想定し、その場合の適切な運営方法について意見交換をする。これにより、以降の支援活動のパフォーマンス向上へとつなげていくことが狙いである。

図表 2-8 スクーリング実習のカリキュラム(基本形)

	運営スタッフ	運営責任者
実習目的	1. 実習を通して e ラーニングで学習した知識を統合する 2. 実際に障がい者スポーツプログラムの運営メンバーとして役割遂行できる	1. 実習を通してeラーニングで学習した知識を統合する 2. 実際に資源を調整し障がい者スポーツプログラムの運営ができる
実施内容	企画書の把握、それに基づく準備、当日の運営とフィー	・ドバック
事前準備	eラーニング学習 自己の健康管理 企画書の把握	eラーニング学習 自己の健康管理 企画書の把握 必要物品の手配・準備
実習当日	適切な服装で集合(時間厳守)	適切な服装で集合(時間厳守) 必要物品・書類持参
0:00~0:30	■事前打ち合わせに出席 以下を把握する 1. プログラムの目的 2. プログラムの流れ 3. 参加予定者の概要と注意事項 4. 各スタッフの役割 5. 自己の役割 以下について情報共有する 1. 視聴したeラーニングコンテンツ 2. 実習で学びたいことや習得したいこと(受講目的)	■スタッフを招集し事前打ち合わせを実施 以下を説明する 1. プログラムの目的 2. プログラムの流れ 3. 参加予定者の概要と注意事項 4. 各スタッフの役割 以下について受講生から情報を得る 1. 視聴したeラーニングコンテンツ 2. 実習で学びたいことや習得したいこと(受講目的)
0:30~1:10	■事前準備 0. 会場位置関係(トイレや更衣室の場所)の確認 1. 会場設営・環境調整 2. 道具類の確認	■事前準備と最終チェック O. 会場位置関係(トイレや更衣室の場所)の確認 1. 会場設営・環境調整 2. 道具類の確認 3. 最終確認、チェック
(40 分間)	■参加者出迎え 1. 名前の確認 2. 健康状態の確認・注意事項の把握 3. 更衣室・トイレの案内	■参加者出迎え 1. 名前の確認 2. 健康状態の確認・注意事項の把握 3. 関係スタッフへの連絡(報告)
1:10~2:40(90 分間)	■プログラムの実施 1. 役割遂行 2. 全体の進行状況把握 (事前練習・開会式・終了式・集合写真・見送り/片付け) 3. リスク管理・関係者への連絡	■プログラムの実施 1. 全体の進行状況把握・進行時間・撤収時間の確認(事前練習・開会式・終了式・集合写真・見送り/片付け) 2. 必要事項を関係者等に指示 3. リスク管理 4. 緊急時の対応判断・実行
2:40~3:10 (30 分間)	■実施後フィードバック 1. 受講目的は達成できたか 2. 自己の役割は果たせたか 3. 担当業務と全体状況を把握できたか 4. 課題確認と改善策の具体化 再度視聴したいeラーニング、あるいはあれば良いeラー	■実施後フィードバック 1. 受講目的は達成できたか 2. 自己の役割は果たせたか 3. 担当業務と全体状況を把握できたか 4. 課題確認と改善策の具体化 ーニングコンテンツ
3:10~4:00	■演習ワークショップへの出席 積極的な参加	■演習ワークショップの企画・運営1. 臨機応変を必要とされる事態を設定2. ワークショップの運営

3. 実施結果

3.1. 概要

実証講座の実施内容の概要を以下に一覧で示す。

図表 3-1 実証講座の実施内容の概要

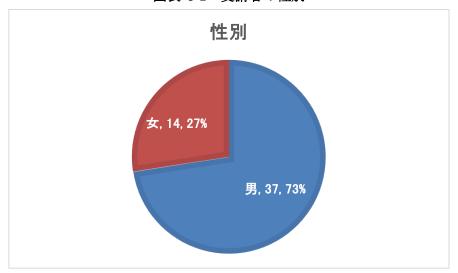
■ e ラーニング 障がい者スポーツ支援で必要となる障がい者スポーツの指導・運営などに係る専門知識・技術を e ラーニング教材で学習する。		
内容 ■スクーリング実習 障がい者スポーツ大会のプログラム運営スタッフとして参加し、障がい者スポーツの指導・運営の実際について学習する。 実施期間 平成 29 年 5 月~同年 12 月 受講者の居住地 大阪府、兵庫県、東京都、静岡県、石川県、高知県 ε ラーニングは受講者の各居住地にて各人が随時実施。 スクーリング実習は大阪府(6回)、東京都(1回)、静岡県(2回)、石川県(4回)の4エリアで、計13回実施。※()内は各地での実施回数。 ■ e ラーニング ユーザーID発行数 150 利用者数 72 名(延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ51名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析		■ e ラーニング
□スクーリング実習 障がい者スポーツ大会のプログラム運営スタッフとして参加し、障がい者スポーツの指導・運営の実際について学習する。 実施期間 平成29年5月~同年12月 受講者の居住地 大阪府、兵庫県、東京都、静岡県、石川県、高知県 e ラーニングは受講者の各居住地にて各人が随時実施。スクーリング実習は大阪府(6回)、東京都(1回)、静岡県(2回)、石川県(4回)の4エリアで、計13回実施。※()内は各地での実施回数。 □ e ラーニング ユーザー1 D発行数150 利用者数72名(延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際にeラーニングにログインし1コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ51名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。(1)e ラーニング学習ログ分析 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③「受講者アンケート」の分析		障がい者スポーツ支援で必要となる障がい者スポーツの指導・運営な
■スクーリング実習 障がい者スポーツ大会のプログラム運営スタッフとして参加し、障が い者スポーツの指導・運営の実際について学習する。 実施期間 平成 29 年 5 月~同年 12 月 受講者の居住地 大阪府、兵庫県、東京都、静岡県、石川県、高知県 e ラーニングは受講者の各居住地にて各人が随時実施。スクーリング実習は大阪府 (6 回)、東京都 (1 回)、静岡県 (2 回)、石川県 (4 回) の 4 エリアで、計 13 回実施。※ () 内は各地での実施回数。 ■ e ラーニング ユーザー I D発行数 150 利用者数 72 名 (延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析	内宏	どに係る専門知識・技術を e ラーニング教材で学習する。
下記の方法により総合的に学習成果の評価方法 下記の方法により総合的に学習成果の評価方法 下記の方法により総合的に学習成果の分析 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ②「受講者アンケート」の分析	71分	■スクーリング実習
実施期間 平成 29 年 5 月~同年 12 月 受講者の居住地 大阪府、兵庫県、東京都、静岡県、石川県、高知県 e ラーニングは受講者の各居住地にて各人が随時実施。 スクーリング実習は大阪府 (6 回)、東京都 (1 回)、静岡県 (2 回)、石川県 (4 回) の 4 エリアで、計 13 回実施。 ※ () 内は各地での実施回数。 ● e ラーニング ユーザー I D発行数 150 利用者数 72 名 (延べ人数ではないユニークな人数) 受講者人数 ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 学習成果の評価 方法 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③「受講者アンケート」の分析		障がい者スポーツ大会のプログラム運営スタッフとして参加し、障が
受講者の居住地 大阪府、兵庫県、東京都、静岡県、石川県、高知県		い者スポーツの指導・運営の実際について学習する。
実施場所・回数 e ラーニングは受講者の各居住地にて各人が随時実施。 スクーリング実習は大阪府 (6 回)、東京都 (1 回)、静岡県 (2 回)、石川県 (4 回)の4 エリアで、計 13 回実施。 ※ ()内は各地での実施回数。 ■ e ラーニング ユーザー I D発行数 150 利用者数 72 名 (延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析	実施期間	平成 29 年 5 月~同年 12 月
実施場所・回数 スクーリング実習は大阪府(6回)、東京都(1回)、静岡県(2回)、石川県(4回)の4エリアで、計13回実施。※()内は各地での実施回数。 ■ e ラーニング ユーザーID発行数 150 利用者数 72 名(延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際にe ラーニングにログインし1コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ51名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析	受講者の居住地	大阪府、兵庫県、東京都、静岡県、石川県、高知県
実施場所・回数 石川県 (4回) の 4 エリアで、計 13 回実施。 ※ () 内は各地での実施回数。 ■ e ラーニング ユーザー I D発行数 150 利用者数 72 名 (延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析		e ラーニングは受講者の各居住地にて各人が随時実施。
石川県 (4回) の 4 エリアで、計 13 回実施。 ※ () 内は各地での実施回数。 ■ e ラーニング ユーザー I D発行数 150 利用者数 72 名 (延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析	宝梅坦亚,回粉	スクーリング実習は大阪府(6回)、東京都(1回)、静岡県(2回)、
■ e ラーニング ユーザー I D発行数 150 利用者数 72 名(延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析	天灺場川 * 凹剱	石川県(4回)の4エリアで、計13回実施。
□ ユーザー I D発行数 150 利用者数 72 名(延べ人数ではないユニークな人数) ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 □ スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析		※ () 内は各地での実施回数。
受講者人数 ※利用者数とは実際にeラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習延べ51名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ①eラーニング学習ログ分析 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③「受講者アンケート」の分析 ②「受講者アンケート」の分析		■ e ラーニング
受講者人数 ※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析		ユーザーID発行数 150 利用者数 72 名(延べ人数ではないユニー
を視聴した受講者の人数 ■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析		クな人数)
■スクーリング実習 延べ 51 名 下記の方法により総合的に学習成果を評価する。 ① e ラーニング学習ログ分析 ② 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③ 「受講者アンケート」の分析	受講者人数	※利用者数とは実際に e ラーニングにログインし 1 コマ以上の教材
延べ51名下記の方法により総合的に学習成果を評価する。学習成果の評価 方法① e ラーニング学習ログ分析 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③「受講者アンケート」の分析		を視聴した受講者の人数
下記の方法により総合的に学習成果を評価する。		■スクーリング実習
②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③「受講者アンケート」の分析		延べ51名
学習成果の評価 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③「受講者アンケート」の分析		下記の方法により総合的に学習成果を評価する。
方法 ②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析 ③「受講者アンケート」の分析	学習成里の証価	① e ラーニング学習ログ分析
③「受講者アンケート」の分析		②「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析
④スクーリング実習「実施報告」の検証	<i>万</i> (広	③「受講者アンケート」の分析
		④スクーリング実習「実施報告」の検証

3.2. 受講者アンケートの結果

以下は、受講者アンケートにより収集した受講者の基本属性の集計結果である。

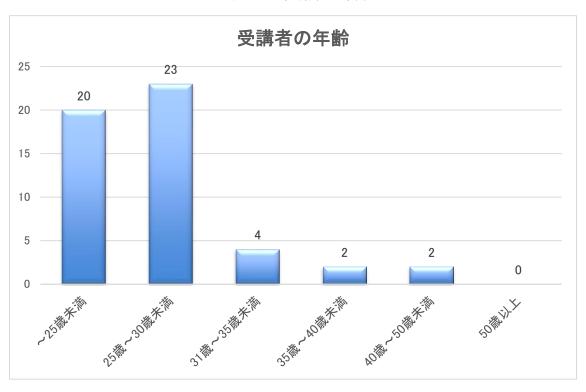
(1) 性別

図表 3-2 受講者の性別



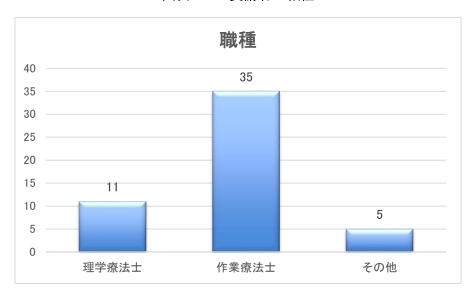
(2) 年齢

図表 3-3 受講者の年齢



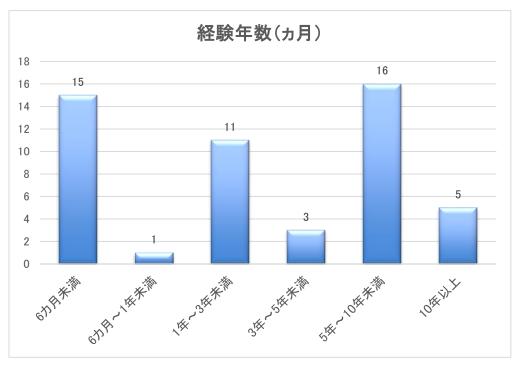
(3) 職種

図表 3-4 受講者の職種



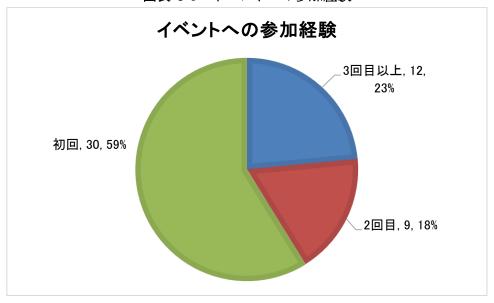
(4) 臨床現場での経験の期間

図表 3-5 臨床経験の期間



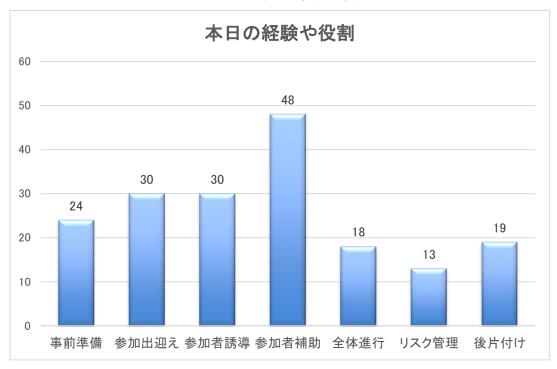
(5) イベントへの参加経験

図表 3-6 イベントへの参加経験



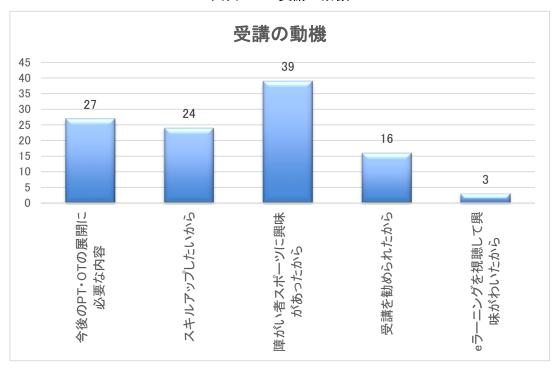
(6) 本日の経験や役割

図表 3-7 本日の経験や役割



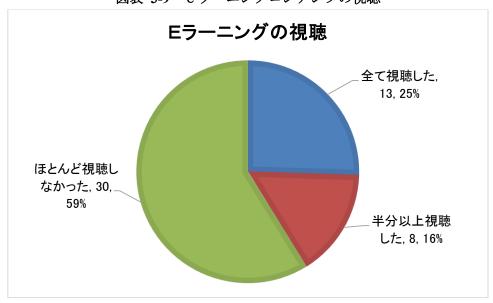
(7) 受講の動機

図表 3-8 受講の動機



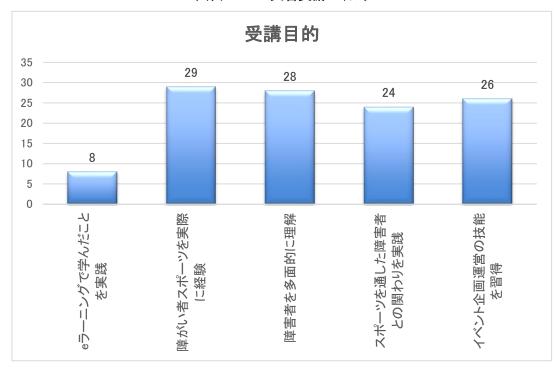
(8) e ラーニングコンテンツの視聴

図表 3-9 e ラーニングコンテンツの視聴



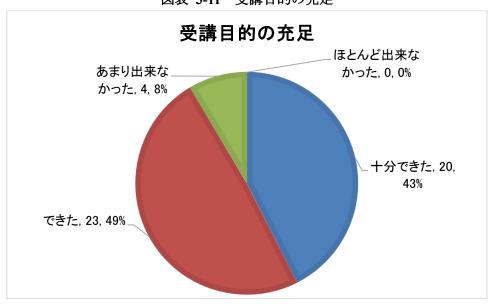
(9) 実習受講の目的

図表 3-10 実習受講の目的



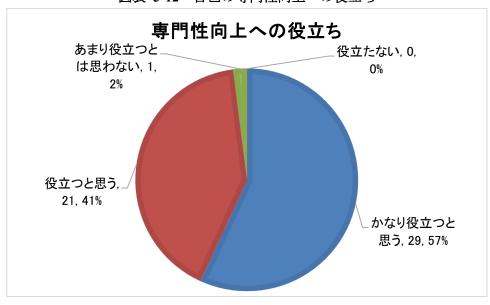
(10) 受講目的の充足

図表 3-11 受講目的の充足



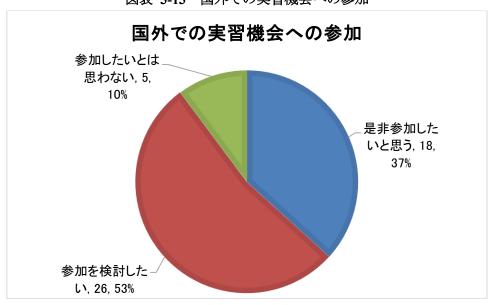
(11) 自己の専門性向上への役立ち

図表 3-12 自己の専門性向上への役立ち



(12) 国外での実習機会への参加の意向

図表 3-13 国外での実習機会への参加



3.3. 「自己評価表」による受講者自己評価結果の分析

3.3.1. 「自己評価表」の実施方法と内容

スクーリング実習を終えた受講者に対して、「自己評価表」に沿って障がい者スポーツ支援を実施する上で必要な指導・運営・企画・効果判定に係る自分自身の能力への自己評価を アンケート方式で求めた。

この「自己評価表」では、「① スポーツを直接指導することについて」「② プロジェクトやイベントを運営することについて」「③ プロジェクトやイベントを企画することについて」「④ プロジェクトやイベントの成果を示すことについて」という4つの能力項目(大項目)ごとに、以下に示す能力細目を定義した。

図表 3-14 「自己評価表」の能力項目(評価項目)

- ① スポーツを直接指導することについて
 - 1-1-1 参加者の意思を尊重できる
 - 1-1-2 参加者(当事者)個別の特性を知っている
 - 1-2-1 自分自身がスポーツを楽しめる
 - 1-2-2 広い視野を持てる
 - 1-2-3 該当種目のルールを知っている
 - 1-2-4 参加者が理解できる伝え方ができる
 - 1-2-5 参加者に合わせた対応ができる
 - 1-3-1 社会的学習理論に基づいた介入ができる(介入方法1)
 - 1-3-2 情報処理の基本に基づいた介入ができる(介入方法2)
 - 1-3-3 入力レベルに基づいた介入ができる(介入方法3)
 - 1-3-4 処理レベルに基づいた介入ができる(介入方法4)
 - 1-3-5 送信レベルに基づいた介入ができる(介入方法5)
 - 1-4-1 リスク管理の知識がある
 - 1-4-2 怪我や体調不良に適切に早急に対応できる
 - 1-4-3 リスク管理の視点から参加者の現状を把握できる
- ② プロジェクトやイベントを運営することについて
 - 2-1-1 当日に向けて体調を整えることができる
 - 2-1-2 自身の役割のイメージができている
 - 2-1-3 大会の運営方法を知っている
 - 2-2-1 楽しめる環境が作れる
 - 2-2-2 会場の気温や天候などの分析ができる

- 2-2-3 参加者に合わせてルールや方法を調整できる
- 2-2-4 環境に合わせてルールや方法を調整できる
- 2-3-1 指示された働きができる
- 2-3-2 チーム内の統制が取れる働きかけができる
- 2-3-3 参加者一人一人の状態に気を配れる
- 2-3-4 プロジェクト全体の統率がとれる
- 2-3-5 関係者との連携がとれる
- 2-4-1 次回への課題を具体化し、改善策を提示することができる
- 2-4-2 プロジェクトを継続して実施できる
- 2-4-3 実施後の振り返りができる
- ③ プロジェクトやイベントを企画することについて
 - 3-1-1 ビジョン (具体的な姿) が描ける
 - 3-1-2 実施するスポーツの特性を知っている(作業分析ができる)
 - 3-1-3 障がい者スポーツに関連する情報(制度や現状など)がわかる(環境分析ができる1)
 - 3-1-4 スポーツ実施に関連する情報(場所や道具など)がわかる(環境分析ができる2)
 - 3-1-5 人的資源を含めた実施地域の特性情報がわかる (環境分析ができる3)
 - 3-1-6 障がい者に関連する施策や制度などの情報がわかる(環境分析ができる4)
 - 3-2-1 実効ある企画会議を開催・運営できる
 - 3-2-2 実施上の課題・ニーズを抽出できる
 - 3-2-3 行動計画書(具体的な企画書)を作成できる
 - 3-3-1 第三者にプロジェクトの意義を伝えることが出来る
 - 3-3-2 スポンサー等への交渉、助成金等の獲得ができる(必要経費を準備できる)
 - 3-3-3 社会資源(ヒト、モノ、情報)をマネジメントできる
 - 3-4-1 必要な資源や新たな実施方法を開発できる
 - 3-4-2 PDCA サイクルを運用できる
 - 3-4-3 プロジェクトやイベントの実効ある広報ができる
- ④ プロジェクトやイベントの成果を示すことについて
 - 4-1-1 障がい者スポーツと対象の特性を知っている
 - 4-1-2 研究方法の種類と方法を知っている
 - 4-1-3 対象者への倫理的配慮の視点を持っている
 - 4-1-4 研究モラルを守ることができる
 - 4-2-1 疑問を研究命題にすることができる
 - 4-2-2 文献検索で必要な情報を集めることができる
 - 4-2-3 バイアスの少ない研究デザインを立案できる

- 4-2-4 必要な検査・測定法を選択できる
- 4-2-5 データに適した統計学的検討方法を選択できる
- 4-3-1 研究計画書に沿って淡々と実行できる
- 4-3-2 検査・測定法を用いてデータを取集できる
- 4-3-3 研究協力の同意がとれる
- 4-4-1 事業の効果に関する報告書が作成できる
- 4-4-2 学会発表ができる
- 4-4-3 第三者に事業の成果を伝えることができる

これらの各能力細目の達成度について次の 5 段階で自己評価してもらうこととし、さらに、これら能力細目に対する自己評価の変化の要因に関しても自己分析してもらい、その結果を自由記入形式で回答を求めた。

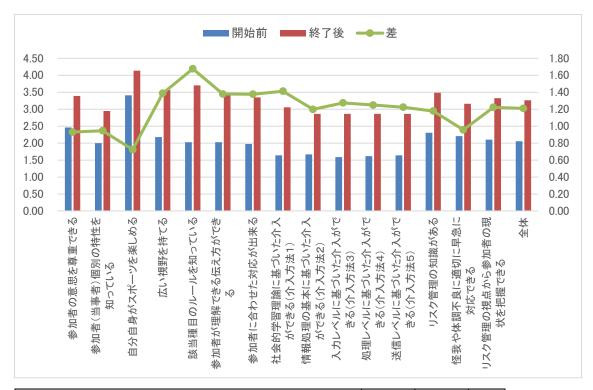
図表 3-15 「自己評価表」の自己評価(5段階評価の基準)

- 1 | 自分一人では全くできない。知らない。
- 2 | 先輩や周りの支援があればできる。
- 3 自分一人でできる。知っている。
- 4 かなりよくできる。よく知っている。
- 5 人に指導できるほどできる。知っている。工夫や改善ができ発展させることができる。

この「自己評価表」の内容・書式の詳細については、本報告書の巻末に資料を参照されたい。

3.3.2. 「スポーツを直接指導すること」への自己評価

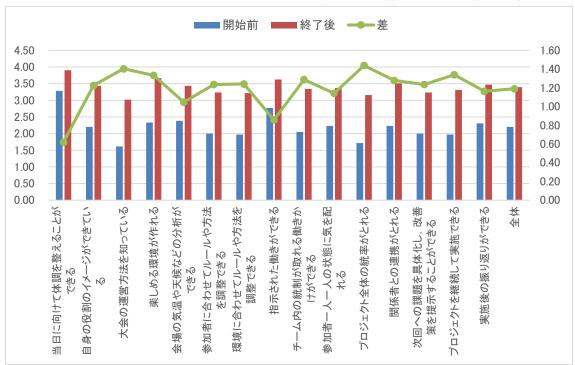
図表 3-16 「スポーツを直接指導すること」への自己評価の変化



小項目		終了後	差
参加者の意思を尊重できる	2.46	3.39	0.93
参加者 (当事者) 個別の特性を知っている	2.00	2.95	0.95
自分自身がスポーツを楽しめる	3.41	4.14	0.72
広い視野を持てる	2.18	3.57	1.39
該当種目のルールを知っている	2.03	3.70	1.68
参加者が理解できる伝え方ができる	2.03	3.41	1.38
参加者に合わせた対応が出来る	1.97	3.35	1.38
社会的学習理論に基づいた介入ができる(介入方法1)	1.64	3.05	1.41
情報処理の基本に基づいた介入ができる(介入方法2)	1.67	2.86	1.20
入力レベルに基づいた介入ができる(介入方法3)	1.59	2.86	1.28
処理レベルに基づいた介入ができる(介入方法4)	1.62	2.86	1.25
送信レベルに基づいた介入ができる(介入方法5)	1.64	2.86	1.22
リスク管理の知識がある	2.31	3.49	1.18
怪我や体調不良に適切に早急に対応できる	2.21	3.16	0.96
リスク管理の視点から参加者の現状を把握できる	2.10	3.32	1.22
全体	2.06	3.27	1.21

3.3.3. 「プロジェクトやイベントを運営すること」への自己評価

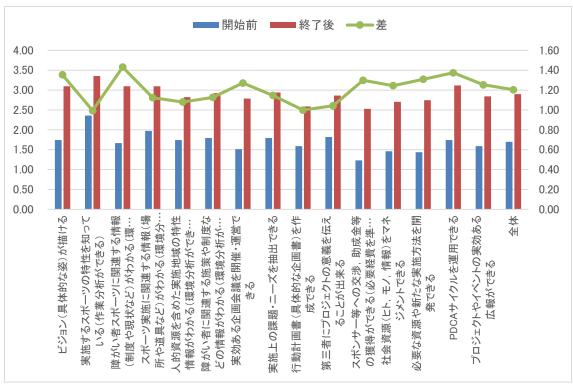
図表 3-17 「プロジェクトやイベントを運営すること」への自己評価の変化



小項目	開始前	終了後	差
当日に向けて体調を整えることができる	3.28	3.90	0.62
自身の役割のイメージができている	2.21	3.43	1.23
大会の運営方法を知っている	1.62	3.02	1.40
楽しめる環境が作れる	2.33	3.67	1.33
会場の気温や天候などの分析ができる	2.38	3.43	1.05
参加者に合わせてルールや方法を調整できる	2.00	3.24	1.24
環境に合わせてルールや方法を調整できる	1.97	3.22	1.24
指示された働きができる	2.77	3.63	0.86
チーム内の統制が取れる働きかけができる	2.05	3.34	1.29
参加者一人一人の状態に気を配れる	2.23	3.37	1.14
プロジェクト全体の統率がとれる	1.72	3.16	1.44
関係者との連携がとれる	2.23	3.51	1.28
次回への課題を具体化し、改善策を提示することができる	2.00	3.24	1.24
プロジェクトを継続して実施できる	1.97	3.31	1.34
実施後の振り返りができる	2.31	3.47	1.16
全体	2.21	3.40	1.19

3.3.4. 「プロジェクトやイベントを企画すること」への自己評価

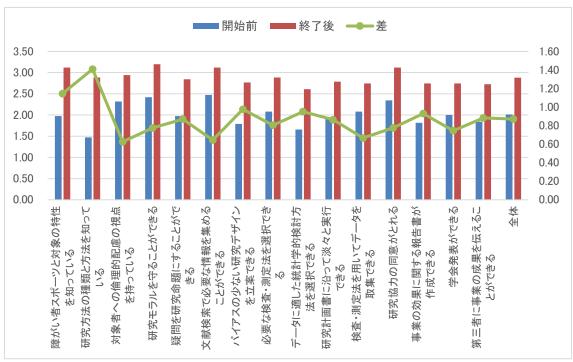
図表 3-18 「プロジェクトやイベントを企画すること」への自己評価の変化



小項目	開始前	終了後	差
ビジョン(具体的な姿)が描ける	1.74	3.10	1.35
実施するスポーツの特性を知っている (作業分析ができる)	2.36	3.35	0.99
障がい者スポーツに関連する情報 (制度や現状など) がわかる(環境分析ができる 1)	1.67	3.10	1.43
スポーツ実施に関連する情報(場所や道具など)がわかる(環境分析ができる2)	1.97	3.10	1.12
人的資源を含めた実施地域の特性情報がわかる(環境分析ができる3)	1.74	2.82	1.08
障がい者に関連する施策や制度などの情報がわかる(環境分析ができる 4)	1.79	2.92	1.13
実効ある企画会議を開催・運営できる	1.51	2.78	1.27
実施上の課題・ニーズを抽出できる	1.79	2.94	1.15
行動計画書(具体的な企画書)を作成できる	1.59	2.59	1.00
第三者にプロジェクトの意義を伝えることが出来る	1.82	2.86	1.04
スポンサー等への交渉, 助成金等の獲得ができる(必要経費を準備できる)	1.23	2.53	1.30
社会資源(ヒト,モノ,情報)をマネジメントできる	1.46	2.71	1.24
必要な資源や新たな実施方法を開発できる	1.44	2.75	1.31
PDCA サイクルを運用できる	1.74	3.12	1.37
プロジェクトやイベントの実効ある広報ができる	1.59	2.84	1.25
全体	1.70	2.90	1.20

3.3.5. 「プロジェクトやイベントの成果を示すこと」への自己評価

図表 3-19 「プロジェクトやイベントの成果を示すこと」への自己評価の変化



小項目	開始前	終了後	差
障がい者スポーツと対象の特性を知っている	1.97	3.12	1.14
研究方法の種類と方法を知っている	1.47	2.88	1.41
対象者への倫理的配慮の視点を持っている	2.32	2.94	0.63
研究モラルを守ることができる	2.42	3.20	0.78
疑問を研究命題にすることができる	1.97	2.84	0.87
文献検索で必要な情報を集めることができる	2.47	3.12	0.64
バイアスの少ない研究デザインを立案できる	1.79	2.76	0.98
必要な検査・測定法を選択できる	2.08	2.88	0.80
データに適した統計学的検討方法を選択できる	1.66	2.61	0.95
研究計画書に沿って淡々と実行できる	1.92	2.78	0.86
検査・測定法を用いてデータを取集できる	2.08	2.75	0.67
研究協力の同意がとれる	2.34	3.12	0.78
事業の効果に関する報告書が作成できる	1.82	2.75	0.93
学会発表ができる	2.00	2.75	0.75
第三者に事業の成果を伝えることができる	1.84	2.73	0.88
全体	2.01	2.88	0.87

3.4. スクーリング実習「実施報告」の検証

3.4.1. 実施結果

実証講座の実施期間、スクーリング実習を計 13 回実施した。当初、計 14 回の実施を計画したが、雨天のため 11 月 18 日の実習(会場:ジュビロ磐田志都呂)の実施が中止となった。

カリキュラム受講者の総数は51名で、スポーツを実施した障がい者・児(スポーツ大会協力者)は321名、ボランティア支援者172名であった(いずれも延べ人数)。

この他スクーリング実習では、スポーツ指導コーチ、ボランティア支援者、実施委員がそれぞれの立場・役割の下でスポーツ大会に参加した。

以下にその実施日時、場所、参加者を一覧で示す。

図表 3-20 スクーリング実習の実施

■関西

月日・時間	会場	参加者		所在地
5月14日(日)	セレッソ大阪	○カリキュラム受講者	5名	大阪府
11:00~15:00	フットサルパーク	○実施委員 3名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	32名	
		○ボランティア支援者	30名	
5月27日(土)	大阪府立砂川高等支援	○カリキュラム受講者	5名	大阪府
9:00~13:00	学校	○実施委員 5名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	30名	
		○ボランティア支援者	10名	
7月2日(日)	南津守さくら公園	○カリキュラム受講者	5名	大阪府
11:00~15:00	グラウンド	○実施委員 4名		
		○スポーツ指導コーチ	3名	
		○スポーツ大会協力者	33名	
		○ボランティア支援者	15名	
8月23日(水)	大阪府立砂川高等支援	○カリキュラム受講者	3名	大阪府
9:00~13:00	学校	○実施委員 3名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	30名	
		○ボランティア支援者	3名	

12月2日 (土)	ノアステージ茨木	○カリキュラム受講者	2名	大阪府
12:00~16:00		○実施委員 2名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	48 名	
		○ボランティア支援者	30名	
12月16日(土)	大阪府立砂川高等支援	○カリキュラム受講者	6名	大阪府
9:00~13:00	学校	○実施委員 4名		
		○スポーツ指導コーチ	4名	
		○スポーツ大会協力者	30名	
		○ボランティア支援者	10名	

■関東

月日	会場	参加者	所在地
12月2日 (土)	ゼルビア	○カリキュラム受講者 4名	東京都
13:00~17:00	フットサルパーク	○実施委員 5名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 15名	
		○ボランティア支援者 20名	

■東海

月日	会場	参加者	所在地
10月7日(土)	ジュビロ磐田	○カリキュラム受講者 3名	静岡県
12:00~16:00	志都呂	○実施委員 2名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 24名	
		○ボランティア支援者 16名	
11月18日(土)	ジュビロ磐田	※雨天により中止	静岡県
12:00~16:00	志都呂		
12月2日 (土)	ジュビロ磐田	○カリキュラム受講者 3名	静岡県
12:00~16:00	志都呂	○実施委員 2名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 23名	
		○ボランティア支援者 21名	

■北陸

月日	会場	参加者	所在地
6月24日(土)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 5名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 4名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 15名	
		○ボランティア支援者 3名	
8月20日(日)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 1名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 2名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 13名	
		○ボランティア支援者 4名	
10月8日(日)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 4名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 3名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 20名	
		○ボランティア支援者 3名	
12月16日(土)	内灘町総合運動	○カリキュラム受講者 5名	石川県
12:00~16:00	公園	○実施委員 2名	
		○スポーツ指導コーチ 4名	
		○スポーツ大会協力者 8名	
		○ボランティア支援者 7名	

3.4.2. 「実施報告」

(1) 内容構成

本項に、各回の統括・運営担当者による「実施報告」を掲載する。

「実施報告」では、当日の実習カリキュラムの実施に係る検証として、「事前打ち合わせ」 「事前準備」「プログラムの実施」「実施後フィードバック」の各項目について、その内容や 結果をまとめている。特に、「実施後フィードバック」では、「企画運営に関して必要だと思 われる点」や「指導技術に関して学んだ点」「あれば嬉しいコンテンツ」といったカリキュ ラム受講者の意見や感想、要望について具体的に報告している。これらは、実習カリキュラ ムの今後の改善や更なる充実化に向けて、有益な情報や示唆を含むものとなっている。

(2) 報告内容の要点

「実施報告」の要点として、その中の項目「実施後フィードバック」における報告内容を 以下に転載する。この報告事項は、実習カリキュラムの今後の改善や質向上を図る上で重要 な示唆を含むものである。

◆企画運営に関して必要と思われた点

- 障害者スポーツについてもっと学んでおくべきだった。知らないことが多すぎた。
- 普段臨床では関わらない障害の方もいたため、参加される方の障害特性についての事 前学習。
- 開催までの準備にも関り、学べたらと思う。コーチとの交渉や場所の確保など
- スポーツ協力者(障害者)の能力やスポーツ経験を詳細な情報が事前に欲しい。
- スポーツ指導コーチとボランティア支援者とのコミュニケーションを事前に多く取り 入れる。
- 参加者の障害特性について、しっかりと学んでおくべきだった。
- リスク管理(特に夏場の脱水や熱中症に関して)、緊急時の対応方法など
- 参加者の障害特性を把握するための情報収集力(参加者の親などからポイントを絞って情報を集める)
- コーチ陣への伝達方法など
- スポーツ指導コーチとボランティア支援者とのコミュニケーションを事前に多く取り入れる。
- プログラム進行について、ボランティア支援者に対して十分に打ち合わせが出来ていなかった。一連の流れや、予測しうる問題や、それに対する変更についても周知しておくべき。
- 予想以上に準備が大変だと思った。
- マンパワーがいる。
- 企画に創造性、発想力がいる。
- プログラムの内容をコーチがボランティアに意図を伝えておくこと
- ボランティアに子どもの援助に困った場合どの指導者(OT・PT)に聞いたらよいか明確にしておくべきであった。
- 複数参加しているため、自ら動けるようになってきた。もう少し事前の準備や企画面、 スポーツ指導コーチやスポーツ大会協力者(障がい児・者)やボランティア支援者への 呼びかけなども行ってみたい。その指導をしていただきたい。
- 事前に企画内容についてコンセンサスを得ること、事前の様々な調整
- 参加される方の障害特性についての事前学習。
- 兄弟児が多く参加していた為、兄弟に対しての参加費の検討をするべきであった。(2人目からは500円ということを実施した)

- 今回、サッカーの試合がプログラムとして含まれていなかったため、子どもたちはサッカーをやりに来ているのでコーチ側に試合は最後に組み込んでもらうように伝えるべきであった。
- スポーツ大会協力者(障がい者)の障害特性についての事前学習と情報提供。
- 財源の確保や人的支援の協力の求め方、呼びかけ。
- 参加する障害者の集め方、案内の仕方。
- スポーツ指導コーチとボランティア支援者とのコミュニケーションを十分にとること が出来なかった。
- プログラム進行について、ボランティア支援者に対して十分に打ち合わせが出来ていなかった。進行についての確認や、プレゼントを渡す際の役割や渡し方等について周知出来ておらず、スムーズとはいえない。一連の流れや、予測しうる問題や、それに対する変更についても周知しておくべき。

◆指導技術に関して学んだ点

- コーチの盛り上げ方、動機づけの仕方、その気にさせる介入はリハビリにも生かせる。
- 自分たちが思っていた以上に障害が重くてもできることが多いことに感動した。
- 障害者の可能性を再確認した。→リスク管理について考えさせられた。
- 障害者がこんなに生き生きしてスポーツをする姿を初めて見た。
- 治療者患者関係でなく、共に楽しむことの大切さを学んだ。
- 合理的配慮について体験できた。
- コーチ・協力者・支援者・家族が一緒になって楽しむことの大切さを学んだ。
- コーチ陣のプログラムや実際の運営はもちろん、支援者にも様々な職種が混在しており、お互いの参加者への関わり方を見て学ぶことが出来た。
- 参加者の「したい!」という気持ちの強さ。こういった場の必要性を参加者の表情から 感じた。
- 障害者スポーツを通して、病院や施設でのリハビリに活かせる事もあるし、その逆もまた PT、OT の臨床経験を活かして、地域での障害者スポーツ活動へ貢献できることがわかった。
- 障害のある人、スタッフ、家族、みんなが生き生きしていた。
- とにかく刺激を受けた。元気になった。
- 関わったことがない疾患や障害でもスポーツを一緒にすると、スムーズに介入で来た。
- チームになって競争などをすることによって参加者同士が協力する楽しさを学ぶこと が出来た。
- ボランティアスタッフが一対一でつけるメリットとして参加者のペースでプログラム を進めることができサッカーをすることに対して嫌という参加者がいなかった。
- 自分なりに考えて行動できるようになった。

- スポーツ指導コーチへの指示もできるようになった。以前は言われるままに動いていた。
- コーチのボールやビブスなどをサッカーとは違う用途で用いる使用方法
- 障害者に対しての場の盛り上げ方、動機づけの仕方、その気にさせる介入など
- 重い障害のある人が普段の生活においては反応を示さないような指示内容でも、サッカーで、同じような指示があった場合には、嬉しそうに反応していたこと。
- リスク管理について考えさせられた。
- 体作りをメインとしてマットを使ったバランスのトレーニングや走力をつける走るトレーニングがメインであった為、単調になるトレーニングを楽しく競争形式にする指導技術を学んだ。
- ボランティアのスタッフが多かったことで、1対1でつくことが出来、集団に参加できない子に対しても集団で活動する以外にも、ボールを触る機会やコートに入る機会を作ることが出来た。
- コーチのコーチング技術や盛り上げ方。トレーニングメニュー わかりやすく楽しくプレーする工夫
- 地域での普及の仕方
- 練習やトレーニングメニューの引き出しが植えた。
- 声かけや盛り上げ方、動機づけの工夫。
- 着替えや忘れ物、持ち物の管理などへの配慮の重要性。(生活面で考慮すること)

◆あれば嬉しいコンテンツ

- リスク管理、応急処置について
- どうやれば自分でも障害者スポーツの企画・運営ができるのか?
- 障害者スポーツに関するタイムリーな情報 どこでどのようなことが行われているのか?他に OT でかかわっている人はいるのか?
- e ラーニングよりも実習中心の方が学習が早いと思う。
- 是非、これから見ていきたい。
- 実際の様々なケースについて、ケースレポート等があると良いのでは?(このような問題が発生した時は、どのような対応が望ましいか。/よくある成功例・失敗例・発展等。/予測しうる危険性等)
- 障害者スポーツに関わることで得られた変化などをまとめた事例報告。
- 各自の地域での障害者スポーツ運営の情報など
- 馴染みのない内容で難しいのでは?
- 実習に参加して初めてコンテンツの内容が理解できた。実習が先の方が良いのでは?
- 実習のことについて説明するものがあってもよいのでは、可能であれば動画で紹介な

ど、イメージがつきやすく、実習への参加の動機づけになる。

- スポーツに関わる OT、PT のスポーツボランティア・ネットワーク。 障害者スポーツのスタッフ募集の情報を提供するとメールで情報が一斉に送られる登録システム
- 企業等からの障害者スポーツの助成金や寄付金に関わる情報システム 賛同していただいたイベントに寄付ができるポスティング制度のようなもの
- プロの選手や元プロの選手等が障害者スポーツの指導に関わる希望がある場合に、登録や書き込みができる人材バンクのようなもの
- 助成金の獲得方法
- 障害者スポーツ大会への参加の仕方
- 情報収集の方法
- ネットワークの形成の仕方
- パラリンピックに関するコンテンツ
- 動画を使用した解説を多くしてほしい
- 作業療法士がスポーツへ関わる可能性、役割(職種の専門性別で)

平成 29 年度文部科学省「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」事業

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年5月14日 11:00~15:00

≪会 場≫: セレッソ大阪フットサルパーク (大阪市北区大淀中5-12-39)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 5名(全員初参加)

実施委員 島、小林、足立スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 32名

ボランティア支援者 30名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

 1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて 未登録のため、まだ視聴できていない。

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加出迎え

参加者への指導

参加者の補助

全体進行の把握

リスク管理緊急時の対応(けが等への対応)

◆事前準備

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関するミニ講座

- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. ボランティア支援者についての説明
- 5. スポーツ指導コーチとの打ち合わせ

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - 障害者スポーツについてもっと学んでおくべきだった。知らないことが多すぎた。
 - 普段臨床では関わらない障害の方もいたため、参加される方の障害特性についての 事前学習。

2. 指導技術に関して学んだ点

- コーチの盛り上げ方、動機づけの仕方、その気にさせる介入はリハビリにも生かせる。
- 自分たちが思っていた以上に障害が重くてもできることが多いことに感動した。
- 障害者の可能性を再確認した。→リスク管理について考えさせられた。

3. あれば嬉しいコンテンツ

- リスク管理、応急処置について
- どうやれば自分でも障害者スポーツの企画・運営ができるのか?
- 障害者スポーツに関するタイムリーな情報 どこでどのようなことが行われているのか?他に OT でかかわっている人はいるのか?

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年5月27日 9:00~13:00

≪会 場≫: 大阪府立すながわ高等支援学校(大阪府泉南市信達牧野 40-1)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 5名(全員初参加)

実施委員 島、大友、北田、足立、吉本

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 30名

ボランティア支援者 10名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

 1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて 未登録のため、まだ視聴できていない。

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加者への指導

参加者の補助

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関するミニ講座
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - 開催までの準備にも関り、学べたらと思う。コーチとの交渉や場所の確保など
 - スポーツ協力者 (障害者) の能力やスポーツ経験を詳細な情報が事前に欲しい。

2. 指導技術に関して学んだ点

- 障害者がこんなに生き生きしてスポーツをする姿を初めて見た。
- 治療者患者関係でなく、共に楽しむことの大切さを学んだ。
- 合理的配慮について体験できた。

3. あれば嬉しいコンテンツ

- e-ラーニングよりも実習中心の方が学習が早いと思う。
- 是非、これから見ていきたい。

以 上

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年6月24日 12:00~16:00

《会 場》: 内灘町サッカー競技場(石川県河北郡内灘町宮坂、内灘町総合公園内)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 5名(初参加2名、2回目2名、3回以上1名)

実施委員 濱西、辻、井口、西川

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 15名

ボランティア支援者 3名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

 視聴した e-ラーニング コンテンツについて 初参加者は未登録のため、まだ視聴できていない。

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加者出迎え

参加者への指導

参加者の補助

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関するミニ講座
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - スポーツ指導コーチとボランティア支援者とのコミュニケーションを事前に多く取り入れる。
 - 参加者の障害特性について、しっかりと学んでおくべきだった。

2. 指導技術に関して学んだ点

- コーチ・協力者・支援者・家族が一緒になって楽しむことの大切さを学んだ。
- コーチ陣のプログラムや実際の運営はもちろん、支援者にも様々な職種が混在して おり、お互いの参加者への関わり方を見て学ぶことが出来た。

3. あれば嬉しいコンテンツ

● 実際の様々なケースについて、ケースレポート等があると良いのでは? (このような問題が発生した時は、どのような対応が望ましいか。/よくある成功例・失敗例・発展等。/予測しうる危険性等)

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

《日 時》: 平成29年7月2日 11:00~15:00

≪会 場≫: 南津守さくら公園グランド(大阪市西成区南津守1丁目2番36号)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 5名(全員初参加)

実施委員 島、小林、北田、足立

スポーツ指導コーチ 3名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 33名

ボランティア支援者 15名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

視聴した e-ラーニング コンテンツについて
 ほとんどの者が登録はしたが、ほとんどまだ視聴していなかった。

2. 受講目的

- ・障害者スポーツの実際を経験してみること
- ・障害者を多面的に理解すること
- ・参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること
- ・障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

- 事前準備
- ・参加出迎え
- ・参加者への指導
- 参加者の補助
- ・リスク管理緊急時の対応(けが等への対応)

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関するミニ講座
- 3. スポーツ指導コーチとの打ち合わせ

4. 開始前の質疑

◆プログラムの実施

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - ・リスク管理 (特に夏場の脱水や熱中症に関して) 緊急時の対応方法など
 - ・参加者の障害特性を把握するための情報収集力 (参加者の親などからポイントを絞って情報を集める)
 - ・コーチ陣への伝達方法など

2. 指導技術に関して学んだ点

- ・参加者の「したい!」という気持ちの強さ。こういった場の必要性を 参加者の表情から感じた。
- ・障害者スポーツを通して、病院や施設でのリハビリに活かせる事もあるし、 その逆もまた PT、OT の臨床経験を活かして、地域での障害者スポーツ活動へ 貢献できることがわかった。

3. あれば嬉しいコンテンツ

- ・障害者スポーツに関わることで得られた変化などをまとめた事例報告。
- ・各自の地域での障害者スポーツ運営の情報など

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年8月20日 12:00~16:00

≪会 場≫: 内灘町サッカー競技場(石川県河北郡内灘町宮坂、内灘町総合公園内)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 1名(3回以上)

実施委員 濱西、辻

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 13名

ボランティア支援者 4名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて 昨年度にほぼ視聴している。今年度ものはまだ視聴していない

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加者出迎え

参加者への指導

参加者の補助

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関する情報交換
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - スポーツ指導コーチとボランティア支援者とのコミュニケーションを事前に多く取り入れる。
 - プログラム進行について、ボランティア支援者に対して十分に打ち合わせが出来ていなかった。一連の流れや、予測しうる問題や、それに対する変更についても周知しておくべき。

2. 指導技術に関して学んだ点

- コーチ・協力者・支援者・家族が一緒になって楽しむことの大切さを学んだ。
- コーチ陣のプログラムや実際の運営はもちろん、支援者にも様々な職種が混在して おり、お互いの参加者への関わり方を見て学ぶことが出来た。

3. あれば嬉しいコンテンツ

● 実際の様々なケースについて、ケースレポート等があると良いのでは?(このような問題が発生した時は、どのような対応が望ましいか。/よくある成功例・失敗例・発展等。/予測しうる危険性等)

以 上

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年8月23日 9:00~13:00

≪会 場≫: 大阪府立すながわ高等支援学校(大阪府泉南市信達牧野 40-1)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 3名(全員初参加)

実施委員 島、足立 吉本スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 30名

ボランティア支援者 3名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて 障害者スポーツの概要、障害者スポーツ指導と運営について、各々部分的に視聴したとの こと。

2. 受講目的

理学療法士・作業療法士が障害者スポーツへどう関わるのか? 障害者スポーツの実際を見学、できれば一部経験してみたい。 理学療法士・作業療法士として何ができるのか?知りたい。

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加者への指導

参加者の補助

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関するミニ講座
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ

ボランティア支援者のリーダー的存在として最初のうちは参加。後半から徐々にボランティア支援者へ支持を与え、全体を見てもらった。

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - 予想以上に準備が大変だと思った。
 - マンパワーがいる。
 - 企画に創造性、発想力がいる。

2. 指導技術に関して学んだ点

- 障害のある人、スタッフ、家族、みんなが生き生きしていた。
- とにかく刺激を受けた。元気になった。
- 関わったことがない疾患や障害でもスポーツを一緒にすると、スムーズに介入で来 た。

3. あれば嬉しいコンテンツ

- 馴染みのない内容で難しいのでは?
- 実習に参加して初めてコンテンツの内容が理解できた。実習が先の方が良いのでは?
- 実習のことについて説明するものがあってもよいのでは、可能であれば動画で紹介 など、イメージがつきやすく、実習への参加の動機づけになる。

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年10月7日 12:00~16:00

≪会 場≫: ジュビロ磐田サッカーコート志都呂会場(浜松市西区篠原町 2645 付近)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 3名(初参加)

実施委員 鈴木達也 大野実沙紀

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 24名

ボランティア支援者 16名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

 1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて あまり視聴していないとのこと。

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加者出迎え

参加者への指導

参加者の補助

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関する情報交換
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ
- 5. ボランティアへ発達障害についての講義

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - プログラムの内容をコーチがボランティアに意図を伝えておくこと
 - ボランティアに子どもの援助に困った場合どの指導者(OT・PT)に聞いたらよいか明確にしておくべきであった。

2. 指導技術に関して学んだ点

- チームになって競争などをすることによって参加者同士が協力する楽しさを学ぶこと が出来た。
- ボランティアスタッフが一対一でつけるメリットとして参加者のペースでプログラム を進めることができサッカーをすることに対して嫌という参加者がいなかった。

3. 次回の計画

- 次回は参加者とボランティアが協力してやるようなプログラムにしていくという話が コーチの方から挙がった(例:おなかや背中でボールをゴールへ運ぶなど)
- ◆ 未就学児は人数が多くなってくる為、怪我なく楽しく行えるプログラム。

平成 29 年度文部科学省「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」事業 障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年10月8日 12:00~16:00

≪会 場≫: 内灘町サッカー競技場(石川県河北郡内灘町宮坂、内灘町総合公園内)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 4名(3回目1名、3回以上3名)

実施委員 濱西、辻、足立

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 20名

ボランティア支援者 3名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて
 全コンテンツを視聴した者とほとんど視聴していない者とがいた。

2. 受講目的

とにかくスキルアップしたい。地元での開催へ参加し続けたい。 興味があるので障害者スポーツの実際を体験したい。

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加者出迎え

参加者への指導

参加者の補助

全体進行の把握

終了後の後片付け

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関する情報交換
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ

- ボランティア支援者への指示を中心行った。
- コーチとボランティアスタッフの橋渡し、調整なども行った。
- スポーツ指導コーチへの支持

◆実施後フィードバック

1. 企画運営に関して必要だと思われた点

複数参加しているため、自ら動けるようになってきた。もう少し事前の準備や企画面、スポーツ指導コーチやスポーツ大会協力者(障がい児・者)やボランティア支援者への呼びかけなども行ってみたい。その指導をしていただきたい。

2. 指導技術に関して学んだ点

- 自分なりに考えて行動できるようになった。
- スポーツ指導コーチへの指示もできるようになった。以前は言われるままに動いて いた。

3. あれば嬉しいコンテンツ

● 実際の様々なケースについて、ケースレポート等があると良いのでは? (このような問題が発生した時は、どのような対応が望ましいか。/よくある成功例・失敗例・発展等。/予測しうる危険性等)前回同様

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年12月2日 12:00~16:00

≪会 場≫: ノアステージ茨木(大阪府茨木市三島丘1丁目6-1)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 2名(1名初参加)

実施委員 大友、小林

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 48名

ボランティア支援者 30名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

- 1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて 未登録のため、まだ視聴できていない。
- 2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加出迎え

参加者への指導

参加者の補助

全体進行の把握

リスク管理緊急時の対応 (けが等への対応)

◆事前準備

1. 会場確認

- 2. リスク管理に関するミニ講座
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. ボランティア支援者についての説明
- 5. スポーツ指導コーチとの打ち合わせ

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - 事前に企画内容についてコンセンサスを得ること、事前の様々な調整
 - 参加される方の障害特性についての事前学習。

2. 指導技術に関して学んだ点

- コーチのボールやビブスなどをサッカーとは違う用途で用いる使用方法
- 障害者に対しての場の盛り上げ方、動機づけの仕方、その気にさせる介入など
- 重い障害のある人が普段の生活においては反応を示さないような指示内容でも、サッカーで、同じような指示があった場合には、嬉しそうに反応していたこと。
- リスク管理について考えさせられた。

3. あれば嬉しいコンテンツ

- スポーツに関わる OT、PT のスポーツボランティア・ネットワーク。 障害者スポーツのスタッフ募集の情報提供するとメールで情報が一斉に送られる登録 システム
- 企業等からの障害者スポーツの助成金や寄付金に関わる情報システム 賛同していただいたイベントに寄付ができるポスティング制度のようなもの
- プロの選手や元プロの選手等が障害者スポーツの指導に関わる希望がある場合に、 登録や書き込みができる人材バンクのようなもの

平成 29 年度文部科学省「成長分野等における中核的専門人材育成等の戦略的推進」事業 障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年12月2日 12:00~16:00

≪会 場≫: ジュビロ磐田サッカーコート志都呂会場(浜松市西区篠原町 2645 付近)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 3名

実施委員 鈴木達也 大野実沙紀

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 23名

ボランティア支援者 21名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認 事前準備 参加者出迎え 参加者への指導

参加者の補助

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関する情報交換
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ
- 5. ボランティアへ発達障害についての講義

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - 兄弟児が多く参加していた為、兄弟に対しての参加費の検討をするべきであった。 (2 人目からは 500 円ということを実施した)
 - 今回、サッカーの試合がプログラムとして含まれていなかったため、子どもたちは サッカーをやりに来ているのでコーチ側に試合は最後に組み込んでもらうように伝 えるべきであった。

2. 指導技術に関して学んだ点

- 体作りをメインとしてマットを使ったバランスのトレーニングや走力をつける走る トレーニングがメインであった為、単調になるトレーニングを楽しく競争形式にす る指導技術を学んだ。
- ボランティアのスタッフが多かったことで 1 対 1 でつくことが出来、集団に参加できない子に対しても集団で活動する以外にも、ボールを触る機会やコートに入る機会を作ることが出来た。

3. 次回の計画

- 今回は試合をすることが出来なかったので試合をすることをメインとしたプログラムを小学生以上はやっていきたい。
- 次回は援助金が少なくなるのでジュビロ磐田とコーチ料の相談をしなければいけい ない
- 参加料の設定をコーチ料・場所代・保険料などを換算して決めなければいけない

平成 29 年度文部科学省「成長分野等における中核的専門人材育成等の戦略的推進」事業 障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年12月2日 13:00~17:00

≪会 場≫: ゼルビアフットサルパーク (東京都町田市小野路町 1701)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 4名

実施委員 足立 島 内田 林 木村

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい者) 15名

ボランティア支援者 20名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて
 半分くらい視聴した者が多く、障害者スポーツの指導と運営関連の視聴が多かった。

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること。

3. 本日の参加役割の確認 慣れていない受講生も多く、参加者の補助や準備片付けが中心となった。

◆事前準備

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関する情報交換
- 3. スポーツ大会協力者(障がい者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ

◆プログラムの実施

必要に応じて指示が必要であった。

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - スポーツ大会協力者 (障がい者) の障害特性についての事前学習と情報提供。
- 2. 指導技術に関して学んだ点
 - コーチのコーチング技術や盛り上げ方。トレーニングメニュー わかりやすく楽しくプレーする工夫
 - 地域での普及の仕方
- 3. あれば嬉しいコンテンツ
 - 助成金の獲得方法
 - 障害者スポーツ大会への参加の仕方
 - 情報収集の方法
 - ネットワークの形成の仕方

障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年12月16日 9:00~13:00

≪会 場≫: 大阪府立すながわ高等支援学校(大阪府泉南市信達牧野 40-1)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 6名

実施委員 島、大友、足立、吉本

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 30名

ボランティア支援者 10名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて ほとんどの者が全て視聴していた。

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加出迎え

参加者への指導

参加者の補助

全体進行の把握

リスク管理緊急時の対応(けが等への対応)

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関するミニ講座

- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有
- 4. スポーツ指導コーチ及びボランティア支援者との打ち合わせ

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - 財源の確保や人的支援の協力の求め方、呼びかけ。
 - 参加する障害者の集め方、案内の仕方。

2. 指導技術に関して学んだ点

- 練習やトレーニングメニューの引き出しが植えた。
- 声かけや盛り上げ方、動機づけの工夫。
- 着替えや忘れ物、持ち物の管理などへの配慮の重要性。(生活面で考慮すること)

3. あれば嬉しいコンテンツ

- パラリンピックに関するコンテンツ
- 動画を使用した解説を多くしてほしい
- 作業療法士がスポーツへ関わる可能性、役割(職種の専門性別で)

平成 29 年度文部科学省「成長分野等における中核的専門人材育成等の戦略的推進」事業 障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発

実 施 報 告

≪日 時≫: 平成29年12月16日 12:00~16:00

《会 場》: 内灘町サッカー競技場(石川県河北郡内灘町宮坂、内灘町総合公園内)

≪参加者≫: カリキュラム受講者 5名(3回以上1名)

実施委員 濱西、辻

スポーツ指導コーチ 4名

スポーツ大会協力者(障がい児・者) 8名

ボランティア支援者 7名

≪内 容≫ ~実習カリキュラムの実証~

◆事前打ち合わせ

1. 視聴した e-ラーニング コンテンツについて

2. 受講目的

障害者スポーツの実際を経験してみること 障害者を多面的に理解すること 参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること 障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること

3. 本日の参加役割の確認

事前準備

参加者出迎え

参加者への指導

参加者の補助

参加者のお見送り

- 1. 会場確認
- 2. リスク管理に関する情報交換
- 3. スポーツ大会協力者(障がい児・者)の情報共有

※ 必要に応じて自分で動くのではなく、ボランティア支援者への指示

◆実施後フィードバック

- 1. 企画運営に関して必要だと思われた点
 - スポーツ指導コーチとボランティア支援者とのコミュニケーションを十分にとることが出来なかった。
 - プログラム進行について、ボランティア支援者に対して十分に打ち合わせが出来ていなかった。進行についての確認や、プレゼントを渡す際の役割や渡し方等について周知出来ておらず、スムーズとはいえない。一連の流れや、予測しうる問題や、それに対する変更についても周知しておくべき。

2. 指導技術に関して学んだ点

- コーチ・協力者・支援者・家族が一緒になって楽しむことの大切さを学んだ。
- コーチ陣のプログラムや実際の運営はもちろん、支援者にも様々な職種が混在して おり、お互いの参加者への関わり方を見て学ぶことが出来た。

3. あれば嬉しいコンテンツ

● 実際の様々なケースについて、ケースレポート等があると良いのでは? (このような問題が発生した時は、どのような対応が望ましいか。/よくある成功例・失敗例・発展等。/予測しうる危険性等)

図表 3-21 実施の様子





(上:砂川高等支援学校 下;南津守さくら公園グラウンド)

図表 3-22 実施の様子



(上:ジュビロ磐田志都呂 下:内灘町総合運動公園)





(上下:ゼルビアフットサル)

3.5. e ラーニング学習ログ分析

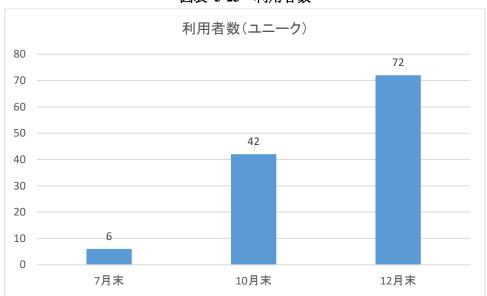
本節では、e ラーニングサーバに蓄積・管理された受講者の学習ログデータ(利用記録)の集計を行い、実証講座実施期間における受講者の学習状況について報告する。

3.5.1. アクセス状況

(1) 利用者数

次に掲載するグラフは、e ラーニングの利用者数の推移である。ここでいう利用者数とは、 実証講座の実施期間内に 1 回以上、e ラーニング教材にアクセスしたことのあるユーザー のユニークな数(延べ人数ではない)である。

実証講座開始後1カ月を経過した7月末は6人と非常に少ないが、4カ月後の10月末では42名にまで増えている。実証講座実施期間の最後となる12月末は72名となった。



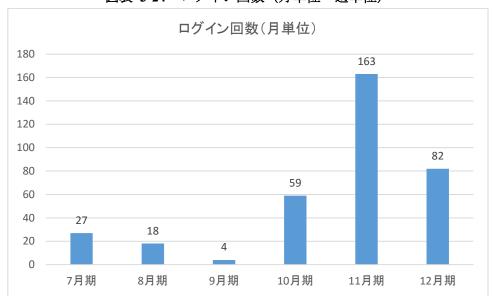
図表 3-23 利用者数

(2) ログイン回数

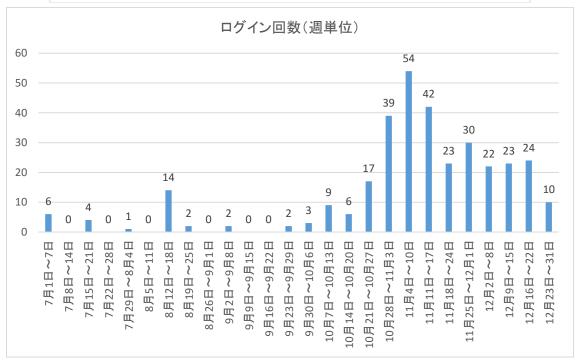
次ページに示すグラフは、実証講座実施期間におけるログイン回数の推移である。最初のグラフは月単位、次は週単位で集計した結果である。

月単位でみると、7月から9月までの当初の3カ月はアクセス回数が少ないが、10月に入って59件と増え、11月には163件(1日平均5.3回)と大幅に増加している。

週単位では10月末から11月中旬にアクセスが急増していることがわかる。



図表 3-24 ログイン回数 (月単位・週単位)

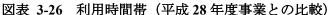


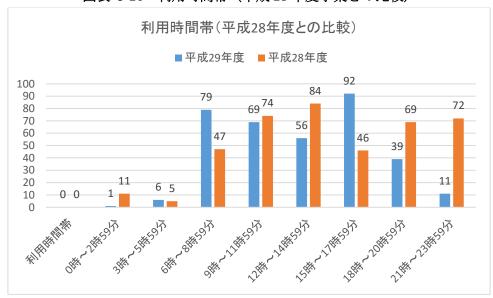
(3) ログインの時間帯

ログインした時間帯を 3 時間ごとに区切って集計した結果が次のグラフである。これによれば、最もログインの回数が多かったのは午後の「15 時~17 時 59 分」で、これに次ぐのが朝の「6 時~8 時 59 分」であった。勤務時間に重なる時間帯だが、通勤時や退社後の移動中などでの利用も多かったのかもしれない。参考データとして平成 28 年度の実証講座との比較グラフも以下に掲載する。

利用時間帯

図表 3-25 利用時間帯

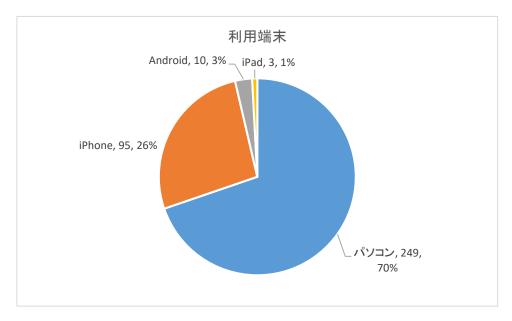




平成 28 年度では「12 時~14 時 59 分」が最も多く、「9 時~11 時 59 分」と「18 時~20 時 59 分」「21 時~23 時 59 分」が僅差となっている。これに対して 29 年度は、全体として昼間の時間帯での利用が多い。

(4) 利用端末

次のグラフは受講者が e ラーニング教材にアクセスする際に利用した端末 (デバイス) の 集計結果である。



図表 3-27 利用端末

最も多いのは「パソコン」で全体の 70%を占めている。これに次ぐのがスマートフォンの「iPhone」の 26%である。これに対して、「Android」「iPad」の使用は非常に少ない。

平成 28 年度事業でも同様の集計を行っているが、その結果は今回と同様であった。最も多かったのは「パソコン」の 45%で、以下、「iPhone」が 28%、「Android」が 18%、「iPad」が 9%であった。

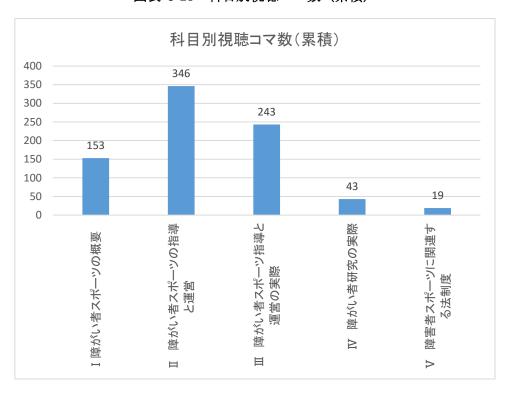
e ラーニング教材はモバイルラーニングを想定し、モバイル端末の小さい画面でも講義が視聴できる画面仕様となっているが、パソコンからのアクセスが多いのは、より大きなサイズの画面で視聴したい、あるいは机と椅子の落ち着いた環境で視聴したいという受講者の意向の表れという見方もできる。また、同一の受講者がスマートフォンとパソコンの両方からアクセスしているケースもあるので、時間や場所に応じて端末を使い分けているようだ。いずれにしても、多様な端末から利用されているという結果は、このeラーニング教材の利便性、受講者の都合に応じた利用の柔軟性を間接的に示している。

3.5.2. 講義動画の視聴状況

3.5.2.1. 科目単位の視聴状況

(1) 科目単位の視聴コマ数(累積)

次のグラフは、実証講座実施期間に視聴されたコマ数を科目別で集計した結果である。最も視聴コマ数が多いのは「Ⅱ 障がい者スポーツの指導と運営」で、これに次ぐのが「Ⅲ 障がい者スポーツの指導と運営の実際」であった。他の3つの科目を大きく引き離す結果となっているが、この2科目の内容はスクーリング実習のカリキュラムと直接的な関連性が高いことから、多くの受講者の興味・関心を集めたものと考えられる。

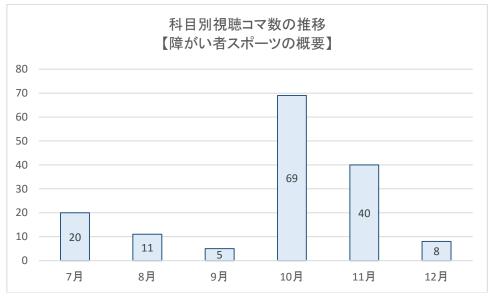


図表 3-28 科目別視聴コマ数 (累積)

次に、各科目の月単位での視聴コマ数の推移をみていくこととする。

(2) 科目「障がい者スポーツの概要」(推移)

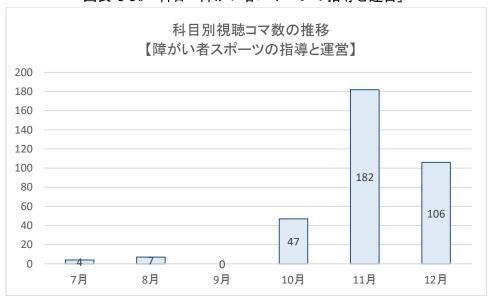
次に掲載するグラフは、科目「障がい者スポーツの概要」の視聴コマ数の月単位の推移を 集計した結果である。10月の視聴コマ数が他の月に比べて多い。



図表 3-29 科目「障がい者スポーツの概要」

(3) 科目「障がい者スポーツの指導と運営」(推移)

次に掲載するグラフは、科目「障がい者スポーツの指導と運営」の視聴コマ数の月単位の 推移を集計した結果である。11月が最も多く、12月がこれに次ぐ結果となっている。 e ラ ーニング教材の導入にあたる「障がい者スポーツの概要」を10月に視聴し、11・12月に当 該科目を学んだ受講者が多いという見方もできる。

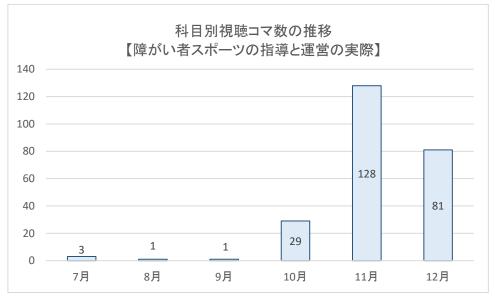


図表 3-30 科目「障がい者スポーツの指導と運営」

(4) 科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」(推移)

次に掲載するグラフは、科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」の視聴コマ数の月

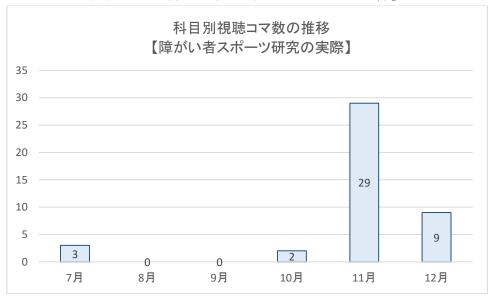
単位の推移を集計した結果である。これも先にみた科目「障がい者スポーツの指導と運営」 とほぼ同じような傾向となっている。



図表 3-31 科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」

(5) 科目「障がい者スポーツ研究の実際」(推移)

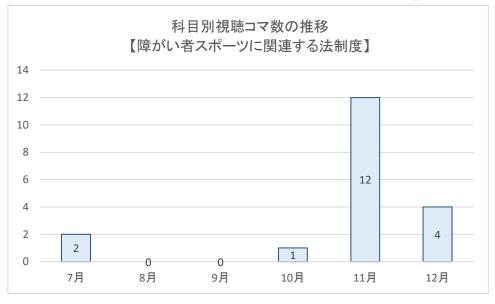
次に掲載するグラフは、科目「障がい者スポーツ研究の実際」の視聴コマ数の月単位の推 移を集計した結果である。11月の視聴コマ数が他の月に比べて抜きん出て多い。



図表 3-32 科目「障がい者スポーツ研究の実際」

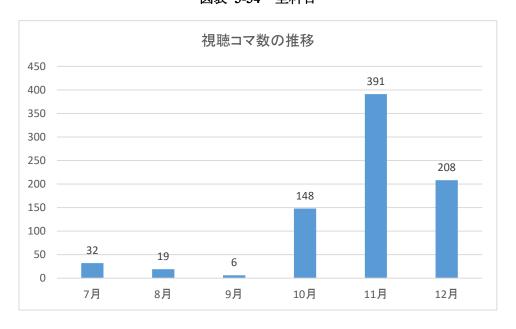
(6) 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」(推移)

次に掲載するグラフは、科目「障がい者スポーツに関連する法制度」の視聴コマ数の月単位の推移を集計した結果である。11 月が多いのは他の科目と同じだが、全体的に視聴コマ数が少ない。



図表 3-33 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」

最後に全科目の視聴コマ数の推移を掲載する。

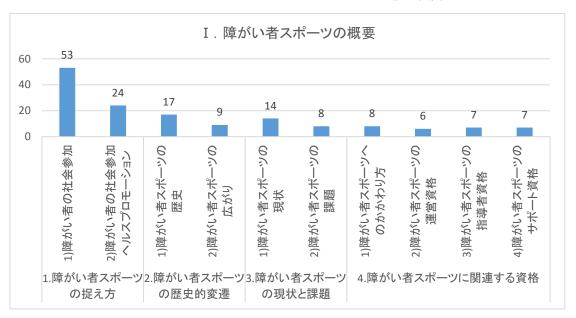


図表 3-34 全科目

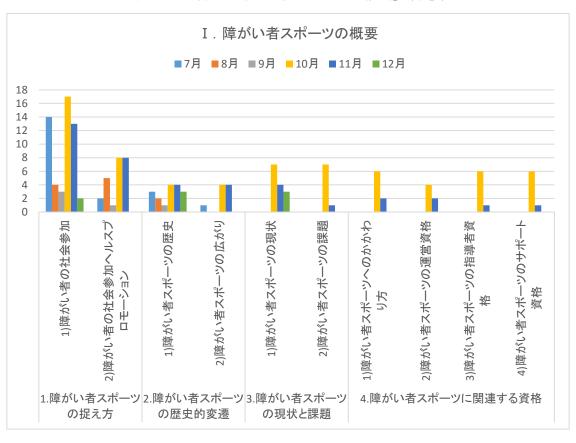
3.5.2.2. 科目別コマ単位の視聴状況

(1) 科目「障がい者スポーツの概要」

図表 3-35 科目「障がい者スポーツの概要」(累積)

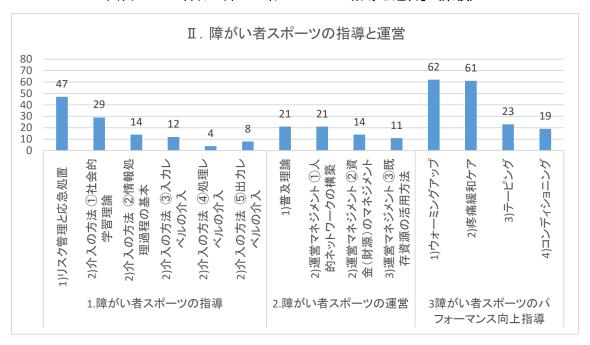


図表 3-36 科目「障がい者スポーツの概要」(推移)

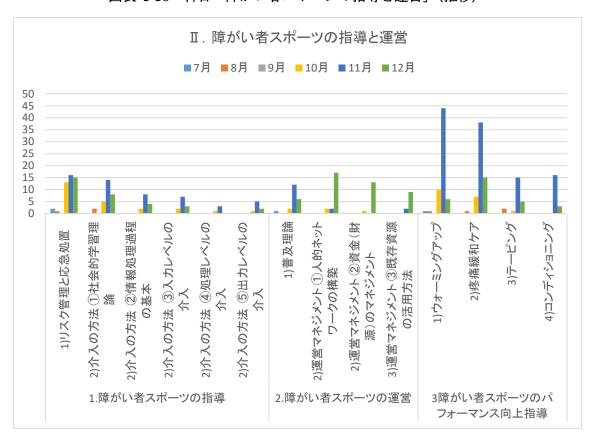


(2) 科目「障がい者スポーツの指導と運営」

図表 3-37 科目「障がい者スポーツの指導と運営」(累積)

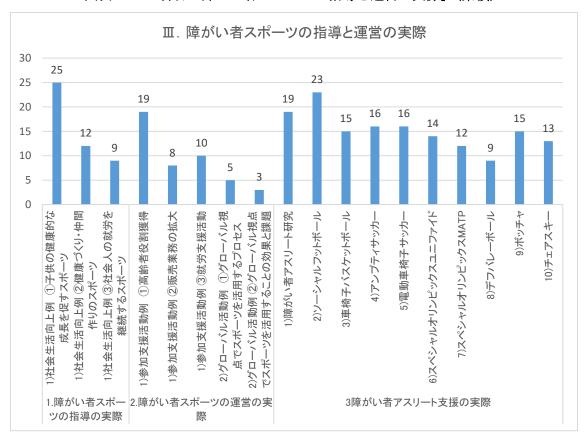


図表 3-38 科目「障がい者スポーツの指導と運営」(推移)

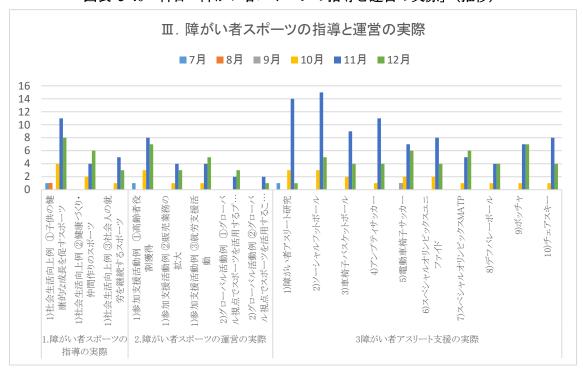


(3) 科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」

図表 3-39 科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」(累積)

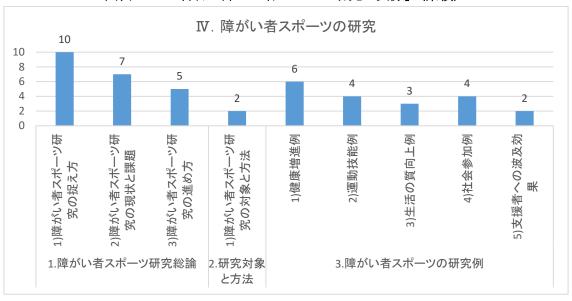


図表 3-40 科目「障がい者スポーツの指導と運営の実際」(推移)

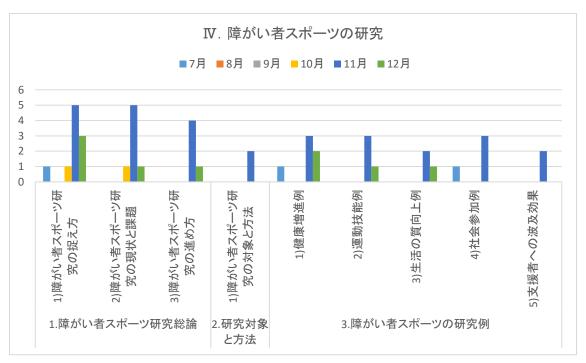


(4) 科目「障がい者スポーツ研究の実際」

図表 3-41 科目「障がい者スポーツ研究の実際」(累積)

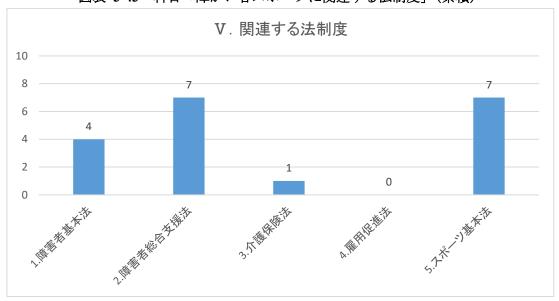


図表 3-42 科目「障がい者スポーツ研究の実際」(推移)

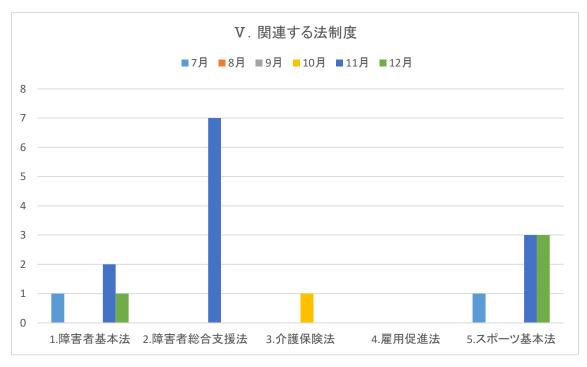


(5) 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」

図表 3-43 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」(累積)



図表 3-44 科目「障がい者スポーツに関連する法制度」(推移)



3.6. コラボレーション支援環境の利用状況

実証講座の受講者やスクーリング実習の指導者・運営担当者らによる情報交換・共有、交流の場として専用のSNSサイトによるコラボレーション支援環境を整備した。その詳細については、本報告書「e ラーニング教材制作報告編」の第4章「コラボレーション支援環境」にまとめているので、ここでは実証講座の実施時におけるその利用状況について報告することとしたい。

3.6.1. 運用方法

受講者や指導者、運営担当者らの交流や情報共有を支援する目的で、以下の3つのコミュニティを開設した。

○コミュニティ「E ラーニング意見交換」

e ラーニング教材「障がい者スポーツ支援 e ラーニング」の学習内容等に関する質問や意見・感想などを自由に書き込むなど情報交換や共有を行うことを目的としたコミュニティ。 ○コミュニティ「スポーツイベント」

平成 29 年度に開催する「スポーツ大会」の告知や実施の様子・結果等の情報共有とスポーツイベントに関する感想や質問などの意見交換を行うコミュニティ。

○コミュニティ「アーカイブ」

e ラーニング教材「障がい者スポーツ支援 e ラーニング」で使用している講義資料(パワーポイントのスライド)のPDF版を閲覧・ダウンロードできるコミュニティ。

3.6.2. 利用状況

コラボレーション支援環境の利用状況を定量的に示す指標として、ここでは登録者数、コミュニティでの書き込み件数・内容に注目してみた。

まず、登録者数は設けられた3つのコミュニティ「スポーツイベント」「アーカイブ」「e ラーニング意見交換」全体で49名(延べ人数)であった。e ラーニングの利用者数よりも少なく、e ラーニング利用者の一部はコラボレーション支援環境に登録しなかった。

次に、コラボレーション支援環境上での情報交流の頻度を示すコミュニティでの書き込み件数が最も多かったのは「スポーツイベント」コミュニティで、その内容はスクーリング 実習以外の各地で開催される障がい者スポーツのイベントに関する告知・案内であった。

4. まとめ

4.1. 成果

本編では、第2章で実証講座の実施内容について報告した後、第3章の「実施結果」では、「受講者アンケート」及び「自己評価表」の集計結果、スクーリング実習の「実施報告」、「eラーニング学習ログ分析」について報告した。

■受講者の高い受講後の満足度

「受講者アンケート」の設問「本日の実習で、あなたの受講目的は充足できましたか」の結果をみると、「十分できた」が43%、「できた」が49%となっているのに対して、「あまり出来なかった」は8%に留まり、「ほとんど出来なかった」は皆無であった。この受講者の受講後の高い満足度は、実証講座の有効性の一端を示すものとみることができる。

■障がい者スポーツ支援のスキル向上

「自己評価表」では、「スポーツを直接指導すること」「プロジェクトやイベントを運営すること」「プロジェクトやイベントを企画すること」「プロジェクトやイベントの成果を示すこと」という4つのスキルについて自己評価をしてもらった。その結果は、本編第3章3節で報告しているように、4つのスキルを構成する各小項目のいずれも、受講開始前と受講終了後ではプラスの方向に「できる」レベルが向上している。項目によって伸び幅に相違は認められるものの、全体としては、障がい者スポーツ支援に係るスキルの向上という一定の教育効果を確認することができた。

■多数の参加・協力によるスクーリング実習の実施

スクーリング実習についてみると、カリキュラム受講者は51名、スポーツ大会協力者(スポーツを実施した障がい者・児)は321名、昨年度の実施実績及び当初の計画を上回る人数規模での実施となった。また、関西(大阪府)、関東(東京都)、東海(静岡県)、北陸(石川県)という広範囲に及ぶ4つのエリアで計13回に亘り開催できた。eラーニングとコラボレーション支援環境を通して、これからも受講者を遠隔サポートしていく中で、スクーリング実習での学びの成果が各地で定着していくことを促進したい。

また、「実施報告」の「実施後フィードバック」からは、スクーリング実習での体験的な 学びから多くの受講者が障がい者スポーツ支援の楽しさや、支援者としての役割の大切さ を実感したとする声が読み取れる。定量的な評価はできないが、4 エリア各地の受講者に対 して障がい者スポーツ支援に係ることへの意欲を喚起できたことも大きな成果である。

■スクーリング実習での学びを支える e ラーニングによる自己学習

7月から提供が開始された e ラーニングは、当初は利用が少なかったものの、10月に入ってから徐々に利用者数、講義動画視聴回数が増加した。10月末時点のユニークな利用者数は 42名、12月末には 72名にまで増加した。また、視聴された講義動画のコマ数も累計で800を超える結果となった。その内訳を科目別でみてみると、「障がい者スポーツの指導と運営の実際」が抜きん出て多い。これらの科目は、スクーリング実習と直接的にリンクした内容を扱っており、多くの受講者が明確な目的意識を持って、この2科目を学んだものと推察される。その意味において、e ラーニングでの自己学習はスクーリング実習での体験的な学習を支援する一定の働きをなしていたといえるだろう。但し、一般的によく指摘されることではあるが、e ラーニングの学習頻度には利用者間での個人差が大きく、今回の場合もその傾向が見て取れる。デジタルデバイスに対する慣れの違いなど、その要因は複合的であるため解決は容易ではないが、スクーリング実習での動機づけを工夫するなどの個人差の縮小の余地は十分に残されているものと考えられる。

4.2. 課題とこれからの展開

上述のような取り組みの様々な成果を確かめることができたが、その一方で、コラボレーション支援環境の活性化は課題として残されることとなった。

平成28年度の事業では、コラボレーション支援環境の企画・設計と構築を行い、今年度の取り組みで初めて実運用に移行したが、当初に計画していたコミュニティの立ち上げ、目標とする利用者数については、ほぼクリアできた点は成果である。

一方で、実運用を通して今後改善を図っていかなければならない点も明らかとなった。その第一は、コラボレーション支援環境上での情報交換の活発化に向けた具体策の考案と実施である。今回は、スクーリング実習をはじめとするイベントの案内・告知や、eラーニング教材で使用している資料の公開・提供などを実施したが、多くの受講者に積極的に参加してもらうためには、学習意欲を喚起する多くのコンテンツを取りそろえるなどの工夫が必要である。またさらには、それらをタイムリーに受講者に周知する働きかけも不可欠となる。第二の点は、スクーリング実習との連携の強化である。ネットワーク上でのつながりを強めるためには、受講者やスポーツ大会協力者、コーチらが実際に対面する場とコラボレーション支援環境での交流を結び付けるような仕掛けも有効となるはずである。

第三としては、e ラーニングとの連携である。具体策としては、e ラーニングの学習ページにコラボレーション支援環境へのリンクを貼りつけ、e ラーニングでの学習とコラボレーション支援環境での情報共有・交換を直接的に結びつけるなどの方法が考えられる。その際、シングルサインンオンのしくみを実現すれば、e ラーニングと支援環境はシームレスにつながり、その利便性は格段に向上するものと期待できる。

4.3. 資料

〇 自己評価表

- 1. スポーツを直接指導することについて
- 2. プロジェクトやイベントを運営することについて
- 3. プロジェクトやイベントを企画することについて
- 4. プロジェクトやイベントの成果を示すことについて

〇 受講者アンケート

障がい者スポーツを実施するために必要な指導・運営・企画・効果判定 自己評価表

ユーザーD:【

1. スポーツを直接指導することについて

自己評価基準

| 基準 | 自分一人では全くできない,知らない | 先輩や周りの支援があればできる | 自分一人で出来る,知っている | かなりよく出来る,よく知っている | 人に指導できるほど出来る,知っている, 12345

項目	開始前	終了後	自己評価変化の要因
参加者の意思を尊重できる 1-1-1	5.4.3.2.1	5•4•3•2•1	
参加者(当事者)個別の特性を 知っている 1-1-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
自分自身がスポーツを楽しめる 1-2-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
広い視野を持てる 1-2-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
該当種目のルールを知っている 1-2-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
参加者が理解できる伝え方がで きる 1-2-4	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
参加者に合わせた対応が出来る 1-2-5	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
社会的学習理論に基づいた介入ができる(介入方法1) 1-3-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
情報処理の基本に基づいた介入 ができる(介入方法2) 1-3-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
入力レベルに基づいた介入ができる(介入方法3)1-3-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
処理レベルに基づいた介入ができる(介入方法4)1-3-4	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
送信レベルに基づいた介入ができる(介入方法5)1-3-5	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
リスク管理の知識がある 1-4-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
怪我や体調不良に適切に早急に 対応できる 1-4-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
リスク管理の視点から参加者の 現状を把握できる 1-4-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	

2. プロジェクトやイベントを運営することについて

自己評価基準
1: 自分一人では全くできない,知らない
2: 先輩や周りの支援があればできる
3: 自分一人で出来る,知っている
4: かなりよく出来る,よく知っている
5: 人に指導できるほど出来る,知っている,

項目	開始前	終了後	自己評価変化の要因
当日に向けて体調を整えること ができる 2-1-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
自身の役割のイメージができている 2-1-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
大会の運営方法を知っている 2-1-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
楽しめる環境が作れる 2-2-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
会場の気温や天候などの分析が できる 2-2-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
参加者に合わせてルールや方法 を調整できる 2-2-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
環境に合わせてルールや方法を 調整できる 2-2-4	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
指示された働きができる 2-3-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
チーム内の統制が取れる働きかけができる 2-3-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
参加者一人一人の状態に気を配れる 2-3-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
プロジェクト全体の統率がとれる 2-3-4	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
関係者との連携がとれる 2-3-5	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
次回への課題を具体化し, 改善 策を提示することができる 2-4-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
プロジェクトを継続して実施できる 2-4-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
実施後の振り返りができる 2-4-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	

プロジェクトやイベントを企画することについて

自己評価基準
1: 自分一人では全くできない,知らない
2: 先輩や周りの支援があればできる
3: 自分一人で出来る,知っている
4: かなりよく出来る,よく知っている
5: 人に指導できるほど出来る,知っている,

項目	開始前	終了後	自己評価変化の要因
ビジョン(具体的な姿)が描ける 3-1-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
実施するスポーツの特性を知っている(作業分析ができる) 3-1-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
障がい者スポーツに関連する情報(制度や現状など)がわかる (環境分析ができる1)3-1-3	5.4.3.2.1	5•4•3•2•1	
スポーツ実施に関連する情報 (場所や道具など)がわかる (環境分析ができる2) 3-1-4	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
人的資源を含めた実施地域の特性情報がわかる(環境分析ができる3) 3-1-5	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
障がい者に関連する施策や制度 などの情報がわかる(環境分析 ができる4)3-1-6	5.4.3.2.1	5•4•3•2•1	
実効ある企画会議を開催・運営できる 2-2-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
実施上の課題・ニーズを抽出で きる 2-2-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
行動計画書(具体的な企画書) を作成できる 2-2-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
第三者にプロジェクトの意義を 伝えることが出来る 2-3-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
スポンサー等への交渉,助成金 等の獲得ができる(必要経費を 準備できる)2-3-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
社会資源(ヒト,モノ,情報) をマネジメントできる 2-3-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
必要な資源や新たな実施方法を 開発できる 2-4-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
PDCAサイクルを運用できる 2-4-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
プロジェクトやイベントの実効ある広報ができる 2-4-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	

プロジェクトやイベントの成果を示すことについて

自己評価基準
1: 自分一人では全くできない,知らない
2: 先輩や周りの支援があればできる
3: 自分一人で出来る,知っている
4: かなりよく出来る,よく知っている
5: 人に指導できるほど出来る,知っている,

項目	開始前	終了後	自己評価変化の要因
障がい者スポーツと対象の特性 を知っている 4-1-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
研究方法の種類と方法を知って いる 4-1-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
対象者への倫理的配慮の視点を 持っている 4-1-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
研究モラルを守ることができる 4-1-4	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
疑問を研究命題にすることがで きる 4-2-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
文献検索で必要な情報を集める ことができる 4-2-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
バイアスの少ない研究デザイン を立案できる 4-2-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
必要な検査・測定法を選択できる 4-2-4	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
データに適した統計学的検討方 法を選択できる 4-2-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
研究計画書に沿って淡々と実行できる 4-3-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
検査・測定法を用いてデータを 取集できる 4-3-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
研究協力の同意がとれる 4-3-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
事業の効果に関する報告書が作 成できる 4-4-1	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
学会発表ができる 4-4-2	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	
第三者に事業の成果を伝えることができる 4-4-3	5•4•3•2•1	5•4•3•2•1	

すべての評価を終了した方へ

~アンケート協力のお願い~

今回は文部科学省委託事業「障害者スポーツ支援の専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する学び直しプログラムの開発とグローバル展開」にご協力を頂きありがとうございました。 心より感謝申し上げます。最後にですが、あなた様の年齢・性別、職種などの基本情報とEラーニングのコンテンツや実習に関するアンケートのご協力をお願いいたします。

1.	年齢と性別について
	① 年齢(歳) ② 性別:()
2.	職種について ① 理学療法士 ② 作業療法士 ③ その他()
3.	臨床現場での経験の期間について 臨床経験(ヶ月)
4.	本日の実習は何回目ですか?〇印をつけてください ① 参加したことはない ② 初めて ③ 2回目 ④ 3回目 ⑤ 3回目以上
5.	本日の経験や役割に〇印をつけてください ①事前準備 ②参加出迎え ③参加者への指導 ④参加者の補助 ⑤全体進行の把握⑥リスク管理緊急時の対応(けが等への対応) ⑦終了後の後片付けなど 8その他()
6.	実習受講の動機はどのようなことですか? 該当する項目すべてに〇印をつけて下さい ①今後の PT や OT の展開に必要な内容だから ②スキルアップしたいから ③以前から障害者スポーツに興味があったから ④受講を強く勧められたから ⑤eラーニングコンテンツを視聴して興味がわいたから ⑥その他 ()
7.	E-ラーニング教材の視聴について ① 全てのコンテンツを視聴した ② 半分以上を視聴した ③ ほとんど視聴しなかった
	②と③に答えた方は視聴できなかった理由を教えてください。 a. 時間がなかった b. 興味が湧かなかった c. 知っている内容ばかりであった d その他()

- 8. 実習受講の目的はどのようなことですか? 該当する項目すべてに〇印をつけて下さい。 ①eラーニングで学んだことを実践すること ②障害者スポーツの実際を経験してみること ③障害者を多面的に理解すること ④参加者へのスポーツを通した関わりを実践すること ⑤障害者スポーツイベントなどを企画・運営できる技能を修得すること ⑥その他(
- 9. 本日の実習で、あなたの受講目的は充足できましたか。
 - ①十分できた ②できた ③あまり出来なかった ④ほとんど出来なかった
- 10. 充足できた要因あるいは、できなかった要因をお聞かせください。

- 11. 実習を文化や言葉が違う国や地域で実施することは、自己の専門性の向上に役立つと思いますか?
 - ①かなり役立つと思う ②役立つと思う ③あまり役立つとは思わない ④役立たない
- 12. 国外での実習機会があれば参加したいと思いますか?
 - ①ぜひ参加したいと思う ②参加を検討したい ③参加したいとは思わない

ご協力ありがとうございました

平成29年度 文部科学省 専修学校による地域産業中核的人材養成事業 障害者スポーツの専門性を備えた理学療法士・作業療法士を養成する 学び直しプログラムの開発事業 事業成果報告書

平成30年2月 学校法人福田学園 大阪保健医療大学